男性と女性

精神分析

★ 第5巻・第4號 ★ 昭和12年 7月・8月 ★

主要項目

詳細目次は巻頭に

T・I・P・A・ VERLAG



東京精神分析學研究所出版部

（諸名家の批評）

大阪每日新聞・昭和十二年四月八日所載

高島平三郎

現時の我が國に於いて、精神分析を熱心に研究し、その純科學的原著を飜譯して紹介すると共に、又その通俗應用方面の著書を公にして、この學に貢獻してゐる篤學の士は、實に大槻憲二氏である。

氏は這回『新しき立身道』を著し、筆者に一本を寄せて批評を求められた。筆者は老來益々多忙で、なか／＼この種の書を通讀することが出來難いのであるが、本書は、初め餘儀なく手にしてお務めの積りで讀み出したが、だん／＼面白くなり、終に他の學會から頼まれて書かねばならぬ論文の期日を後らせて記者から抗議せられた程である。

×

本書は、精神分析の立場より、日常道德を講義體に記したもので、序論と本論との二部より成り、序論に於いては、一般道德の分析と、倫理と心理との關係が說いてあり、本論は第一講立身道德と現實的興味より、第十六講凡人强者道德に至るまで、各種の方面より各種の事實に就いて、面白く、新しき意味に於ける道德が說いてあ

る。なほ附錄として、運・鈍・根の分析考が加へられてゐるが何れも興味津々たる中に許多の敎訓を含んで居る。

×

序論は、殆ど純學說で、多少心理や哲學の素養の無い人には分り悪からう。又、精神分析に共鳴せぬ學者からは異論もあらう。が、之を熟讀すれば、その主義學說の如何に拘らず、何人も首肯するに違ひ無い、極めて穩健妥當な敎訓道德が說いてある。筆者は曾て、序論第二を丁酉倫理會に於いて著者から直接に聽き、當時質問もし、意見も述べたことであるが、その時から著者の說は突然聽けば奇矯のやうであるが、その根柢には堅實な妥當性のある事を認めてゐたが、今この著書全體を讀んでます〳〵その感を深くした。

×

從來の道學先生の說く、所謂形式的、因襲的道德を厭惡してゐた青年達も、この書を讀まば、必ず喜んでこの說を受納れるであらう。此の點より見て、筆者は本書を國民敎育又は中等敎育を受けて、將さに世に立たんとする青年男女に推薦すると共に、是等青年を指導する世の父兄敎育者、その他一般指導者の參考に、必讀の書として推薦したい。

東京日日新聞・大阪每日新聞

昭和十二年三月二十日所載

德富蘇峰

大槻憲二君の本著は、月並離れのしたる點が、先づ取柄であらうと思ふ。記者は心理學者でもなければ、所謂る精神分析なるものに就ても、何等の知識も持たない。されば本書の根柢を作す理論的方面は、他の評者に讓りその實際的方面には、假道學先生の架空的純道德的說法よりも、却て青年立身者に取りては、即時實踐す可き、意味ある敎訓を見出す。

假令へば、

西洋の諺「に正直は最上の政策」と云ふのがありますが……馬鹿正直は、厄介なものですから、尻尾を出さない限りで、時々は嘘もつくが、それは他人を陷れるやうな陰險な方途に用ゐない嘘で、大體に於て自他を公平に利して行かうと云ふ如き生活態度の人を、私は誠實のある人と云つてよからうと思ひます。

とある一節の如きは。所謂る佛者は方便と云ひ、兵家は調略と云ふ類にて、著者の心持は能く判るが、然も單純なる眞正直の讀者に取りては、或は其の本旨を誤解し、

飛んでもない間違ひを來すの虞なしとしない。

斯る問題を取扱ふには、硬くすれば硬きに失し、柔くすれば柔に過ぐるものだ。福澤翁の楠公權助論の如きも、六十餘年後の今日尚ほ作者の眞意を誤解するものがある。故に予は著者の爲めに老婆心ながら一言する。

然も讀んで、

> 結局、誠意、ある人とは、相手の立場や、利害をも考へることが出來。さうしてその立場や利害に即して、こちらの行動を定め、かくて相手に滿足を與へるが如き、さう云ふ人であると云ふことが出來ると思ひます。だから誠意とは要するに心理學的に云へば、自分を他人に同一化することの出來る能力であります。

との一節に至れば、雲を排して山を見るが如く、著者の眞意は自から分明だ。要するに著者の立身道は、常識立身道だ。

×

なほ本書中には、その實例として、信長、秀吉、家康を擧げ、新井白石や河村瑞軒を擧げ、加藤淸正や小西行長を擧げ、石田三成、伊達政宗等を擧げ。其の例證の中に、著者の論評がある。中にも明智光秀論の如きは、心理學的解剖の俎上に載せ來りて、頗る月並ならぬ意見を並べてゐる。

讀賣新聞・昭和十二年五月六日所載

JOAK講演課長　**多田不二**

本書は、その題名からして誰もがすぐ所謂名士の成功美談か、心得おくべし式の立身虎の卷であらうと思ふであらう。だが、これとそれとは實際上あまりに緣遠い。

こゝではまづ一度、他力本願的な、そんなあまい夢を微塵に打ち壞してゐる。そして總てを裸にひん剝き、ありのまゝの姿を街頭にさらけ出してゐるのだ。凡そこの種の目的を持つた書物で、これほど大膽に、しかも無殘に、人心の內部を解剖したものはないかも知れない。偶像をすつかり地上に引き下し粉々にうち碎いてその內臟を我々に見物させてゐる、道德も、良心も……。

この本は讀者自身の心の分析と對手の心の分析をも述べ、そこに立身出世のキーポイントを摑めと訓へてゐるのだ。

患者自身自ら局所を切開し、病根を處理せよと說く著者の態度は聊か無理な宣告を下す醫者のやうであるが、それは心の分裂を如何にして整へ、如何にしてより良き心の運用をなすべきかを自覺させることに目的を持つが故である。本書がこの種の他の本と特色を異にするとこ

ろは、此處にある。教へ諭す代りに讀者に反省を强ひて居る。卽ち反省の仕方とその活用を戰國武將の幾多の實例によつて說いてゐる。また河村瑞軒の生き方によつて說いて甚だ有益である。

要するに本書は從來の社會通念と非常にかけ隔つた多くの考へ方を藏してゐる。私は社會乃至人間に對する頗る興味ある、且つ實際的な觀察の仕方を此本から敎へられた。

本書の五大特色

一、舊道德を打破して科學的新道德を樹立せること

二、凡人もまた强者として生き得るとの明朗なる福音を述べたること。

三、光秀、秀吉、家康、政宗、その他戰國武將達を心理分析俎上に載せ、その心理を抉剔して讀物としても極めて面白きこと。

四、立身主義と成功主義とかの一致點と離反點とを明かにせること。

五、心理エネルギーの經濟政策を確立すべき方法を示せること。

目次概要

以上

男性と女性號・内容目次

『精神分析』第五巻・第四號

文藝・講座・相談・内外彙報・質疑

隔月刊行誌
定價五十錢
送料共

精神分析

半年 一圓五十錢
一年 三圓
送料共

昭和十二年五月六月　生理と心理　第五巻第三號

東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七
振替・東京七八八一七番

PROF. Dr. FREUD

WIEN, IX., BERGGASSE 19.

27. 3. 1937

Lieber Herr Ohtski

Ihre letzte Sendung brachte mir mehrere angenehme Überraschungen. Ich freue mich sehr zu hören, dass Sie die Vollendung der Übersetzungen in Angriff nehmen wollen. Wegen der Übersetzungsrechte wollen Sie sich mit unserem Verlag IX Berggasse 7 verständigen. Die Medaille finde ich künstlerisch sehr hübsch, der Kopf ist meinem nicht sehr ähnlich, aber wenigstens schöner als mein eigener und die Ähnlichkeit spielt weiter keine Rolle. Es würde uns interessieren zu erfahren wer der Freud ist, der den Preis gestiftet hat und wie er dazu komt.

Bei den Publikationen, die wir von Ihrer Seite erhalten, bedauern wir natürlich jedesmal dass wir so unwissend bleiben müssen, was sie enthalten. Es ist derzeit kein Japaner bei uns in Wien, den wir um eine Übersetzung bitten könnten. Würden Sie selbst nicht einige Übersetzungen übermitteln können, damit wir in die Lage kommen, Ihre Arbeiten zu würdigen? Wir werden sie bereitwillig in unseren Journalen abdrucken. Mit Dank u herzlichem Gruss

Ihr Freud

フロイド先生の近翰（彙報欄參照）



故ファイゲンバウム氏（彙報欄参照）

Dr. Dorian Feigenbaum †

精神分析

第五卷第四號・昭和十二年七・八月號

—男性と女性特輯號—

本誌の特色と意圖

一、關係者にはわが國に於ける斯學の諸權威を網羅してゐること。

一、海外斯學界と常に通信し、提挈し、またその活氣ある運動の詳細なる報道に努めてゐること。

一、分析學、精神病學、神經學、教育學、心理學、民俗學、宗教學、犯罪學に關係する諸方の研究室、學校、診療所、病院などを探訪して、その様子を讀者に紹介し双方の便を圖れること。

一、時事批評に力を注ぎ、新科學の立場より常に活潑に、社會諸方面の問題に示唆を與へつゝあること。

一、專門家のためのみならず、一般讀者のためにも『講座』と『語彙解說』と『アブフウブ』欄とを設けてゐること。

一、諸種の相談に應じて懇切なる答辯を與へてゐること。

一、新しい科學は新しい人材に俟つとの建前より、常に新人登用の用意を有すること。

一、歐洲斯學界の重要なる論文は常に飜譯紹介すること。

一、斯學は東洋的科學なりとの信條に基き、わが國に獨創的なる分析學の樹立に着々邁進しつゝあること。

男性及び女性の生物分析

大槻憲二

一、小序

神經症者の分析治療は、結果に於いて、本人の幼兒性の解消に終らなければならない。そこに至るべき過程は分析的（卽ち無意識を操作して）であるにしても、その意識的結果は、本人をして彼自身を生物人間として如實に（卽ち科學的に）認識せしめることに外ならないであらう。その意味に於いて私はハンガリーの分析學者故フェレンチー・サンドル（Ferenczi Sandor）の生物分析法に特別の興味を持つてゐる。

我等はこゝに男性及び女性の心理的差別を研究するに當り、フェレンチーの生物分析論の一節を紹介し得ることを喜びとする。次は、フェレンチーの理論を忠實に辿りつゝ、自分の管見を以てこれを補つたものである。この論述を辿つてフェレンチーの犀利なる頭腦と天稟の學才とに驚嘆しつゝ、科學的悟得の快味に胸裡の自ら淸爽なるを覺ゆるは、あながち我等の一團のみではあるまい。

二、動物の雌雄と人間の男女

精神分析學は何でもかんでも性慾で說明をするのだと云ふやうな批難が、いさゝか實際以上に誇張的に、斯學に對

して、今日なほ浴せかけられてゐるが、さう云ふ批難に對しては今日の我々は當然僻易するものではない。男女の性別に就いて語るのが、私の今日の望みであるから、この方面に於ける性問題を語ることは、必ずしも甚だしい冒險ではない。何となれば、男性及び女性の外觀並びにその心理的特質は、兩性々器の各々の機能の遙かなる效果であると云ふ事實を疑ひ得るものはないからである。實は、かゝる事實を確認することにかけては、生物學者は精神分析學者よりも早かつたからである。動物實驗の結果に徴すると、性の特質は性殖腺を除去したり植付けたりすることに依つてこれを無くしたり、或は異性に變換したりすることさへ出來るのである。性的特質に對する純粹に心理學的な影響さへも、生物學にとつて多少は分つてゐないことでもなかつた。假りに一例を擧げて見れば、性的機能を萎徴せしめられてゐる雄の鼠を生れた時から專ら雄ばかりの間におき、それを急に雌の鼠ばかりゐる籠の中に入れてやると、間もなくその鼠は雄としての傾向に內的にも外的にも變化を來たし、殊にその態度に變化を來たす。それは明かに雌の姿を見たり香を嗅いだりするためであるとスタイナハは云ふ。この場合に、心理的影響のために性的特質に變化を生じてゐると云つても、別に誇張ではない。もしこれに反對する人があるとすると、それは動物に心理的と呼ばれ得る如き屬性があると云ふことを全然認めない人々に依つてのみである。

確に、精神分析學は今日の生物學者等の未だ云はないところをまで云つてはゐる。フロイドは純粹に精神分析學的經驗からして、生物學では殆どよく分つてゐない隱微な本能問題に對して首尾よく光明を投じてゐる。彼は神經症者を分析することに依つて、人間に於いて性本能が如何にして始まり、「幼兒性感」が如何にして存在し、また性感が幼兒期と思春期との二期に亘つて開花しその中間に潜在期を介在せしめるかを明かにした。最後の、性的開花二期の問題に關しては、その後に至り生理學から裏付けを得た。解剖學的に調べて見ると、人間の性殖腺は胎內生活末期頃及び出產直後の頃に於いて相對的によく發育してをり、それからはまた相對的に發育が緩漫になるが、併し思春前期に至つてそれが增大するやうになる。このやうに、我々が普通に思春期と呼びならはしてゐるものは、實は性の第一期開花ではなくて第二期開花である。併し第一期開花に就いては、フロイド以前の人々は、思ひも寄らなかつたので

ある。

フロイドのこの一大發見に勇氣を得てフ　レンチーは百尺竿頭更に一歩をすゝめ、精神分析の觀察材料を利用し、リビドー說の助けを借りて、男女結合の行爲に就いての說明をなさんと企てたのである。それに就いてフェレンチーが第一に利用した說は「色感集中說」であつて、彼はこれを"Amphimixis of erotism"と名付けてゐる。吾人が普通性慾（Genitalität）と呼んでゐるものは、所謂部分本能、並びに發情諸帶域に於ける亢奮の集約せられたものである。兒童に於いてはそのあらゆる肉體器關、並びにそれ等諸器關の機能はそれを働かせることに依つて相當高い程度にまで滿足が得られるやうになつてゐる。例へば、口唇、肛門、皮膚面、眼球や筋肉の運動その他は、兒童がこれ等を用ゐることに依つてそこから相當の快感を得來るところのものである。併しこれ等の諸機關の間には生れて以來相當永年の間、何等の組織化が與へられてゐない。換言すれば、子供の自己色感はなほ無政府的である。その後、快樂獲得の努力は何らかの焦點の周りに集中せられて來る。所謂口唇性感並びに肛門・虐待的性感が始まるやうになると、早期の無政府狀態以上に出始めたことになるのである。そこでフェレンチーは、これ等の諸々の色慾が如何にして漸次に發展して統一せられるか、つまり性器中心の性慾となるかと云ふことを究めんとするやうになつた。

心理的抑壓の原型とも云ふべき肉體器關の抑壓と云ふものがあつて、それに依つて肉體諸器關は統制せられ、その統制に依つて能率が益々增進せられるやうな風に自己保存の用に諸器關が供せられる。始めに自由に流動してゐるリビドーの努力と抑壓せられたるリビドーの努力とは相互に混合せられる（そこで「集約（アムフイミクシス）」の名がある）。さうして快感の特殊な貯藏庫（卽ち性器）に集中せられ、そこから週期的に發散せしめられる。

正統派の動物學では性的機能並びにその他一切の機能を今日に至るもなほ專ら目的觀的にのみ考へてをり、從つて個人心理を重視する精神分析學的な考へ方とは甚だ隔たりがあつて、個人を分析的に研究して得た分析學徒の考へ方を受容れることは、さう云ふ正統派の動物學者等には不可能であるのは蓋し已むを得ないことであらう。分析學徒の考へ方と云ふのは、性器の機能は本來云はゞ「重荷を下して輕快になる」過程だと云ふことである。緊張感を造り出

すものを排泄する過程である。これを純粋に心理學的な言葉で云ふならば、快感を齎す活動を週期的に反復することである、さうしてこの反復には必ずしも種族保存と云ふことは、直接的に關係してゐると考へるには及ばないのである。

そこで次に問題になることは、正にこの種の活動が動物界の殆ど全般に亘つて、同じやうな性交の形式をとつて遍く反復せられてゐるのはどうしてゞあるかと云ふことである。この問題に對してたとへ假說的にでも答へるには、我々はいさゝか迂路を辿つて大膽な試みをなさねばならない。

三、性的結合の生物心理學的意義

フェレンチーは『現實感の發展段階』と云ふ論文の中で、生れたばかりの赤ん坊の最初の眠りは、彼が出生以前に存在した安泰なる狀態の寧ろ忠實なる複寫であると認めざるを得ないのだと論じてゐる。この睡眠狀態はそれ以後に續く無數度の睡眠狀態と同樣に、未出生狀態へ還元したいとの願望の幻覺的滿足を意味するものである。子供の覺醒生活に於いては、口唇道に依る滿足（吸付き）は肛門道に依る滿足（糞便排泄及び力の行使に於ける快感）と共に胎內狀態の淨福に對する現實界に於ける代償としての意味あるものである。性器的快感それ自身は本來的努力並びにその努力に依る滿足へと退行するものゝ如くである。さうしてこの退行に依つて滿足は幻覺的に、象徵的に、並びに現實的に、三者同時に得られるわけになるのである。現實的には、出生前の淨福狀態に新たに與り得るのはたゞ精子細胞のみである。性器それ自身に就いては、その活動の仕方が胎內復歸の象徵的な寫しになつてゐる。然るに性器以外の全身は胎內生活の幸福に與るのはたゞ幻覺の形に於いてのみであつて、それは宛も睡眠の場合に於けると同じである。それ故にオルガスムスはこの無意識幻覺に伴ふ情緒的狀態として考へられた。その無意識的幻覺は生れたての赤ん坊が彼の最初の睡眠に於いて、或は最初の食慾滿足の後に於いて經驗するところの幻覺に似たものであらう。

然るにこれまで生物學の方の性器機能觀に於いては、個人の死後に於ける生命の保存と云ふこと（つまり自己再生

への進歩的努力）をのみ知覺してゐるのであるが、我々はそれを認めることは認めるがそれと同時に、個人の純粋に主觀的な見地からしてそれよりも更に重要なのは、もつと本元的な平安狀態を恢したいとの努力（換言すれば、退歩的努力）がそこに働いてゐると云ふことを信ぜざるを得ないのである。

吾人はこゝまで性器的性慾觀を辿つて來たのであるから、更にこの考へ方を徹底させて見ずには居られない。併しそのやうな假定の上に假定を積上げることは如何にも受取りにくいことであり、よしんば受取るにしても餘程用心をしてからでないと駄目である。それ故に、以上述べて來た事柄を單に漠然たる理論であると考へる人々は、以下述べるところを單に空想的土臺の上に築かれたる上部構造に過ぎないと考へてもかまはない。そこで、フェレンチー流の種族發達史的な見方に卽した性器性慾觀を一種の童話的な形で次に紹介して見よう。

こゝにまづ、その表面が全部水に掩はれてゐる頃の地球を想像して御覽なさい。あらゆる動植物はまだ海水の環境に於いてその生存を續けてゐる。地理的及び雰圍氣的條件は、大洋の海底の部分々々が水面上に露出してゐると云ふ如き有樣である。乾燥地上に置かれた動植物は水氣のない空中にさらされた生存條件に降參して死滅するか、或はこれに順應するより外はない。就中、動植物類はその生存に必要なるガス——酸素及び炭酸ガス——を水中からでなく空中から獲得し來ることに慣らされざるを得ない。有脊椎動物中、我等の祖先として最も古い、且つ水棲動物として最も進化してゐる魚類に就いて暫く考察して見たい。次のやうなことは如何にも考へられ得ることであり、或る生物學者はそれを承認してゐるが、魚類中には幸運なのが居て、彼等は全然乾きゝつた地上でなく、淺い水の中に生きてゐることが出來るやうな境遇に置かれたものがあつたであらう。淺い水の中にゐれば空氣を呼吸することが出來、それは今や無用になつた腮で呼吸をせず、肺で呼吸をすることが出來るやうになる。

環境に順應したよりよき器關が出來るのは單に偶然的變化や習慣的實行のためのみでなく、强烈な意慾がそこにあるためだと云ふのが前からのフェレンチーの意見である。一つの場所から他の場所に移動することに依つて食物をあさる必要があつたゝめに、手足の如き移動のための特殊器關が發達したのだと考へられる。そこで魚のくせに地上を

跳ね歩き、從つて肺臟を以て呼吸するもの――卽ち蛙の類――が生ずるやうになつたのである。

ところで、事實に就いて見るに、右に擧げたやうな話が單にお伽話でないことの證據が擧げられるのである。蛙の發達を見ると、進化論の正しさを我々に證明するもの丶如くに、そこに二期の截然たる段階別が見られる。蛙の卵から蝌斗(おたまじやくし)が飛出し、魚のやうに喜ばしげに水中を泳ぎ廻り、鰓によつて呼吸をする。その後になつて肺臟が出來、地上の生活をすることが出來るやうになる。かくて蛙は水陸兩棲動物である。

次にフェレンチーは獨特の生物學的思辨を續ける。本誌第二卷第七號の『性交と受胎の生物分析』の中にも言及せられてあるやうに、水棲動物に於いては生殖は水中で行はれて母胎の中では行はれない。つまり、水棲動物に於いては眞の意味に於ける性的結合と云ふことは行はれないのみならず、從つて何ら外部的な性的裝置を具へてゐないのである。雌は卵を水中に生み落し、雄はその近くにゐてその卵に水中で白子をかける。魚類が水のなくなつた陸上に棲むやうになるや否や水陸兩棲類的となり、雄は雌の上でつかまつてゐるためにその拇指上に特殊の胼胝を生じ、後にはその魚類が爬虫類となるに及んで特殊の雄性器が生じ、かくて粘子雌をの胎内に送り届けてそこで首尾よく發達させるやうにするのである。爬蟲類が始まると共に、一切の陸上有脊椎動物は子宮内に於いて胎兒としての發展を閲するやうになつた。哺乳動物がその先行種族と異つてゐる點は、彼等の卵殼が特別に柔軟で、内に多量の液體を湛えてゐることである。そこで卵殼は出産の時に破れ(卵の形では體外に出ず)、母はその生れたてのものを自分の肉體の汁(母乳)を以て養ふのである。

四、精神分析と生物分析との相關

以上の如き生物學的の事實をなほ丶擧げて行くことは出來るが、こ丶らで百尺竿頭更に一歩を進めしめるものは精神分析的經驗である。この點に關してフェレンチーに考察の示唆を與へたものは、フロイドの『夢の解釋』であると云ふ。明かに出産を意味すると思はれるあらゆる夢、身ごもれる女に就いての夢の中には、水中から人間を救ひ出す

場面が随分にあるが、それ等の夢の影像又は夢の經驗は、出産と云ふことが水中から救ひ出すと云ふことゝ象徴的に同義であると云ふことを認めざる限り何とも說明がつかないのである。非常な困難に陷つてゐる人、不安な狀態に惱んでゐる人々の夢に於いても亦、水中からの救ひ出しと云ふことが願望充足的救助として夢の中に現れることがある。不安症候は出生と云ふ最初にして最大の不安と關係があると云ふフロイド說を讀者諸氏は嘗て讀まれたところであらうと思ふが、溺れることの危險から救ひ出される典型的な夢は、出産時の危險から幸にして救ひ出されることの象徴的顯現であると我々は考へないわけに行かない。

こゝまで考へた時、精神分析學的な考へ方が再び採用せられねばならなかつた。性交は或は幻覺的に、或は象徴的に、或は現實的になど種々な方途に於いて、出産又はそれ以前の時期への退行を意味するものであり得ると同樣に、出産並びにそれ以前の羊水中に於ける生存はそれ自身、地球上の一大變化並びにその變化に適應せんとの努力の有機的記憶象徴であるかも知れない。その努力とは、我々の種族上の祖先が陸上及び空氣中の生存に堪え得るために挑はねばならない努力であつたのだ。性交の中にはこのやうに、個人及び種族の兩方に襲ひかゝつたところのこの大變化の記憶的痕跡に就いての暗示が含まれてゐるのである。

右の如き假定は從來の正統派の科學的信條と全然正反對の何物かを含んでゐることは明かである。併し右は純粹に心理學的立場からの考察であつて、たゞそれを生理生物學的事實にあてはめたに過ぎない。併しこのやうな心理的見地から生理的見地への飛躍が實は單なる脫線であるか、或は普通に發見と呼ばれてゐるところの喜ばしき知識であるかどうか、未だ必ずしも確かではないが、併し後者の如く信じて差支へないとフェレンチーは斷定し、さうしてかゝる見方の內に新しき研究の道が開かれてをり、且つこの道を生物分析（Bioanalyse）の道と呼ぶことが出來ると云ふ。

現在の實例に於いて、これを生物分析的見地から考へて行くと、水中から救ひ出されて、そこに不安や救濟の感情が伴うてゐる夢の過程を解釋するとすれば、それは出産過程の遺傳的無意識的記憶痕跡だとせられ得るのみならず、また大洋後退の生物學的大變化並びにそれに適應せんとした時の記憶痕跡ともせられ得るのでないか。かくて個人的

な出産過程と種族的な大洋、大陸の變化過程とが、出産の夢の中に於いて錯綜せられてゐると解せられるのではないか。何となれば、出産は生物（赤兒）が大海（母胎）の中から上陸し、水棲動物の狀態から陸棲動物の狀態に移る過程を意味するものでなければならぬからである。『上陸第一步』は常に出産と救助と變化との象徵でなければならぬ。

五、男女性別の地球發達史的意義

こゝに新たな問題が起きて來る。然らば男女兩性はこの地理的外傷に對してそれ〴〵如何に反應してゐるかと云ふことである。併し、精神分析學的研究に照して見れば、この問題に對する答辯も必ずしも困難ではない。併しその答辯を與へる前に、我々は兩性の戀愛生活の發達に就いて、詳細な論及を試みておきたい。その方が理解を得るに便であらう。

極幼少時に於いては、男兒も女兒もその自己色感的享樂に於いては同樣な强烈度を示してゐた（例へば、乳房や手首を吸つたり、肛門・虐待的の性的滿足を得たり、或は自慰をさへ試みたりして）のであるが、女兒に於いては早期に男兒との葛藤を恐怖する形跡が見え始める。ところで、人間と云ふものが生理的にも心理的にも兩性的（ビセクシユアル）であり、男兒にも乳腺の痕跡が遺傳せられてあり、女兒にも男根の萎微した痕跡の殘つてゐることは、我々のよく知るところである。この男根は解剖學に於いては陰核（クリトリス）として知られてゐるものであつて、それは始めには比較的によく發育してゐるが、その後全身の發育と步調を合はせることが出來なくなる。女子心理を分析して見ると、亢奮の內部性器的帶域が移動し、始めは陰核に後に膣に於いて亢奮せられることが分る。然るに男子に於いては、男根（フアルス）は全身と步調を合せて發育し、常に性感の王座を占めてゐる。動物を觀察すると、彼等の兩性はその戀愛的活動を始める前に先づ鬪爭をする。その鬪爭は大抵は降伏の逃走と窮極的には雄に依る暴力的克服とに終つてゐる。人間の場合に於いても、求愛には鬪爭の要素が混和してゐる。文明人の間に於いては、この鬪爭的要素は固より非常に溫和な形に裝はれてあるにもせよ……。最初の性的行爲は人間に於いてはなほ血みどろな攻擊であつて、女子はこれを本能的に

拒否するのであるが、漸次それに慣れて行き、遂には滿足と幸福とをそれに覺えるやうになるのである。

ヘッケル（Haeckel）の反復說と云ふのは、個人の發展史は種族の發展史の簡略なる形に於ける反復であると云ふ說であるが、フェレンチーはこの反復說を奉じて、陸上生活に適應する間の男女兩性の關係を次のやうに考へてゐるのである。――

男女兩性に於いて、自分等の生殖細胞のために安全な保育所を、食物及び濕氣を供する生體の內部に（水中の生活が失はれたその代りに）作らうとの努力が眼覺めて來たらしい。さうして同時にこの生殖細胞と共に幸福な狀態を、少くとも象徵的に、幻覺的に頒前しようとの慾望が起きて來たらしいのである。從つて、男女兩性ともに男性の性器官を造り出し、さうしてそこに恐らくは驚くべき抗爭が生じたらしい。その抗爭と云ふのは、男女兩性の內何れが受胎の忍苦を受くべきか、性慾行爲の受働的な役割を負ふべきかとを決定せんとすることであつた。この抗爭に於いて、女性の方が屈伏したが、併しその代りに、受胎分娩の苦惱の中から如何にして女及び母親たることの幸福を形作るべきかを、その補償として理解することが出來るやうになつた。この說は非常に重要であるに拘らず讀者諸賢の腑に落ちにくい點もあらうかと思はれるから、なほ後に言及する機會があるであらうが、こゝでは雌が生理的にも心理的にも非常に錯綜したものであると云ふことを右の現象（が存在してゐるものと假定して）に依つて說明し得るのみならず、雌を（少くとも生理的に云つて）もつと微妙に分化した存在として、卽ちもつと錯綜した狀勢に適應するものとして照し出すことになると云ふに留めておきたい。雄は雌の上にその意志を強ひて加へ、またさうすることに依つて適應の勞務を自分に墦したのである。雄は雌よりも一層原始性を殘してゐるのである。然るに雌の方は、環境の困難に自分を適應させる道を知つたのみならず、雄の暴力に對しても善處するの道を知つたのである。このやうに雄が適應の勞務を自らに墦し、雌にのみその勞務を課し、雌をして一種の犧牲たらしめるところに人間の女性の男性に對する嫉視敵意の生物學的根元があるのではなからうか？

併し屈辱は雄の方にも及んで行くことになつた。さうしてそれを及ばしめたと思はれる外的刺戟は、少くともフェ

レンチーの意見では、これまた地球上の一大變化であつた。と云ふのは、地球の表面の大部分が氷と水とを以て新たに被はることになつた時代（幾度かの氷河時代）の事である。この氷河の災害に會つた各種生物の幾種かは、自己の形態を自分で造つてこの災害に善處しようと試みた。つまり、自己の保溫のために外部に厚い表皮を造つたのである。また別の種類の動物は、殊に人類の直前祖先としての動物、又は類人動物の如きは、頭腦の一層の發達並びに文明の創造に依つて彼等自身を救ひ、かくて困難な條件下に於いても自己保存をなすことが出來た。

今や我々はフロイドが、ダーギン及びロバートソン・スミス等諸先哲の假定に基き、精神分析の見地からして到達した一つの偉大な發見に、序ながら言及しておくべき場合であると信ずる。一切個人の發達に於いて所謂エディポス・コムプレクスが極めて重大なる意義を有し、健康者の性格の特徵もそこから由來し、神經症者の症候もその影響の下に形成せられるものであることは疑ふ餘地なきものと思はれる。母又は女を獲得する目的のために父に對して息子が徒らに反抗するが、それは完全なる失敗に終つた。如何なる息子も父親の如く、全部族に對して、自己の意志を押付けるほどには強くはない。さうして疚しき良心のために彼等は父親の權威と母親への尊敬とに立還り、それ等を再確立することを餘儀なくさせられる。各個人に於いてこの苦鬪は繰返され、而もみな同じ結果に終る。極早期幼兒時代の第一期性的開花はその直後に永き潛在期か續き、この潛在期こそは、フェレンチーに依ると、人類祖先が氷河時代に環境に適應せんとした努力、並びにその結果として人類文化を創造するに至つたその努力が各個人に於いて反復せられてゐるものであるらしいとせられるのである。

六、男女性格の性的意義

そこで問題になるのは、人類及び動物類の行動を觀察して、このやうな空想的と思はれる假定を裏付ける如き何らかの根據が發見せられるかどうかと云ふことである。精神分析學は屢々「性は爾餘一切生活の原型である」と云ふ。この原則に從ふと、個人の性並びにその性が發達して行く方向は、その人の全人格の特性に對して決定的な感化を及

ぼす。性に於いて自由なるものは、その人の他方面の活動に於いても大膽であり決斷的である。傳說の云ふところに依ると、ドン・ホアンは色道の猛者であつたばかりでなく、武道に於いても相當の達人であつたらしく、屢々人々の血を流したと云ふことであるが、それは偶然の事とも思へない。併しながらこの攻撃的傾向が、父親とのエディポス的葛藤に於いて偶發する屈伏（去勢不安）に依つて弱められることになつたのは、男性心理一般の性格を示すものである。然るに、女に於いてはたゞ美と云ふことのみが武器であつて、なほその上に數へれば親切と謙讓とがその性格となつてゐる。これ等並びにこれ等と類似の性格的特徵は、性特質を第一次的とすれば、第二次的のものであつて、右に擧げた三者はその第二次的のものと云ふことが出來るであらう。これ等になほ附加して云ふならば、男性に於いては攻撃的傾向がその第一次的（卽ち性的）特質とすれば、その比較的により發達した體力及び頭腦力が第二次的特質と云ふことが出來るであらう。それ故に、個人の發達史に於ける性的分化史を一般的な意味に利用して、男女鬪爭の樣相に就いての自說の裏付けにしようと云ふのがフェレンチーの意圖である。

こゝに於いてか、男女兩性の內何れが優性であり、何れが劣性であるかと云ふ舊い問題がまたもや蒸返されることは明かである。この問題に對しては精神分析學者の立場からは明白な答辯を與へるべき限りでないと思はれる。既に述べた如く、女性生理は男性生理よりも一層微妙に分化せられてゐる。女性の方が男性よりも生れながらにして賢明であり善良である。その補ひとして男性はその知力並びに道德的超自我を一層著しく發達させることに依りその野性力を制御して行かなければならない。女性は一般的な意味では道德的感情が一層微妙であり、審美的感覺も洗練せられてをり「常識」にも富んでゐると云へやうが、男性は恐らく彼自身のより强大なる原始性に對する保護策として、論理、倫理、審美の嚴重な法則を造り上げた。女の方は、原始性がそれほど强大でないから、論理、倫理、審美の諸法則を嚴重に打樹てるには及ばないのである。併し女の生理的適應は男の心理的適應と同樣、十分にうまく行つてゐるとは考へられないのである。

右のやうに云つたからとて、女の知力が男の知力の一般水準を遙かに越えてゐる場合が全然ないと云はうとしてゐ

るのでないことは固よりである。實は、多くの女の場合に於いて「男性的」活動に從事せんとの傾向は神經症的に條件づけられてゐることが屢々であるのだ。フロイドの近年の研究によれば、所謂「男性コムプレクス」は女の神經症の大多數の酵母的コムプレクスであり、またその冷感症の原因の大半でもあると云ふことである。フェレンチーは生物分析の立場から更に一步を進めて、そこには幼兒時代に於ける男女兩性分化の苦鬪のみならず、大海が干上つて、地球上に大變化が起きた時代に於ける男女兩性分化の苦鬪の有樣が退行的に再現してゐると見ようとするのである。さうしてさう云ふ見方はこれを證明すべき方法に於いて困難であるとは云へ、これを否定すべき理由も我々は持合はさないのである。多くの神經症的婦人は彼等が男性として生れ來らざりし事實（男性器羨望）を何とか處理し得ざる限り、その症候を棄てることが出來ないものであるが、それは丁度、神經症の男子がそのエディポス的立場を分析によつて何とか處理しなければ健康になれないのと同樣である。

暗示を與へることゝ催眠術をかけることゝは心理學的に同じ狀態であることは既に人々のよく知るところであるが、他人を制御するには威嚇か誘惑かの二途あるのみと考へられる。フェレンチーはこれ等をそれ〴〵に父親的催眠法及び母親的催眠法と名付けてゐる。戀愛とは相互に催眠術をかけ合つた狀態だと云ふことが出來よう。その狀態に於いて、兩性は各々その武器を振ひ、男は體力、知力及び精神力を以てその情緖を印象し、女は美及びその他の力を以て柔よく剛を制するのである。オルガスムスの睡眠的な沒意識狀態に於いて、兩性のこの戰ひは一時的休戰狀態に入り、男女兩性は共に慾望及び鬪爭の兩方から放縱せられた幼兒性の淨福なる一瞬間を享受するのである。

老齡に達すると性別は或る程度まで撥無せられる。どうやら生殖腺機能が低下する結果としてか、女子の聲はやゝ太くなり、時には鬚髯を生ずる傾向さへある。併し男子も亦その男性的な外貌及び性格の多くを失ひ、かくて兩性ともにその兩性具有性を幼兒期及び老年期に於いて一層顯著に露示するやうになると云ふことが出來よう。

男子にとつて父性が重要であるよりも女子にとつて母性は一層重要であるから、女子は多婚性（一妻多夫的結婚への傾向）に乏しいと或る意味で云へないこともない。多くの人々は好んで女子を母親型と色慾至上主義型に類別する

が、これは、精神分析學的觀察に從へば、文明の壓迫によつて感傷愛と肉感愛とを峻別しなければならなくなつたことを示すものに外ならない。この峻別がもしあまりに極端な嚴格さを以て要求せられると、結婚生活に於いてこれ等二つの衝動を正常に混融せしめることが男子にとつて困難になつて來る。

以上述べ來つた一聯の思想を支持する多少の材料として、フェレンチーは更に進んで精神分析人類學の分野に於ける多少の發見に言及してゐる。殆ど一切の原始民族は、何れの時代かに於いて行はれたところの男根切斷的儀式の遺風として見るより外なき風習を保有してゐる。かゝる儀式風習の最後の殘存として今日なほ見られ得るものは割禮である。これは太古に於いて、父親が息子達の上に加へた懲罰又は威嚇の武器であつたことは殆ど疑ひの餘地がない。父親の懲罰力に對して息子たちが屈伏することは、所謂去勢（男根切斷）コムプレクスとして結果してゐる。男根は快樂の貯藏庫であると云ふことは前に詳しく述べて來たと思ふが、それを想起すれば、性特質の發達に於いて男性コムプレクス及び去勢コムプレクスがそのやうに大きな役割を果すと云ふことはこれを信じないわけに行かない。またこれ等コムプレクスの解消する以前の何らかの段階に於ける定着、又はその段階への退行があらゆる神經症の根柢に横たはつてゐると云ふことは、これを信じないわけに行かない。女子の場合に於いては、これが去勢の劣等感又は怨恨、嫉妬、羨望として、その性的並びに性格的特質を形成するのである。（完）

女性の對男性心理（ヒッチマン、ベルグラー共著）

高水力太郎譯

右はギイン精神分析移動診療所長エドアルト・ヒッチマン及びエドムント・ベルグラー兩ドクトルの共著『婦人の冷感症・その本質とその取扱』（„Die Geschlechtskälte der Frau, Ihr Wesen und ihre Behandlung,“ von Dr. E. Hitschmann und Dr. E. Bergler, 1934）の緒論を全譯したるものである。やがてその本論の全部を譯述する日の近からむことを願つてゐる。本誌本號所載大槻氏紹介のフェレンチーの說と併讀せらるれば、兩者一致するところも多く甚だ興味あるものと思はれる。かう云ふ方面の研究は精神分析學以外の方法では絕對に齒が立たず、從つて何人も試みてゐないのであるから、讀者諸氏は十分の關心を以て精讀せられむことを希ふ。（譯者）

×

女性と云ふものはその性滿足に於いて多少の差控へをするものであると云ふのが、公然の祕密となつてゐる。殊にその滿足への自然的要求を差控へさせるものは婦人に屢々あり勝ちな性的冷感症である。フロイドの推量に依れば、その原因は「攻擊慾の生物學的目的を果たすことが男性に委任せられてあつて、それに對する女性の應諾如何と云ふことゝは獨立的になつてゐると云ふ」點にあるとなつてゐる。

動物に就いて比較生理學的に研究して見ると、この事が確かめられる。ハムブルグの醫師エルカン（R. Elkan）は

或る近著の中で主張して曰く、雌の方に性的恍惚境があると云ふことは證明がつくにしても、それは動物界に於いては全く特殊な例外であると。雄がその精液を雌に注入する以前に、雌が性的行爲から逃げ出すことのないやうにと云ふ風に、自然は配慮してゐるのである。併しながらこの目的のために雌には動機として快感を與へず、雄の方に、雌がもし逃出さうとするならば、雌の動物を性的行爲の中へ引き摺り込むことの出來る力をその性器又は性器以外の部分に具へしめるのである。

このやうに、性器又は性器以外に强制的な組織を具へてゐることはあらゆる種族の雄に於いてあまねく證明せられ得ることであつて、それはエルカンが動物の多くの圖に依つて證明を與へてゐる通りである。動物に四肢が生えてからは、强制的組織は退化して了つたか、或は消滅して了つた。たゞ例外（その例外が、この場合、一般的な證明となるのであるが）は、二種の動物（有骨魚類と白鳥と）である。これ等二種に於いては、雌の動物にもし心理感覺的反射（卽ち恍惚境）が與へられてゐなかつたならば性的行爲には入らないであらう。故に、これ等の場合に於いては、雌の恍惚境は目的觀的に理解せられ得るのである。でなければ、その恍惚境なるものは無駄なことになる。何となれば、雌は何も別に射出せねばならぬことはなく、而も雄の方から强制せられてゐるのであるから。このやうに雄の動物に於いてその性的態度は旣に下等動物時代に於いて十分に確立せられてあるのだが、雌の方には、それが殆ど相當高等の動物に至るまで缺如してゐる。かう云ふ次第であるから、生物學的に雌の恍惚境の進化史的前階を發見することは不可能である。

このやうな基礎の不十分な、極端に悲觀的な生物學見地を精神分析學者として我々はそのまゝに受容れるわけには行かない。恍惚狀態（オルガスムス）は實際には「女の自然性」ではないのであらうか。恍惚境なるものはたゞ人間になつてから始めてその性交の價値を高めんとする結果として獲得せられた特性と見るべきであらうか。そこに一切の形態學的な根據がなく、一切の生理學的の必然性がなく、目的觀的に理解が出來ないからと云ふのでさう云へるであらうか。

今から三千年前のインドの戀愛敎科書カーマスートラムに於いて、婦人の恍惚境が屢々只、男性の技巧的な方法に

依つてのみ齎らされてゐると云ふこと、原始人たちも刺戟を强める如き附加物をペニスに附することに依つてのみそれを果したと云ふこと、これに依つて見ると古もなほ今日の如く、西洋に於いても亦東洋に於けるが如く、十分にその感覺のある女もゐたではあらうが、冷感の女もゐたことが分るのである。

一般人よりも自由な考へを持ち、性的の力强く、その方の理解も十分にある男子と性的關係に入つて――或はまた處置法の場合で云ふならば、透徹した精神分析を受けて――それでもなほ不感であると云ふが如きは、稀なる例外である。かくの如きものは、體質的條件ある例外であり、そこに器質的要素があると、フロイドは云つてゐる。

性的冷感症の大部分の場合にして、結婚の間に、或は第二の夫に依つて、或は子供の生れることに依つて、或は心理的處置法に依つて、治癒せられ得るものは、その原因がたゞ心理的に條件づけられてゐるのだと云ふことが分るのである。

自慰、と云つても大抵はクリトリスに於ける自慰に依つて恍惚境に入るのは、旣に女兒に於いて極めて一般的に見られることである。また夜中に於いて粘液の射出を見ることは婦人に於いて、否處女に於いてさへも、あることである。冷感症の心理的契機、例へばリビドー發展の成り行きから起るもの、女の男性コムプレクス的願望から起るもの、發達過程中に婦人の主要な性的帶域が交替することから起るもの、同性愛的傾向及び變態的傾向から起るもの、不安感情、罪惡感情、嫌惡感情から起るもの、最後に相手たる男性の不能のために起るものなどいろ〳〵であるが、これ等は何れも細かく取調べて見なければならないものである。

エルカンの研究の結果を紹介したがあのやうな風に考へて見ると、女には性的恍惚と云ふものが考へられないばかりでなく、性的要求なるものが抑々あるかどうかと云ふことが考へられなくなる。が、男に於ける如く女にも生殖腺なるものがあつて、それに依つて彼女の有機體は不斷に色慾的亢奮を與へられてゐるのである。

併し女にはその全生涯を擧げて、その若い頃に受けた敎育（性慾の拒否）を貫徹すること――これは男子には殆ど不可能である――に成功するものが澤山にあると云ふことを我々は知つてゐる。

女のリビドー發展の過程を考へるとこのことは一層よく說明がつくのであるが、それは後に讓るとして、これまでは冷感症的な婦人にしてその性的禁制を失ひ得る可能性を、それを精神分析的處置に依つて克服し得る可能性を、利用したものは甚だ少なかつたのである。性的冷感症が治るのだと云ふこと（それを知らせることが吾人の仕事でもあるのだが）が一般に知られた曉には、治療に努めるやうになるのは名譽心の高い女、夫を羨望してゐる女、或は失望してゐる夫から處置を受けよと勸められた妻ばかりではないであらう。我々の母親やその祖先の時代には男女兩性間の性的連絡をつけると云ふやうなことは殆ど考へられてゐなかつたのであるが、未來は多分さう云ふ傾向に進んで行くであらうと思はれる。

婦人の性的冷感症を心理學的に辿つて見ると云ふことは、まだ十分になし遂げられてはゐない。不感症的な妻の劣等感、夫がそのために彼女を低く扱ふこと、これ等二つのために結婚生活の間、妻は不自由な心持、依屬的な心持で生きてゐることになるであらう。「寺院の中で沈默を守る」ことは殊に女らしいことであるが、これは性的なことには關係なく云はれてゐるのである。氣の毒な妻たちは、自分の性感が十分に誘導せられ發達してゐないために、夫が相對的に不能になつてゐるのだと云ふことを知らない場合が如何にも屢々である。夫はまた夫で、自分が不能であることを十分に意識してゐない場合がある。不能の夫は不感の妻の秘密をあまり人には洩らさない。それは只、彼にとつて不愉快なだけである。然るにそれに反し、その結婚以前に他の女に依つて十分に性的滿足を敎へられてゐる男は、容易に不忠誠になり勝ちであり、性的知識のある、冷感ならぬ女に就いて古き快樂を求めるやうになる。離婚、別居の話は屢々兩方から持出される。不感症の妻は得てして寂しさうな、見捨てられたやうな、欺かれたやうな、神經症的な、憂鬱な、つまり病的な妻になり勝ちなのである。

ドレースデンの婦人科醫ケーラー敎授（Prof. Kolrer）はその好著『不姙症の原因及び取扱法』（一九二二年）の中で、婦人の性生活の障害、殊に冷感を論じてゐる。敎授の主張するところに依ると、幾月幾年もの間オルガスムスを經驗しないでゐるとその結果は甚だ厄介なことゝなり、解剖的にも病理的な變革を來たし、婦人特有の骨盤の機構に

症候を生じ、神經は異常となり、遂には姙娠の困難にまで導いて行くと云ふ。ケーラーはこのやうに性生活の障害を來たしてゐる患者の一覽表を作製してゐる。ケーラーの云ふところによると彼等に對する診斷と取扱法とは大抵の場合誤つてゐるのであるが、それは何故であるかと云ふに、主として、過去の性問題の想起せられることを羞恥し、それを嫌惡するためであると云ふ。この練達堪能な婦人科專門醫家の與へた一覽表を見ると、次のやうな症狀が舉げられてゐる。——恥部の痒疹。挿入、摩擦、月經時などの苦痛。あらゆる種類の子宮の苦痛。腰部の苦痛。尿意の屡々なる催し。經血過少又は過多。子宮の肥大。筋腫の發生。* 痔疾など。

註 * ケーラーの書中に說くところに依ると、結婚して不感症ならぬ婦人には子宮の筋腫は生じない。凡そ筋腫を病んでゐる婦人は永年の間性生活に障害のある者であることを證してゐると。

さう云ふ次第であるから、婦人科の手術を行つて見ても何の意義もなく、效果もないと云ふ場合が隨分に澤山にある。かくて胃神經症、心臟神經症、腸神經症、性的神經衰弱、ヒステリーなどが起きるのである。併しその原因は大抵誤つて診斷せられる。不安狀態又は憂鬱狀態が生ずる。衰弱、倦怠、無氣力、眩暈感情狀態、冷え込み、不眠、憔悴などがそれに伴ふ。始終頭痛がしたり、ポケットにピラミドンを入れたり、寢床に湯たんぽを入れたりするのは、性的に弱い者の型として誰知らぬものもない。このやうに結婚生活に於いて性的滿足を十分に味はない一聯の婦人が病氣になるものとすれば、婦人の冷感症と云ふことが大いに世人の注目を索いて然るべきものであることは當然であらう。事實上、婦人は破瓜せられた後に始めて、我々が性慾と呼ぶところのものを知るやうになるのが正常である。が、婦人の性生活と云ふ以上は、分娩や授乳までも包括させなければならない。

こゝで序ながら云つておきたいことは、民衆の間の多くのより原始的な婦人たちが元來不感症でありながら、さうして子供が次々と生れてもそれでもやはり不感症でありながら（性の喜びなるものを廣く知らないためもあつて）神經症にもならず、病氣にもならず、無事にその一生を終ると云ふのが少からずあると云ふことである。さう云ふ婦人も感傷愛的な、喜びの感情を行爲の間に味はないのではないが、併し自分では、性交なるものは男だけの喜ぶものだ

と云ふ風にきめてゐるのだ。「感傷愛的な、母親的な施與の氣持で性交に入り得る」女は幸だと、ギインの女流分析者ヘレーネ・ドイチ女史は云つてゐる。彼虐性的な本能力を、性交の目的のために利用するのだからと云ふ理由である。もしそれでかゝる婦人たちが病氣にならないとすると、彼女等の「正常さ」（ともし云ひ得るならば）が問題となる。彼女等は常に無氣力と諦めの内に生きてゐるのではないのだらうか？　彼女等はその氣分の中に冷感症への素因をひろげてゐるのではないだらうか？　彼女はその行動に何かと禁制を覺えてゐるのではないだらうか？　何となく偏屈なのではないだらうか？　始終他人と衝突したりいら〳〵したりしてゐるのではないだらうか？

さう云ふ人々の型を擧げて見ると次のやうになる。——一、極端に潔癖で慾張り（肛門性格的）で、經濟のことにばかり氣を奪はれてゐる家庭婦人。二、あまりに男性的に昇華的で、精神的に落着きがなく、何かやれさうなことは何でも試みて見る名譽心の強い婦人。三、常に新しい男たちを身邊に引き寄せ、情交關係を作らうとしてゐる如き婦人。自分に滿足を與へてくれる男を徒らに待望しつゝ、冷感からして反對に媚態（コケツト）的になる婦人。四、神秘的傾向の性癖があつて、他方面に於ける優越を求めようとしてゐる婦人。五、屡々ある型で、この型の婦人はトランプ遊びや、着物のために大金を出すことや、一人旅することや、などに依つて自分の不滿足の償ひとしてゐる。六、被虐性的に惱んでゐる婦人、何もかも諦めてゐる婦人、かう云ふ型の人は結婚しても罪障感と苦惱を得るのみであることをよく知つてゐる。七、その夫を常に何とかかんとか批難してゐる婦人、世間へ出ると常に人の面前で亭主をこき下してゐる婦人、その理由の何たるかを自分でも知らないで。八、戀愛や結婚の不滿をその子供への溺愛に依つて償ひ、かくて子供を駄々つ子、神經症の子供にしてゐる婦人。九、引込思案の婦人で、沈默家で、罪障感で自己滿足してゐる。性交に關してもその調子である。十、「子供つぽい女」の型、その他。

偏屈、不平、嘘つき、家庭内に於ける乾いた雰圍氣、生活の喜びの缺けてゐること、人生觀が無意識的に片寄つてゐること、世間知らず、人間知らずであることなど。これ等の傾向のために彼女等は世間の人々から同情や同感を持たれない。もしかゝる傾向を脱する道があるならば、その道を進んで行かなければならない。その道を辿ることに依

つて婦人は完全に婦人となるのである。從つてそれがために結婚生活に入ることの要求が生じて來、結婚生活の意義も高く見られることになる。婦人解放運動につきものゝ笑ふべき精神的腫物は消散してしまふ。と云つても、婦人の冷感症は婦人ばかりの責任ではなく、半ば男の弱さの責任でもあるので、體操の元祖フリードリヒ・ルドギヒ・ヤーン（F. L. Jahn）の云つたやうに、「男が男らしくあれば、女は自然女らしくなるのだ。」

より正確に云ふならば、右に擧げた諸々の型は或る部分、冷感症の結果としてのみは見られない、寧ろ男性コムプレクスの結果と見られねばならないのである。これ等の絶望感、劣等感、憎惡慾、復讐慾などに就いてはもつと精しく説かなければならないが、只今はその場合でない。たゞ婦人が自分の身體について不完全であるとの感情（去勢コムプレクス）を持つてゐるために、その不完全を補償しようとの努力をすると云ふことだけは明かに云つておかなければならない。婦人は外面を重視し飾り立て、想像上の肉體的缺陷の（卽ち自己醜惡視の）コムプレクスがあると云ふことを云つておかなければならない。かう云ふコムプレクスあるために胸のあたりや何かを無暗に飾り立て、鼻の頭を白粉などで强調するやうになる。また男性器代償として種々なものを蒐集し、萬引癖、盗癖が起きることがある。これ等の特徴はこれを「補足コムプレクス」と名付けることが出來よう。

缺乏からして德を造らうとの試みに依り、男に反抗する婦人は別の途に進むやうになつた。例へばシカゴの女流トルトル・アリス・ストクハムは『結婚改造』と題する一書を著し、その中で新しい形式の性交を提唱してゐる。卽ちその性交に於いてはオルガスムスには達しないで、性的結合を全然意志のまゝにしておくのである。このやうな方法を實行することに依つて、「超越的な生活からの幻想、精神的歡喜」がその間に生ずると云ふのである。

最後に附言しておきたいことは、婦人が戀愛關係に入ればオルガスムス的滿足はその自然的要素として當然求められなければならないであらう、さうしてたゞ精神的原因のみが禁制的に働いてゐる大部分の場合に對しては、婦人等をしてその性的正常能力を恢復せしめるには精神分析の力が有效であると云ふことである。（完）

性生活に於ける男女の對立

延島英一

一

人間の性生活には、性慾充足機能と生殖機能の二つの機能が認められる。此二つの機能は獨立のものであつて、男でも女でも、計畫的な生殖行爲として性行爲を營む場合は極めて稀なのである。大抵の場合、性行爲の目的は性的慾望の充足である。だが生理學的にいへば、此二つの機能は密接に連結してゐるのである。

此事實から出發して、性行爲は生殖本能の表現だといふものがある。例へば社會學者ルマリエは『社會學提要』(一九三三年刊)の中で、人間をして性行爲を營ましめるものは、「存續の絕對的要求」、「種存續の根本的必要」だといつてゐる。(同書三十四―五頁)斯ういふことは所謂道學者が得てして言ひたがることだが、しかし人間が性行爲を同性間で果す實例は、古今東西枚擧に遑がないのである。同性愛や自慰を、生殖本能の表現、種存續の必要行爲と見るものはあるまい。此場合同性愛や自慰は、生殖本能の頽廢的表現だと論者はいふかも知れぬが、性慾そのものゝ科學的研究は、かゝる異論を許さないのである。フロイドは次の如くいつてゐる。

「精神分析は、同性愛者を特別な性質を有する一群として他の人々から區別することには斷然與しない。明かに外に見えてゐるもの以外の性的亢奮をも研究して見て、人間は誰でも同性的對象を選び得ること、誰でも實際それを無

意識裡に行つてゐることを精神分析は發見してゐる。……精神分析的の意味に於ては、男が女に對してのみ專らなる性的興味を持つといふことは、自明で說明を要せぬことではないのである。性的行爲が何れかに確定されるのは思春期以後のことで、それが如何なる素因に基くか未だ不明ではあるが、其あるものは素質的、あるものは偶然的なものである。」（『性慾論・禁制論』十三—四頁）

人間の性的亢奮を生殖本能のみを以て說明出來ないことは明かである。然るに或種の人々は、如何なる無理をしても此兩者を結びつけやうとするのであるが、それに關してフロイドは次の如く述べてゐる。

「古代の戀愛生活と現代の戀愛生活の最も著しい相違は、古代人は衝動そのものに力點を置き、現代人は對象に力點を置く點にある。古代人は本能を尊び、それによつて劣等な對象を高めんとしてゐるが、現代人は本能の活動としては蔑視し、たゞ對象の價値によつて本能に默許を與へるに過ぎない。」（前掲書三十頁）

卽ち現代人は、性的慾望を自分が有してゐるといふことは恥ぢてゐるのである。私は此恥辱感の原因を、羞恥心や社會的環境のみに歸するのは、少しく當を失してゐると考へるのである。誰でも經驗によつて、性的慾望は人間の慾望の中で最も利已的な慾望であることを知つてゐる。性的慾望は極めて「非社會的」である。此自覺は性に關する一切の事實及知識に對して、重大な個人的及社會的抑壓を發生せしめずには置かないのである。從つて又性的慾望及行爲を、利已的、非社會的でなく、利他的、社會的性質の慾望及表現として現す學說や藝術が、社會の歡迎を受けるのは不思議とするに足りない。勿論此種の學說や藝術に偉大なものがないのは當然であるが、しかしそれが社會生活の中で常に需要されてゐることは疑ふことが出來ないのである。

二

男性の性的慾望の中には、殊に此利已的慾望の働いてゐることが顯著に見られる。どんなに女を愛し、崇め、敬ひ尊んでゐる男でも、一瞬の快樂の爲に其戀人に九ケ月間の生理的、心理的重荷を負はせた上、更に生死の危險に彼女

を瀕せしめることを決して躊躇しない。もし戀人に生ずる苦痛と危險に對する勞りから、性行爲を躊躇する男があつたら、それは正しい意味の男性ではないといはねばならぬ。

更に性行爲そのものが甚だしく暴力的樣相を帶びてゐる。女は男にとつては種々なる手段を盡して征服すべき對象である。そして又女性側でも、性行爲を以て男性による女性の征服と觀じてゐる。そして此觀念から女性が男性に怨恨を懷くのを妨げる爲に、人類は歷史的に種々なる制度を設けて來たのである。（フロイド『分析戀愛論』三十六—六十四頁）

男性の性的慾望を分析すると、激烈な衝動性、攻擊性、殘忍性などの他に、强烈な支配慾の存在が目立つ。それは性的對象を肉體的に獨占するだけでは滿足せず、精神的な服從をも强ひずにはゐられないのである。故に性行爲の開始と共に、必然男性と女性との間には勝者敗者の關係が成立せざるを得ない。

生命を奪ふことの戰慄は、生命を與へることの戰慄と同一であると歌つた詩人がある。事實科學的にも、殺人行爲と性行爲に於ける衝動の性質は、基本的には同一であることが證明されてゐる。フロイドはかういつてゐる。

「能動的アルゴラニイ、卽ち加虐的傾向が常態者に存してゐることは、容易く證明出來る。大抵の人間の性本能は攻擊的要素、或は性的對象を征服したがる傾向を含んでゐるが、生物學はこれを誘惑以外の方法で對象の抵抗を克服する傾向といふであらう。加虐性は、此性的本能の攻擊的要素の過度に發達したものに他ならない。」（『性慾論・禁制論』四十二頁）「殘忍性と性的衝動の關係の密接なことは、人類文明史の敎へる通りである。攻擊は性的衝動と混合してゐる。」（同四十四頁）「「子供は一般に殘忍な傾向を有してゐるが、それは憐愍の情といふものは比較的遲れて發達するので、他人の苦痛に對する思ひ遣りで所有慾の抑制されることが未だ生じないからである。此加虐的傾向は權力本能から生ずるものである。動物や友達に目立つて殘忍な子供は、性的帶域の强度且つ早熟な活動を經驗してゐる子供と見られるのである。」（同書九十六頁）

性的衝動と殘忍性の密接な關聯を强調するのは、ユダヤ人のフロイドばかりではない。征服と獨占、卽ち權力慾と

所有慾が最も强度に性的本能に胚胎してゐることは、有ゆる人種の心理學者、精神病學者の殆んど一致してゐる見解である。

三

性的慾望及衝動が、文明化し進步した人類にとつて如何に恥づべきものであるかは、多言を要しない。それは利己的、非社會的であるばかりでなく、反社會的でさへある。其慾望は、一路征服と所有に向つて突進する。大抵の人は、文明や進步が、卽ち社會生活の發達がかゝる突進から生れたとは考へない。文明や進步が、斯る傾向に對する人間の個人的及社會的抵抗によつて生じたことは、朧氣にせよ誰でも知つてゐるのである。だから宗教が性的慾望を蔑視するのは不思議ではない。道德がこれを敵視するのは當然である。或種の宗教や道德は、これに思を絕つのが、解脫、解放の道であるといつてゐる。梵語のマラといふ語は、殆んど有ゆる文明國の言語に入つて、惡、妨碍、反對等の意味に於て使用されてゐる。日本語では特に男根を意味す。英語では例へば（Mblcontent.）だがマラは、蔑視や敵視には決して辟易しないのである。マラの勢力から解脫し、解放される爲の難行、苦行、修業も、皆これ同じマラのさせる業といふ證明は、精神分析の最も優れた科學的業蹟である。

しかし人類が社會生活を營む以上、マラを放任して置くことは出來ない。そこで生じた道德的見地は、此論文の初に擧げたルマリエの如く、此を生殖機能との關聯に於てのみ正當化することである。此正當化は、しかし性行爲の大部分を不正當化する一方、性行爲の中に存する反社會的なものを正當化するといふ複雜な結果を生むことを忘れてはならぬ。此第一の結果に就て、フロイドは次の如く述べてゐる。

「性的に成熟した個人の對象選擇は愈々狹くなつて異性に限られ、大抵の性器的以外の滿足は變態として貶せられることになつた。これらの禁斷に於いて現れてゐる標準は、萬人に同一の性生活を要望するものであつて、彼等の先天的素質も、後天的素質も全く顧られないのである。そのために相當多數の人は性的享樂の機會を失ひ、かくて重大

なる不正がそこに醸されることになつた。今日の文明は、男女間の最終的な、解除すべからざる結合に於てのみ性關係を容認し、單なる快樂の手段としての性行爲を好まず、それ以外に人間を殖やす方法がないといふので性行爲を容赦してゐるのである。」（『社會・宗教・文明』二百九十三—四頁）

此容赦は、此容赦の範圍内で性的慾望の利己的特徴、卽ち征服、獨占、殘忍等の反社會性に自由活動が許されるといふことを意味するのである。しからば此處に生ずる結果は何んであるか。卽ち敗者たる女性が、此反社會性の重壓を大部分負擔するといふことなのである。女性が被征服者として不正を甘受するといふ意味に於て、性關係に於ける矛盾、反社會的な征服、獨占、殘忍等の行爲が、全體としての社會生活と不調和とならずに濟んでゐるのである。

フランスの分析學者ルネ・アランディは、其『資本主義と性本能』の中で、女を姙娠せしめることが男の加虐性快樂である例を上げてゐる。男が共愛し、尊び、敬ひ、崇めるといふ女を、一瞬の快樂の爲に勝手に姙娠せしめ、重大なる肉體的、心理的不安を彼女に生ぜしめ、更に生死の危險に面せしめることを、今日征服者、獨占者の、殘忍的行爲であるといふならば、世間の失笑を買ふであらう。其故はそれが餘りに普通の行爲であるからである。しかし意外な側面的事實が、今日此征服被征服關係の存在を暴露しつゝある。それは經濟的壓迫であつて、充分な經濟的保證なくして姙娠せしめられる場合に直面する妻は、嫌が應でも今日の男女關係の眞相に眼を開かざるを得ないのである。又大部分の男性の避姙に關する注意が、女性に關する愛からではなく、經濟問題によつて喚起されるといふ事實は、其背後に存する性關係に於る男女の對立を明白に示すものでなくて何んであらうか。

性的慾望に於る反社會性は、現在女性の忍從によつて其破綻的暴露を免れてゐるといふことは、少しく注意すれば否定すべからざる事實として映ずる樣に考へられる。此意味に於て、生殖機能の名を以て性的慾望を其一切の性質を含めて無條件に是認せんとする道學者的傾向は、性生活に關する一種の所謂階級的見解と看做さゞるを得ない。

性に關する知識の發達、性的心理に就ての分析の進歩は、女性の自覺と相俟つて、單に性的生活のみならず、人類の社會生活全體に對して、一種の革命を準備せざるを得ない樣に私には觀ぜられるのである。（一九三七・六・五）

男性と女性との無意識心理

土屋秋實

吾々人間の人間としての本質は、その社會性にある。この社會性こそが吾々を他の動物から區別する點なのである。他の動物は蜂や蟻の様な集團生活をなす動物においても、個體と種族、或は集團との相互關聯性及び、種族からの個體の獨立性を充分にもつてゐない。蟻や蜂はそれ自身が集團的な動物なのであり、從つて、個體の獨立性もなく、個體の獨立性に基く種族的な關聯性もないのである。これに反し、人間は社會からの個人の獨立性及び個人と社會との相互關聯性をもつのである。この個人と社會との辯證法的生活關係が人間の本質としての社會性なのである。人間はこの社會に基いて高度の意識をもつことが出來る。卽ち、自己が自己の生活を他者の生活に作用させ、それによつて生じた反作用が意識なのである。それ故に、意識は社會的である。自然、社會、精神の諸現象はすべて偶然的に起滅するものである様だが、その本質は必然的なのである。人間はこの必然的本質を意識し、その必然性を組織することによつて次第に高度の自由性を得るのである。卽ち、自然の必然性を意識し、それを組織することによつて機械を作り、それを用ひて自然を積極的に變革し、また社會及び精神の必然性を意識し、それを組織することによつて自己を自然に適應する様に變化せしめてゆき、それによつて人間は次第に自由性を得るのである。吾々人間の生活は實に複雜ではあるが、それを分析すれば經濟生活、性生活、文化生活、政治生活等に分けることが出來る。これらの中でも性生活や性心理に關する事柄は從來科學的な研究が充分に行はれず、そのために事實が神祕的に歪曲されてゐたのである。吾々の經濟、性、文化、政治等の社會的諸生活は相互に密接に關聯し合つてゐるため、性生活及び性心理における神祕的傾向は他の社會的諸生活にも影響し

てそれらを神秘化してしまうのである。この稿において筆者は（1）性的無意識心理の生理的本質、（2）その社會的現象形態、（3）その哲學的意味、に關して少しく論述してみたいと思ふ。

（1）

男性は絶えず女性を求め、女性は絶えず男性を求める。吾々がそれを意識すると否とに關せず、男女は相互に求め合ふ。それは殆んど無意識的な吾々の本能力の發動なのである。この無意識的本能を意識することはなかなか難しいことである。

生理學の立場から觀れば、この無意識的な性的本能力の肉體的源泉は精子と卵子と或は男性ホルモン女性ホルモンとにあると考へられる。これは確かに生理的な事實であらう。だが、この生理的事實に基く性的本能は如何なる無意識的滿足を求めてゐるのであらうか。生理的に考へれば、精子の本能は卵子に侵入すること或は卵子に食はれることを目的とするのであるが、卵子の本能は精子に侵入されること或は精子を食ふことを目的とするのである。從つて、精子を代表する男性の性的無意識心理は卵子を代表する女性に侵入すること或は女性に食はれることについての願望であり、女性の性的無意識心理は男性に侵入されること或は男性を食ふことについての願望であると考へられる。この場合において、男性の侵入願望に對して女性の被侵入願望が應じ、女性の食込み願望に對して男性の被食込み願望が應じて圓滿な性生活が營まれるのであり、兩者共にその能動と受動と或は積極と消極との面が、無意識的に相互に滿足されるのであるが、兩者を比較すれば、男性の方が外向的であるのに對して女性の方は內面的である事を吾々は氣付く。それ故に、同じ能動と受動、積極と消極であつても、男性のそれと女性のそれとは性質が全然相反してゐるのであり、相反してゐるからこそ相補ふことが出來るのである。そして、一般に能動的積極面が特に受動的消極面より強い性格者をサディストと稱し、これに反し、前者よりも後者の方が特に強い性格者をマゾヒストと稱する。同一人の能動的積極面と受動的消極面とは本來平均がとれてゐるのであるが、その兩者が分裂し、同一對象に對して統一が行はれないとマゾヒストやサディストになるのである。一定の對象に關してサディズムをもつ人は他の對象に關してそれだけマゾヒズムをもつのであつて、兩者は常に關聯し合つてゐる。從つて、サディストはマゾヒストの異性を求め、マゾヒストはサディストの異性を求める樣になるのである。しかし、サディストが同じサディ

ストの異性を求め、マゾヒストが同じマゾヒストの異性を求める様な場合もあるが、それは一般に兩者共通の或は別々の反對性格の對象を觀念的にか或は現實的にか相手の他にもつてゐる場合が多い。主義とか信仰とかに共鳴して成立した戀愛などはこれに屬するものが少くない樣である。さて、男性が外向的であるのに對して女性が内向的であるのは兩者の肉體上の形態にも現れてゐる。男女の性器の差異にもこれは現れてゐるし、更に男性の體格はその胸部が發達してゐるのに對し女性の體格はその腹部が發達してゐるのにも見られる。從つて、男性は女性を裏返しにしたものであり、女性は男性を裏返しにしたものであるとも考へられる。

現世における吾々の社會生活は、吾々が誕生によつて胎内生活と別離した瞬間から始まる。胎内における吾々の生活は實際上現在と同樣の相對的な世界であるのだが胎兒は唯臍の緒によつて母體から榮養を自然に受けてゐるだけで現世の樣な人と人との社會的な關係を經驗してゐないために、誕生後間もない乳兒期及び幼兒期には吾々は胎内生活の經驗に基いて一切の社會關係を自己中心的に考へるのである。そして、胎内生活を絶對的な極樂世界なりと無意識的に觀念するのである。吾々の幼兒的な自己中心性（精神分析學の用語ではナルチスムスと稱してゐる）は吾々が生長するにつれて次第に角がとれてゆくのであるが、その自己中心性を全く除去するのは至難である。吾々が胎内生活を絶對的な極樂世界と無意識的に觀念してゐる限り吾々は自己中心的となるのであつて、吾々が自己中心的である限り吾々は胎内生活に復歸したいとの無意識的願望をもつのである。この胎内復歸願望は乳兒期に乳房を吸ふことや指しやぶりとして現れる。乳兒は乳房や指に自分を投出的に同一化し、それを吸ひ込むことによつて胎内復歸の願望を無意識的に滿足させるのである。精神分析學はこれを口唇性感と言つてゐる。次に幼兒期には母胎からの吾々の誕生と吾々自身の排便行爲とが無意識的に混同され、これによつて幼兒は胎内復歸の無意識的願望を滿足させるのである。精神分析學はこれを肛門性感及び尿道性感と稱してゐる。慢性的便秘や小便の排出を無理に我慢すること等は、生理的原因の他に胎内に永く止まつてゐたいと言ふ無意識的願望を排泄物に同一化して表現するのに原因してゐる場合が多い。その後に幼年期及び少年期にわたる長い間この口唇的、肛門的、尿道的な胎内復歸願望（精神分析學はこれを自己色情と稱してゐる）は抑壓されて無意識の底に潛んでゐるが、青年期になつて性的機能が成熟すると、この性器的な對象色情と過去の自己色情との間に葛

藤が生じ、その葛藤が解決されるにつれて次第に胎内復歸願望は性器に集中されてゆく樣になる。そして、異性を求め、戀愛や結婚生活によつてこの性器に集中された胎內復歸の無意識的願望を具體的に滿足させたいと願ふ樣になるのである。だが、この具體的な性行爲もそれには過去の口唇的、肛門的、尿道的性感が無意識的に加はるのである。

性行爲における無意識心理は胎內復歸の願望なのである。その際に男性は相手の女性において母胎を感じ、それによつて自分は過去の胎兒の狀態に意識を退行させその胎內復歸願望を滿足させるのであるが、女性は母胎として準備されつゝ相手の男性に同一化してその胎內復歸願望を滿足させるのである。そして、男性の胎內復歸願望は性行爲によつてその滿足を完成するが、女性のそれは子供の出產によつて始めてその滿足を完成するのであると考へられる。それは男性が本來子供（ペニス）を所有してゐるのに對し女性は子供（ペニス）の出產によつて始めて男性と同格になれるのだとの無意識心理に基くものではないかと考へられる。

性生活健康法としての精神分析學の目的は一般に口唇的、肛門的、尿道的自己色情を統制して性器中心の正常なる性生活をなさしめることであるが、佛敎の方法は禪定によつて意識を胎內狀態へ退行せしめ、そこで所謂空間を無意識裡に徹底させることによつて胎內復歸願望を意識的に支配し、それを最大限度において社會的に昇華せしめることを窮極の目的としてゐるものである樣に筆者は考へてゐる。從つて、釋迦も社會生活の一つとしての性生活を否定したのではなく、それをより高めようとしたのであると思はれる。吾々が胎內復歸願望をもつてゐる限りは、それが口唇的、肛門的、尿道的、性器的性感の何れに發現しても、吾々は胎內復歸願望が性行爲によつて滿足されて沈靜した時が死であり、それから次第に昂奮の方へ上昇してゆく時が生であると無意識的に考へてゐるのである。生と死、誕生と墓場、それが人生のアルファでありオメガである。佛家は無意識的な胎內復歸願望を意識化することによつてそれを支配するのであるが、その支配が完全に行はれると相互に交替する生死の無意識的觀念が統一されて生死一如、生死解脫が無意識心理的に出來るのであると思はれる。『洞上修證義』と言ふ經文の始めには次の樣に書いてある。「生を明らめ死を明らむるは佛家一大事の因緣なり。生死の中に佛あれば生死なし。但生死卽ち涅槃と心得て生死として厭ふべきもなく涅槃として欣ぶべきもなし。是時初めて生死を離るゝ分あり。唯一大事因緣と究盡すべし。」この

文で「生死の中に佛あれば生死なし」と書いてあるのは恐らく「生死の無意識觀念を惹起させる原因である胎内復歸の無意識的願望が佛（解ける＝意識化される）れば生死の無意識觀念は消滅する」と言ふことを意味してゐるのであらう。

（２）

男女が相互に求め合ふのは生理的に根據がある必然的現象であり、更にそれには胎内復歸の無意識的な願望が潛められてゐるのであるが、男女のこの様な性的な欲求も、人間が社會的動物である限りは、それは社會の生活樣式によつて規定されざるを得ない。卽ち、性的欲求は主として家族的、民族的な社會關係によつて規定されるのである。そして、その規定は道德的にも亦政治的にも確立されてゐるのである。更にそれは經濟的、階級的な社會關係とも橫の關聯がある。

男女の性的結合の社會的單位は家である。そして、この家は民族的な歷史と直接に結合してゐるのである。從つて、一定の男女の性的無意識心理はそれ〴〵の家の家族的關係の如何によつて異なるし、また家族の先天的素質及び後天的性格、その家の社會的地位及び經濟的生活狀態等の相異によつても影響されるのであるが、それは民族的歷史の無意識心理においては共通した性質をもつてゐるのである。

家における吾々の家族的關係は父母兄弟姉妹の關係である。これには經濟的な關係も混合してはゐるが、それは主として性的な愛情關係なのである。吾々は男性或は女性として吾々の父母兄弟姉妹と何等かの愛情關係をもつのである。

吾々が幼い頃に最初に愛情を感ずる對象は母である。吾々が男性である場合には、父は母に對する自分の愛情の競爭者であり、妨害者であると見做される。だが、吾々が生長するにつれてその競爭者である父の方が自分よりも遙かに强いことを知る樣になり、父の樣な强力者に自分もなりたいとの願望を起す樣になつて、父に對する敵愾心は反對に畏敬心に變化してゆく樣になる。そして、父を偉大な理想として畏れ敬ひ、その理想を不斷の努力によつて實現し、母の樣な優しい妻を迎へて胎内復歸の願望を、滿足させることを一生の念願とする樣になる。この樣な無意識心理によつて吾々は兄を小さな父とし、姉を小さな母とし、弟妹を自分の子女として無意識的に觀念する樣になる。これが一般の男性の無意識心理であるが、それはその他に祖父母に養育されたとか兩親或は片親に死別したとか兄弟姉妹の有無或は多少等の種

々複雑な條件の影響によつて極めて複雑な變形を示す様になるのである。

幼兒期に吾々が最初に母に愛情を纒綿するのは男女共に共通の現象であり、その時代には女性は自分の肉體が男性と同じ性質のものであると感じてゐるのである。しかし、次第に女性が自分の肉體を男性のそれと異つてゐることを意識する様になり、自分の愛情を母から父へ移してゆく様になるのである。そして、母を父に對する自分の愛情の競爭者であり妨害者であると感ずる様になるのである。しかし、次第に生長するにつれて自分よりも母の方が强いことを意識する様になり、母に對する敵愾心は母に對する畏敬心に變化し、母と妥協し、母に同一化することによつて母の様な優しさと言ふ武器を得たいと願ふ様になるのである。そして、母を模範として父の様な偉大な夫を得て胎内復歸願望を充足させたいと無意識的に念願する様になるのである。この様な無意識心理によつて兄は小さな父とし、姉は小さな母とし、弟妹は自分の子女として、無意識的に觀念する様になるのである。これが一般の女性の無意識心理であるが、それはその他に祖父母の養育、兩親或は片親との死別、兄弟姉妹の有無或は多少等の種々複雑な條件の影響によつて極めて複雑な變形を受けることは男性の場合と同様である。

この様にして吾々は幼兒期における父母に對する愛情が原型となり、其後の男女間の愛情關係がその原型によつて規定されるのである。そして、以上の様な具合にゆくのは先づ理想的な方であるが、一般には同性親との妥協が充分に出來ず、その結果異性親に對していつまでも愛着してゐる人々が甚だ多いのである。最高の理想は家族全員が平等な社會的人間になることであるが、これは現在までの社會狀態では、なか〳〵實行困難なことである。しかし、全然不可能と言ふわけでもなく、努力の仕方によつては實現出來るのではないかと思はれる。

とにかく性的無意識心理は複雑であり、特に女性のそれは男性のそれよりも遙かに複雑なのである。勿論意識心理においては男性の方が女性よりも複雑であることは事實だ。この事柄は從來女性が性的、家庭的の仕事にのみとぢ込められてをり、男性はこれに反して經濟的、文化的、政治的仕事にのみ主として活動してゐたことに原因があると思はれる。從つて、一般に男性は意識心理的には女性よりも遙かに大人であるが、無意識心理的には赤ん坊なのであり、女性はその反對に意識心理的には男性よりも暗いが、無意識心理的には男性よりも遙かに技術家なのである。それは從來の社會が父權的な男天下の社會であつたために、女性は男性の暴力に對抗する必要

上自然に性的無意識心理における男性支配の技術を體得したのであらう。そして女性の性的無意識心理の底には男性に對する烈しい憎惡が潜んでゐる。それは意識心理上で男性に支配されてゐることに對する反抗であり、復讐であるのだと思はれる。精神分析學ではこれを男性器羨望と稱してゐる。これに相當して男性は女性に對する罪障感をもち、それによつて去勢願望＝恐怖の感情が生じるのである。

更に從來の商品經濟的階級社會においては戀愛とか結婚と言ふことも必然的に商品化されてゐて、純粹の愛情關係を創造することは至難なのである。從つて、階級社會における封建的な結婚生活は無意識心理的には高等淫賣だとも考へられないこともないのである。これと反對に、例へ淫賣的性關係でも封建的性關係より優れた愛情の現實的純粹性がある場合もある。と言つても、それは道徳的な價値判斷をしたわけではないことをお斷りして置く。

尾高氏編の『兩親とは何か』と言ふ本の中に「自由と解放とを欲する妻は多い。だが自分の自由と解放とを社會の問題として考へる妻は少い。しかし妻の解放の中に自己の解放を見出す夫に到つては皆無である。」と言ふ言葉があるが、これは至言であると思ふ。

（３）

男女が相互に求め合ふのは種族保存本能に基く胎內復歸願望のためであると一般に考へられるのであるが、それにはもつと深い哲學的な意味がないであらうか。

男女が相互に求め合ひ、愛し合ふのは、兩者が相互に相手の中に自分の半身を見出して、それと一體にならんとする本能的傾向であると思はれる。吾々人間は死すべきゾマと不死の生殖細胞とによつて構成された複細胞生物であり、從つて、死と不死卽ち死と生との矛盾が吾々にはある。吾々はゾマの死ぬべき運命、その有限性に基いて愛し得る異性、卽ちゾマにおいて自分と相手とが同一のものとして感じ得られる樣な異性の中に不死の生殖細胞を見出してそれと一體にならうとするのである。それが吾々の種族保存本能なのである。それ故に、一切の性的本能の發動は永遠の生命への憧れを意味してゐるのだと考へられる。

ゾマに基く吾々の個體保存本能的、經濟的、階級的活動はすべて限定されたものである。富、名譽、權力等はその活動によつて如何に獲られたとしても、それが個體の滿足にのみ關係してゐる限り、それは吾々の短い生存期間中にだけその意義をもつてゐるのであり、從つて、

それらは吾々の肉體の死と共にその意義を全然失つてしまうのである。と言つてもこれはその意義を否定するわけではない。ゾマに基く吾々の活動は重大な意味があるのだが、それが他者のゾマを排しても自分のゾマを主張しようとする自己中心的（ナルチス的）傾向をとつた場合にはその意義が餘りあるとは言へないのである。しかし、自分が他者とゾマにおいて同一化することが出來れば、その時には相互に生殖細胞的な種族保存本能的、家族的、民族的不死の永遠性をゾマに基く個體保存本能的、經濟的、階級的活動の中に感ずることが出來るのである。それは恐らく人生における最も大きい喜びであらう。そして、このゾマにおける自分と他者との同一化もそれが單に形式的にだけ行はれたのでは却つてそれは自己中心的であり、神經症的なボロが出るのである。隨つて、そのためには徹底的に自己分析が行はれて、他者との同一化を妨げる無意識心理的諸要素が除去されなければならない。だが、それは至難なことである。

男性と女性との性的問題は吾々の永遠の生命に關係してゐるだけに重大な問題である。從つて、それを單に卑賤なものとして抑壓することやそれを神聖なものとしてドグマ化して感傷的に考へることは正しい處置ではない。それ故に、生命の問題も科學的な立場から具體的に考へられることが必要だと思はれる。（完）（十二、五、三）

本誌前號正誤表

頁	行	誤	正
目次一	八	日常日活	日常生活
本文五〇	一三	屹驚	吃驚
〃 五二	一	有難う」と。	有難う。」と
〃 六六	上一六	直江	良江
〃 八六	下二	貰子	養子
〃 九九	上一二	脊髓	脊椎
〃 一〇〇	下六	擧闘	拳闘
〃 一〇四	下一三	その人	その一
〃	下二一	適當は	適當に
〃 一〇五	上一二	レソ	レン
〃 一一〇	上一〇	筆者者	執筆者
〃	下二一	フロトド	フロイド

精神分析に對し日本人が示す抵抗

矢部八重吉

一、ナルチスムスの抵抗と陰性治療反應

フロイドは五種の抵抗を擧げ、その内抑壓の抵抗、轉嫁の抵抗及疾病利得の三者は自我より發し、罪感の抵抗は超自我より、そしてもう一つはエスより生ずるものとしてゐる。外にナルチスムスの抵抗と云ふものをも論述し、該抵抗は殆んど難攻不落であり、また罪感の抵抗は、それが同一化に依り「引受けられた」罪感でない限り、その示顯は極めて困難であると言つてゐる。ナルチスムス及罪感の抵抗は所謂治療の陰性反應を齎らすもので、此所に分析者の試金石が示される譯である。從つて此の抵抗を如何に處置するかと云ふ事が多年の宿題となつて居つた。最近メラニエ・クライン、エドワード・グラヴァー、ジョーン・リヴィア及びメリタ・シュミデベルグ等の研究は、此の難問題に多大の照光を投げかけたのである。

二、全能念慮に據り支持される否定とそれに據る防禦

嬰兒時代には抑壓以外の他の防禦が働いてゐる事はフロイドも述べてゐる。が、その本體は何物であるかは明らかでない。唯彼の云つた「否定は抑壓の理智的代償である」と云ふ言葉は此の防禦に關聯し何かの暗示を與へてゐる樣に思はれる。ナルチスムスの抵抗がその緩和に困難なる所以は、否定に依る防禦が全能念慮（ナルチスムスの本質）で支持されてゐると云ふクラインの主張で說明出來るであらう。否定が若しも道理の力で說伏され

ようとする時に益々頭强となりゆくものとすれば、それはその裏面を支持してゐる全能念慮の爲だと合點して差支へないであらう。總て防禦は、依つて以つて防禦されてゐる事態を和らぐるにあらざれば緩められない（グラヴァー）のであるとすれば、否定そのものに對し直接工夫を凝らす事の全く徒勞なるを、我々は知らねばならない。此所に於てか我々は否定で防禦してゐるものは果して何であるかを究め、それに分析的努力を注がなければならない。

三、心盲中心の錯雜した防禦網

リヴィアに據れば、否定で防禦されてゐるものは不安と憂鬱狀態である。不安はリビドー化 libidinization で緩められ（クライン）、憂鬱狀態は賠償（Restitution）で和らげられる（シュミデベルグ）。が、加虐性がその絕頂に達し（生後六ヶ月より一年迄の間）、口唇性感の表現（主に哺乳による）以外に尙ほ未だ攻擊慾としての外向が不充分な時代への退行又は定着が深いと、リビドー化は難事であり、またナルチスムスへの退行は、賠償行爲（主に强迫症として出る）を不可能ならしむ。否定に依る防禦は斯くしてそれ自身有爲轉變を經由し、極めて錯雜したる、しかも精緻なる防禦網をつくる。防禦網中最も顯著に示されるものをクラインは心盲（Scotomization, or denial of psychic reality）と呼んでゐる。心盲は投出、攝取、轉位、その他の抑壓前期の防禦で助けられてゐる。

四、釣合攪亂の恐怖への防禦としての抵抗

防禦網は錯雜であるが爲に絕滅し難く、精緻であるが爲に攪亂され易いのである。絕滅し難いのは難攻不落の觀を與へ、攪亂され易いのは、鋭い感受性を示すのである。兩者共その裏面には常に全能念慮が働き、それを加勢してゐる。それは最も恒久性を帶びた、而も間斷なく攪亂され樣とする釣合 Status quo の保留を企てるのである。釣合は堪へ易い狀態をつくる。所謂因循姑息、事勿れ主義が守られ、彌縫的安心立命が獲られる。それを攪亂させる事は平地に波を起すのである。此の心理機制は多くの妥協で出來てゐる。被分析者は分析の進步を欲しない、それかと云つてそれを罷めない。彼は分析を受くる事で一種の釣合を設定した。それを破られるのを恐れるのである。彼は飽まで變更を望まない、現狀維持を墨守する。分析者との關係で設定された釣合を攪亂されたくない（去勢恐怖）のである。

五、ナルチスムス抵抗の頑强なる一例

例へば自分が扱つた患者の中に足掛け五年になるものがある。始めたのは二十六歳の時であつた。週期的に激しい消極轉嫁が示され、その間進歩が殆んど全く遮られるので、分析を停止するの止むを得ない事も屢々あり、また本人の申出により中止した事も數回あつたが、一二ケ月の中にまたやつて來る。症狀はクラインが敍述するパラノイアの投出に加ふるに否定が强く示されてゐる。機嫌が好い時でも殆んど註釋は受けない。嬰兒症(インファンチリズム)も可なり著しく認められる。少し機嫌が惡い時にうつかり註釋を試みると忽ち憤激してしまう。聯想としては意識的理屈附、自己に都合の好い、勝手な事柄を喋舌る以外には何ものもない。最も頑强なる抵抗の表示として知られてゐる絶對の沈默が數日續く事もある。そして無理な註文、出來ない相談を持ちかける。此れは全能念慮を投出して分析者に塗附けるから、分析者はどんな事でも出來ないものはない(ナポレオン空想)と云ふ心持の表現である。何事も自己の發言に基いたものなら可いが、きつと同一な句で他人が發言したものは直ちに峻拒する。分析時間中分析者が試みた註釋中にある文句を直時否定し去るが、その舌の根の乾かぬ中にそれをその儘自己創意のものとして分析者を遣込める武器に利用する。健忘を支持するのに心盲を以てするのである。同時にパラノイアの特徴である敏感さとあるものに對する觀察の正確さとを失して居らないのである。リビドー化の企圖は殆んど失敗に終る。それは註釋中少しでも慰藉となる様な言葉が加へられると、分析者は機嫌をとるのである、諂らうのであると侮蔑の態度を以て應答し(エスの投出)、時とすると、人を愚弄するものと憤慨する。好意を以て遇すれば遇する程、親切を見すれば見する程、愈々猜疑を深め、その裏面に何らかの謀計(たくらみ)でもあるものと邪推する。患者は飽まで恩を被るのを厭がり、凡ゆる懇切を拒否する。賠償行爲がまたひどく禁制されてゐる。それを言動で表現するのは業腹と感ずるのである。賠償は實際に爲されねばならない。(Restitution has to be done in reality —— Schmideberg)。假令、意識的であつても、瞑想では駄目なのである。それは贖罪(去勢)願望の現實的(象徴又は代償物でも可)表示でなければならない。それの病的表示は卽ち强迫言動(洗滌症、儀禮强迫症等)である。パラノイアは第二次型防禦であるところの强迫症狀で防がれるのである(グラヴァー)

六、啓蒙を退けるナルチスムス的抵抗と普通人

前述の患者は極端な例ではあるが、同一の機制に依る抵抗は强弱明暗の違ひこそあれ、殆んど普遍的に所謂常態者として通用してゐる日本人に認められる症候の樣に思はれる。殊に上層階級、有識有敎育者、一言に云へばインテリ級にそれを示すものが頗る多い。自國の歷史を他國人に學ぶ埃及人、自分の子の歲を他人から聞かされる親、之程深い健忘症に罹つてゐるものは少からう。それは「見て而して見えず、聞いて而して聞えず、言うて而して云はざる」ものである。「見たい、聞きたい、語りたい」願望に對する「見ぬ、聞かぬ、語らぬ」と云ふ三猿主義に依る反應構成である。此れ明かに否定症狀であり、心盲の基礎となるものである。此の防禦が破られかゝる時に擡ぎ出される支柱が全能念慮であつた場合に頑迷不屈、他人の說を絕對に容れない、啓蒙を斷乎として退ける事となり、それが若し外界の現實の大部分を否認若くは誤認する樣な恰好で示される時に、フロイドの所謂轉嫁神經症狀に對するナルチスムス型症狀(精神症)と診斷して差支へない事を我々は知つたのである。

七、日本人のパラノイア的防禦とアムビヴァレンツの顯示

否定で防禦されてゐるリヴィアの所謂不安と憂鬱狀態は等しく超自我固有の苛酷性に因してゐる。クラインの云ふ嬰兒時代に旺盛を極めた加虐性はエディポス前期の超自我の基礎となつたものであるから、成熟者の超自我が示す苛酷性はそれに依り甚だしく强められてゐる。此の苛酷性に基く不安に對する反應(防禦)に二通りある。一つはパラノイア的投出(苛責してゐる側、卽ち超自我の)他はマニーの發作(苛責されてゐる攝取物又はエスの投出)である(E. Weiss)。後者の弛緩期(Remission period)中に示される憂鬱狀態は加虐性に對するアムビヴァレンツ反應卽ち罪惑に基くものである。罪感はリビドー化の試みであり、その表現の一つが意識されたものが劣等感であるとすれば、劣等感は常にその積極側、補塡としての優等感と一對をなすアムビヴァレンツの顯示と見られるであらう。此の相反併存性感情が現日本人の特有性の一つを爲すに至つた徑路は、恐らく次の如くではなからうか。

八、劣等感の顯示としての歐米人崇拜と西洋學徒の示す憂鬱狀態に對する防禦としての心盲

明治維新以來、所謂世界の大勢に目覺めかゝつた日本人はそれより襲來する急激なる刺戟の爲め一大衝擊（外傷）を受けた。その結果常態なる本能醇化（昇華）に依る順應性能を展開するの暇なく、異常態なる補塡、反應構成を以て間に合はすべく餘儀なくされた。そして此の彌縫手段は一時的でなく恒久性を帶びるに至つたのである。獨尊信念（オムニポテンツ）に基く鎖國思想は俄然その消極補塡、卽ち劣等感で示される事となり、歐米人の崇拜（獨尊信念の投出）、泰西文物への憧憬となつた。そして此の泰西文物との最初の接觸者、その導入の先驅となつたものが西洋學徒であつた。第一に醫學、兵學、次いで工學、科學、續いて文學、美術、その他總ての學藝、技術思潮等が破竹の勢を以て日本に流れ込み、凡ゆる社會の階級に浸潤した。歐米人崇拜（劣等感）は先づ西洋學徒、知識階級、インテリ層を侵し、彼等は泰西人に代つて大衆の獨尊信念投出の的となり、欽慕敬服の對象となつたのは強ち無理ではない。西洋の事物を學び、それを模倣し、そしてそれに通ずる事が無上の得意、至高の誇りであるのは日本人固有の劣等感の補塡であり、同時に此の補塡が罪感（劣等感として意識され樣とする）卽ち憂鬱狀態に對する防禦である事も疑ひの餘地ないであらう。

九、日本人の島國根性

歐米人を崇拜するものが同時に日本人の欽慕の的となるのを誇りとする（劣等感の積極補塡、厚ち優等感）のは明らかにアムビヴァレンツの顯示である。相反倂存性の一方の顯示は他方の防禦と見られよう。劣等感の防禦として示される優等感が攪亂される時に喚起される二次型防禦は否定であり、そしてそれを支持するものが全能念慮である場合に心盲が示されるとすれば、泰西文物導入の先驅となつた西洋學徒の持前であるかの如く見ゆる僻見、偏執、狹量等は此の種の防禦と見做されるであらう。所謂學者と稱せられる者の中に常識（現實感）の缺如を誇りとするものがあるとすれば、それは心盲の認識を現實認識の拒否（否定の外界化）に依り防禦してゐるものと云はれるであらう。現實認識の拒否は全能念慮を以てするナルチスムスの抵抗となる。攝取されて不安の源泉（リビドー化されてゐない超自我の構成要素）となつてゐるものを投出して、それに攻擊慾を向けるものがパラノイア的防禦であり、攝取物の投出が禁制され、そ

それに内攻攻撃慾を向けるのが憂鬱狀態である（クライン）とすれば、日本民族性は確かに前者の傾向に强い。所謂日本精神、武士道なるものはパラノィア的防禦の醇化と見られるであらう。未醇化な此の防禦は猜疑、邪推、嫉妬等で示されるものであらう。殊に嫉妬（男性器羨望）は去勢恐怖、その防禦又は補塡として、失愛の恐怖と共に憂鬱狀態と關聯してゐる（去勢恐怖＝愛想をつかされること——フロイド。）僻見、狹量、邪推、嫉妬はパラノイア的防禦網の一部であつて、所謂日本人の島國根性を構成するものであらう。

十、反對と抵抗との差

リヴィアの所謂錯雜したる、而も精緻なる防禦網はフロイドのナルチス及罪感の抵抗と密に關聯し、そしてその眞相は如述の內容であるとすれば、日本に於て立たうとする我々分析者は可なり根强き抵抗を豫期の內に算入せねばならぬであらう。個々の被分析者が示す抵抗と同一意義の抵抗が集團としての社會からも示されると云ふフロイドの言葉に我々は深く留意して、その發生の根元を究め、その輕減の手段を講ぜねばならぬであらう。既に、已に此の抵抗に寄與するものと思はれる個人抵抗の一、二の例に我々は接してゐる。一つはフロイドの著書の譯者として最も廣く且つ古くから知られた一人が、その譯書の一の序言中「此れで（此の譯書を以て）フロイドとお別れする」と發表した事、もう一つは可なり早期にフロイドの紹介に努め、一度はその技法に基き治療に應ずべき旨公告した事のある精神治療家が最近「療法としての分析に全く愛想を盡かした」と告白した事實である。精神分析を全然知らない者、喰はず嫌ひの反對は(Opposition not resistance) 分析者が遭遇する抵抗をつくるものでない。それは漸次斯學の知識が正しく咀嚼されるに從ひ緩和されるものである。が、それと正反對に分析が或程度まで進捗し註釋から獲られた知識が攝取されたに拘はらず同一化が流產した時に（クライン）硬き岩石にでも打當つたかの如き狀態が續く。此れグラヴァーの所謂分析程過中の第二期、卽ち抗抵期に入つたのである。前記二例の研究者は恰度此の時期に逡巡するものと看做されるであらう。

十一、分析讀みの分析知らず

分析の知識が反應構成、補塡としての役割以外を果さないのはそれが深く無意識裡に根差さないからである。論語讀みの論語知らずと云つた程度の啓蒙を超えない。

補塡は模倣に近い、模倣は流行に似る。流行は先驅を以て得意とする、後を逐ふものが出來ると道を轉ずる。「フロイドとお別れした」人は道を轉じたのである。「分析に愛想を盡かした」人は僻見卽ち先入主となつてゐるものが、抵抗網の內に織込まれて、保たれてゐる釣合が攪亂されかゝつた時に惹起される不安に對する心盲に依る防禦と見られるであらう。新思想に對する恐怖、保守主義、耳を蔽うて鈴を盗むに近い現實からの神經症的逃避である。（終）

精神分離症に現れた男性と女性

木村廉吉

自分が實際に觀察した精神分離症（Bleuler の云ふ Schizoplrenie 或は Kraepelin の云ふ Dementia praecox 早發性痴呆症）の患者の中、男の患者四十例及び女の患者三十例に就いて、なるべくくはしくその病歴や經過を調べた結果を比較して見るに、次の樣な相違がうかゞはれた。

家庭關係では長子なる事が男二十三％に對して女三十七％、兩親を同じくせさる兄弟姉妹なる事が男十六％に對して女は二十二％で、統計としては餘りに少數ながら、兎も角男が多く入學試驗等の競爭や或は他の社會的影響が誘因となるのに、女の方が複雜な家庭關係の影響を受けて現實から逃避する樣になり易い事を、暗示してゐる。

又、兩親との關係では、男の場合は父の嚴格なる者三十四％、母の嚴格なる者十六％、父を好み或は父と親しい者が二十一％、母を好む者が六十七％なるに對し、女では母が嚴しい者が二十二％を占め、母より父を好む者が男の二十一％に對して女では三十五％を占めて居り、エディポス錯綜觀念に關する數では男と女と逆の結果があらはれてゐる。すなはちエディポス錯綜觀念を健全に解決するか否かといふ質的の關係は兎も角、量的の關係では同性の親よりも異性の親と親しみ易いといふ事は、正常の場合と同じである。

別に男の神經症者五十名に就いては、父と親しい者が十％、母を好む者が六十九％で、その傾向は更に強くなつてゐる。これは神經症者の場合の方が病前の感情や事實が確實に調べ得るとの相異もあらうが、又一面餘りに父が嚴格であると過敏な超自我を生じて本能欲求との間

に強い精神葛藤を起して神經症に陷り易い事も容易に考へ得られる。

病前の性癖の上では、無口、交際ぎらひの者が男六十八%に對して女五十%で、女の方に餘程少いのは口頭辯論の達者な傾向は如何なる狀態に於ても男が女に敵せぬ事を示してゐる。しかし正常の場合はこの相違はもつともつと大きいにちがひない。女性の雄辯が五十%などゝいふ事は普通の場合には考へられぬ。

肛門愛的性格 Analcharakter の强い者は男に三十%女に四十七%で、反對の傾向は男に三十五%女に十七%で、はるかに女の方に强いが、これは或る程度まで女の家庭に於ける役目や仕事の關係から來る數字的影響もあらう。正常の場合を考へても同じ事であつて、片つけるとか物を吝しむとか云ふ消極的方面は女性の分擔するところである。

別に、四百九十八名の精神分離症の入院患者（男三百六十名、女百三十八名）の病型に就いて見るに、破瓜病は男八十七名に對する女二十八名、妄想性癡呆症は男二十二名に對する女七名、又緊張病型は男八十三名に對する女五十六名となる。男女總數の比率を對象として各病型の男女の相互的百分率を求めると、破瓜病型、妄想性癡呆型は共に男には五十五%女には四十五%の比で見られて、男に稍々多く、これに反して緊張病型は男三十七%に對する女六十三%となつて、遙かに女に多い。破瓜病や妄想性癡呆症が幾分とも積極的であるのに比して、緊張病が拒絶症・拒食症等の天の邪鬼の傾向を示し、又顏をふくらませ口をとがらせるなどの女性特質を多く症候として持つてゐる點と思ひ較べて興味が深い。

又、女の精神分離症者の病型が男に比してはつきりせず永い間觀察しても遂に定められず、又噪鬱病との確然たる鑑別診斷を下し難い事が經驗される。すなはち臨床的には女の精神分離症に於てはホワイト A. White の云ふ如く、噪鬱病との關係が近いといふ事實が見られるし、又精神分析的にはフロイドの云ふ如く女子のリビドー發達の經路が男に比して不明瞭であり、從つて固執位置が曖昧であると云ふ點も或る程度まで窺はれる。（完）

（編輯者附記）木村氏の論文中には精神病學の術語が二三出て居るが、本誌の讀者には親しみの少い語もある事ゆゑ、簡單に説明を加へておく。「精神分離症」と云ふのは、時にまた「精神乖離症」と譯してゐる人もある。「早發性痴呆症」と同義であることは木村氏稿中に解説してある通りである。

早發性痴呆症は普通に五種に分類せられてゐる。（一）單一痴呆、又は類破瓜病、（二）破瓜病、（三）

緊張病、（四）妄想性病型、（五）混合性病型。

第一の單一痴呆は早發性痴呆に共通なる種々の精神病狀を有してはゐるが、その程度が輕微で、別に氣のつかない內に漸次に痴呆狀態に進み行くのをその特徴としてゐる。第二の破瓜病は思春期に起り勝ちであるためにこの名があるらしく、前者に比すれば、多少急劇に發病するが、初期の數ケ月間は不眠、頭痛、食慾不振、羸瘦などの症狀があるばかりで精神症狀はあまり著しくない。第三の緊張病と云ふのは何らかの意味で患者が精神又は肉體の或る部分を緊張させてゐるのでこの名がある。眉間をしかめたり、口唇をとがらせたりしてゐるのが普通にある型だ。第四の妄想性病型と云ふのは幻覺、幻聽、幻視、被害妄想、追跡妄想、誇大妄想などの主症候を有するものである。第五の混合性と云ふのは、以上四種類の混合して發するものを云ふ。

去勢コムプレクスの由來

加藤己酉三郎 譯

本號は「男性と女性」の比較研究を特輯題目とするので、その重要な共通問題である去勢コムプレクスに就いて研究の大任を課せられたが、幸に米國シカゴ在住、ドイツ出身の分析學者フランツ・アレキサンダーの去勢に關する論文（Concerning the Genesis of the Castration Complex; by F. Alexander, 1930）が甚だ要領よくこの問題を説いてゐるので、それを正直に譯してその責をふさぐことにした。この講義は一九三〇年四月二十九日、ニウヨーク精神分析學會に於いて試みられ、後にドイツ文の『國際精神分析學雜誌』一九三〇年第三、四合併號に發表せられ、更にC・F・メニンガー氏英譯して米誌『精神分析評論』誌上に掲げたものであつた。

×

私はこゝで或る心理狀態に就いて述べて見たいと思ふが、その心理狀態に關聯して、私の患者の一人が彼の幼時の重要な夢を想起したことがあつた。その夢が彼の幼時の重大な經驗と關係のあつたと云ふ事は、去勢恐怖の由來に就いての吾々の說に有力な確證を供したのである。この夢を見た男は一時的不能に惱まされてゐる若い美術家（アーティスト）で、全く忘れて居た幼時の夢を最近見た夢の分析操作中に想起したのだが、この幼時の夢を意識に呼び戾した最近の夢と云ふのは次のやうなものである。

「黃色いチョッキを着た輕業師か拳鬪家かゞ、輕業師に特有なあの姿勢で、その肉體力を誇示してゐた。その足は獨特な踏張り方をしてゐた。」

「拳鬪家」に就ては、大いに運動して、筋肉を強くしやうと先日買込んだ運動具を思ひ出した。この患者が肉體力を重大視するわけは、その前の分析談合の時に解つてゐたのだが、強くなりたいと云ふ願望は、彼には減退した性的能力の代償（サブスティテュート）であり、劣等と感ずる不快に打勝たんためであつた。肉體力の買被りは不能患者には全く珍しくないことだ。

「黃色いチョッキ」に關しては、金と金貨とを聯想した。貨幣は彼には肉體力と同じ役目をする。それは生殖能力の代償であり、不能に起因する劣等感に打勝つ手段なのだ。この劣等感の過度補償（オーバーコンペンセイト）に貨幣を利用するやり方は亦屢々見受けるところである。例へば、人品の缺けて居るのを貨幣で補償しやうとする俄分限の如き……。

足の特別な踏張り方では、性交中の女の足の位置を思ひ出した。彼は彼自身が女だ、卽ち去勢された、と云ふのは自分の性器が使へなかつたから、と思つたと附加へた。

この夢の意味は明白だ。患者は夢の中で、「事實私は不能で、女のやうだ（女のやうに足を擴げて居る）けれども、拳鬪家のやうに強く、澤山貨幣（黃色いチョッキ）を持つて居る」と云つて居るかのやうだ。この夢は彼の不能を慰める爲めに工夫されたもので、これに使用された機制は減退した性器中心（ヂェニタル）の性慾（エロティズム）に取つて代る肛門性感及筋肉性感への退行である。

この夢はこれ等の關係を彼に說明し、又これまでの分析で分明した事を要約するに良い機會を與へてくれた。そこで彼が不能を補償しやうとした心理的手段を說明し始めると、彼は突然浮んだ幼時の想出と、夢を語り出した。彼が三歲の時、女中が五歲になる隣家の娘の足を強いて開かせて、その×××を彼に無理に見させた。解剖上性に相違のある事を初めて知つて、彼はひどくまごつ

いた。その晩、彼はこの娘を夢に見たが、その××からは美しい長い紐が下つて居て、彼自身はその紐に吸ひついてゐた。

この夢は明らかに、彼が前日この少女にペニスの無かつたのを觀た事實をごまかして居る事を意味する。それとは別に、この少年は夢の中で乳を吸ふやうに性器を吸つた事で、乳を吸はせて貰へない事（口唇快感の剝奪）の不安をも否定したのだ。女性器を觀たゝめに彼の去勢恐怖が強くなり、又彼がその上赤ん坊の頃母の乳房を失つた幻滅を同様に全く忘れやうとした反動(リアクション)を示した事から察すると、彼の去勢恐怖の源泉は早期に經驗させられた母の乳房から引離された事である。嘗て以前に喜びの源であつた母の乳房を完全に失つた事があるので、ペニスも失ひはしないかと恐れたのだ。少女の性器を見た事はこの恐ろしい期待を非常に大きくした。そこで夢は少女は矢張りペニスを持つて居たと主張する事で彼を慰めたのだ。『ペニスを持たない人なんて居るもんぢやない。だから、ペニスを失ふかも知れないなんて事もあり得ない」と。夢はもつと先走りして、「ペニスを失ふ事があり得ないばかりでなく、事實人は何も失ふものでなく、乳を吸ふ快樂の滿足さへ持つて居るのだ、この快樂は誰も力づくでも取上る事は出來ない」とさへ云つて居る。

私に説明の附かない夢の唯一つの細部(ディテイル)は、長い紐で女性器を表はしてゐること——乳房とペニスとの凝縮——であつた。患者がこの紐と臍緒とを聯想したのは奇妙に思へるが、夢を見た三十年後にこの聯想をしたのだから、夢とどんな關係があるのかは解らない。三歳では確かに臍緒の存在を知らない筈だ。

この最近の夢と、それを分析して居る中に再び意識するやうになつた幼時の夢とを較べると、兩者の間に著しい相似點がある。最近の夢では一種の去勢を意味する不能を肛門性感の滿足——貨幣——によつて慰めやうとして居るし、幼時の夢では去勢恐怖を口唇性感で和らげて居る。そこで離乳させられる事と、肛門滿足の削減と、去勢恐怖との三者は、感情的(エモーショナル)にはしつかり結合されて居り、同一感情(エモーション)範疇に屬して居ると結論せざるを得ない。いやそれ以上に、口唇と肛門との二つに關する性感滿足の剝奪が性器前期になされると去勢恐怖の生ずる感情的基礎が準備せられると云つていゝ。子供がその早い性期前期の發育中に、快樂には總て終りがあるものだと覺ゆると、不幸な快樂喪失の期待は彼の中に深く根を張り、斯くて性的快樂に對して去勢恐怖を以て反應する事を覺える。この解釋は總ゆる場合に於て、現實的去勢脅威が決して起らない場合でさへも見られる去勢コムプレクス

の全般を說明する。去勢恐怖は、幼時の幻滅と快樂喪失と云ふ典型的な性器前期的經驗に深く根差して居る。

この幼時の夢が想起された條件は亦技法上から見て重要であり、分析處置法の基礎原理の何たるかを明かにするに役立つ。明らかに、二つの夢は同一感情基礎を有して居る。現下の夢が分析され、その潛在內容が患者に意識されると、彼は幼時の夢を想起したのである。幼時に抑壓せられた事柄が想起せられるのは常にかくの如くにしてだと私は確信してゐる。現時の被抑壓無意識思想內容を意識に齎す事によつて、同樣な又は同一の幼時の被抑壓物への道が開ける。自分の不能に關して如何に自分を慰めやうとしたかを私の患者が自覺して始めて、彼は幼時の去勢恐怖を、自分が如何に支配しやうとしたかの機制(メカニズム)を想起することが出來た。

このやうな事情は、普遍的な技法上の原理の基礎である。それによればかう斷定せられる、現下の狀勢(シチユエイシヨン)（勿論先づ第一に現下の心理的狀態の實驗例としての轉嫁）を分析することが幼時に抑壓せられた物を意識に齎す最上の道であると。これを經濟的に考察して見ると事情は一層明白になる。大人になつてからの抑壓は幼時の抑壓によつて條件附けられてゐる。これは、人々が幼時に抑壓したと同一のもの（感情の性質上同一のもの）を大人になつてからも抑壓すると云ふ事を意味する。大人の狀勢と幼時のそれとの間の著しい相違は、自我の力と被抑壓衝動との間の關係が違つてゐると云ふことの中に在る。弱い無力な幼時の自我にとつては、成長した自我が容易に解決し得る樣な葛藤をも抑壓しないわけに行かない。それ故、大人になつてから抑壓せられた物を意識出來る樣になる機會は、それに相應する幼時の被抑壓物を想起する機會よりは遙かに大きい。換言すれば、大人になつてから無意識化せられた內容を理解すれば、昔から抑壓されてゐる本能感情に對して自我がこれを滲透する力が增大する。轉嫁と云ふ狀勢(シチユエイシヨン)に於いて患者は彼の幼時からの被抑壓狀勢を繰返すが、幼時の自我の代りに成長した自我は、この感情と鬪はねばならない。加ふるに、轉嫁に於いて働いてゐる感情はそれに相當する幼時の感情よりは強くない。何故ならば、それは後者の實驗例に過ぎないから、抑壓せられてゐるもの丶全部が分析中に想起されるのではないが、想起し得るものは大體、分析者への轉嫁の感情內容並びに現下の實生活上の狀勢の感情內容が意識されてからのみ、想起せられ得るのである。（完）

右と左の象徴的意義（ヴェルナー・ヴォルフ）

中尾破邪譯

左の一文は現在西國バルセロナにヒトラー黨の危難を避けてゐる獨逸精神分析學界の新進ヴォルフ博士の論文である。博士は今パリ、ソルボンヌ大學に一講座を分擔し、最近興味深い實驗を行つた。

「右」及「左」の概念は一定の立場からの方位を表はすのみならず、原始部族、中世紀及近東地方に於ては神秘的な意味を有し、この神秘的意味は年を追ふて其の象徴的色彩を濃厚にしてゐる。今日に於ては右と左の概念は一定の目的を有する大衆の運動を指示する。左は最近の現れ方に依ると、國際化及國境撤廢の計畫を表し、右は國家的及分離的計畫を示す。右翼の運動は「獨裁」制度即指導し指揮する個人の支配の下に實現せられ、左翼のそれは大衆制權の旗印の下に置かれる。斯くして政治の方面に於ては右及左の原理は明確な意義を有するに至つた。

一般に此の種の概念は最初の象徴的內容を失ひ、言語としての本來の屈伸自在性の幾分を喪ひ、幾變遷を經て遂には單なる名稱に過ぎなくなる。科學の任務の一は近代の抽象的な思想の下に隱された古代の象徴的意義の發見――時には探險――に在ると云へよう。科學は之が發見に努めて力を注ぐべきである。

筆者は二ケ年以來の性格分析學上の研究調査の結果、幾多の事象、並に右と左の象徴的表現に關して多少の光明を得た。

凡ゆる生物は右側と左側とを有する。然し人類は右側に對して多大の優越性を感じる。人間が實際に行動するのは右側からであり、我々の視覺も此の原理に影響せられて我々が事物を認めるのも先づ右側からである。これ

は實驗の證明する所である。此の證明の確實性は尙繪畫を寫眞に複製する場合にも立證せられる。卽對物レンズの兩側を顚倒して右側に在るものを左側に在る樣にすると、凡ゆる繪畫は右側の效果を求めて描かれてゐると云ふ單なる理由から直ちに似而僞に表はれて來る。勿論、人類の中には多數の左利きがあるが、彼等の中の大部分は、最近の研究に依ると、精神的或は肉體的に缺陷のある者、若しくは精神病者である。少數の例外としてナポレオン、ゲーテ、ベートーヴェン、レオナルド・ダ・ヴィンチ等は暫く之を措くことにする。斯くして原始民族の間に於ては左利きの數は非常に多く、時には其の割合は右手を完全に使用する者の割合を越えることがある。古代民族も亦之と同じ特色を示し、左から右に走る文字の羅列法は單なる部分的現象に過ぎない。

動物が左利きか否かと云ふ證據を發見するのは少々困難であるが、此の點に關して行はれた實驗に依ると、一般に動物の動作は左側で行はれる。例へば鹿は左の角で鬪ひ、馬の驅歩(かけあし)は左であり、右で跳躍する樣に手綱を引いても馬は左脚で跳躍する。獅子其の他の野獸は左足で餌食を引ちぎる。

右と左の重要性は一般化してゐる凡ゆる傳說に於て一致してゐる。左側は「苦しい、惡魔的な、危險な」、又「魔術的に效顯あらたかな」ものとなつてゐる。右は「良くして正しい」ものである。多數の國語に於て「右」と「正しい」或は「眞直ぐな」の兩語は同一の語源を有し、「左」と「下手な」或は「歪んだ」の兩語も然りである。例へば前者は佛語に於てはいづれもdroitであり、獨語ではrechtであり、後者は佛語ではいづれもgaucheであり、獨語ではlinksである。惡魔は常に左に居り、魔術的な若しくは宗敎的な動作は常に左側から始まる。聖書の中にも、或る宗敎戰爭の場合にベンジャミン部族の中から「右手を使はない」七百名の兵士の選拔されたことが記されてゐる。

此の原則は人間の顏貌に就ても明かに觀察される所である。例へば寫眞に撮つても、顏の左半面と右半面との間に如何に大きな相違があるかゞ容易に解る。先づ陰畫を折半して右半面を燒附け、更に之を飜して左側にも同じ右半面を燒附ける、同樣にして兩側とも左半面の寫眞を作る、この二枚の寫眞は全く其の表現の型を異にし、二人の違つた人々を夫々寫した樣に見えるであらう。

右半面は我々の經驗の基礎となつた雛型に類似し、之に引代へて左半面は無感覺な、種族の特徵を反映する表情を示す。右半面は生活的な印象を與へ、左半面は暗い、沈んだ、或は時には一層智的な、抽象的な、神秘的

な印象を與へる。各種の肖像に據つて得た實驗の結果は近々一冊に纒めて刊行する豫定である。不思議なことには藝術作品は、幾多の變遷を經て生れた歐洲のものゝみならず、野蠻人、希臘人、埃及人、ゴチク時代の繪畫、彫刻、兒童の素描に至るまで皆同樣の法則の下に支配せられてゐる。斯うした經驗、殊に葬式の假面、木乃伊（ミイラ）に現はれてゐる樣な死の錯覺的表現に影響を及ぼした經驗から生命の法則が抽出される。卽ち、此の法則に據れば、右側は個性に應じ、左側は宇宙性、集結性、種族の連繫、超個人的精神、並に崩壞、死を說明する。此の法則は動物の世界に於ても殆んど不變である。動物の顏貌に就ても同じ經驗を繰返へせば、結果も矢張り同一である。動物の右半面は潛在的、個人的表現に合致し、左半面は其の種族の普遍的、典型的表現に一致する。

以上の結果は尙之を深く確めることが出來る。「右半面宛（づら）」及「左半面宛」の先の肖像を或る人に示して、之を性格學上から批評させるとする、其の人は恰も我々が右に說いて來た差別と同じ方向に常に判斷を下すであらう。其の中で深く興味のあることは精神病者の示す反應である。寫眞の中から彼等は「左半面宛」のものを獨りで選び出し、之を凝視しながら、やがて死に就いて語り出すであらう。之に反して健全なる者は好んで「右半面宛」のものを選び出すであらう。右が個性に應じ、左が種に應ずるとすれば、左利きの者が個性を持たないのであるから明かに、多くの場合に於て劣等性を示すのは當然のことである。他方、然し又同一の理由からして、左利きの中に個人的性能を超えて種の勢力を保有する超社會的人物が出現するのも不思議ではない。原始種族及動物が左利きの傾向を有するのも、之に倣つて理解せられる。と云ふのは、彼等の中心勢力は恰も種の特質的勢力卽ち生殖であるのである。斯くして最後に我等は、近世卽ち個人支配の近世が「左」翼の原則、卽ち種の勢力を統合して個性に反抗する原則に對して脅威を感じ、自衛を企てる狀況を理解することが出來る。

夢の分析も亦我々の所說に大なる論據を齎すものである。夢の表出は神話及魔女物語のそれに類似してゐる。個人の生命の法則は同一であり、人類の生命のそれに一致する。母胎內の胎兒が人類の全變遷の痕跡を有する樣に、我々の魂は永く宇宙的、原始的法則に支配せられる。夢の中で左が重要な位置を占めることは、之亦現在と過去の世界の間の相關を示すものである。

最後に結論として、再び政治界に於ける右と左の重要さに立ち返らう。

凡ゆる大衆運動は象徴的關係の意識の燃燒によつて或る種の象徴的標識を使用する。屢々右翼の運動が類似十字形（例へば卍形）を選ぶのも、それは偶然の一致に據るのではなく、寧ろ秘密な關係の直觀的認識に據るのである。十字形は實に深い意義を有するものであつて、右に廻るが如く見えるものと、左に廻るが如く見えるものとの二種に描かれるが、いづれも數々の傳統的意義を備へてゐる。左に廻るが如く見えるものは本來「ツワスチカ」と稱せられ、支那語の「二千」から出で、其の用ひ方に應じて「全」即ち地上の全事物、地上の全國家、全世界を意味する。日本語では「ツワスチカ」は永遠の生命を意味し、佛教では「永遠の運命」、全への融合を表はす。要するに左廻り十字形は集合關係の標識である。

右廻り十字形は、神話の中で人間に敵意を抱いてゐた「氷」、「石」の二巨人を倒した善神「トル」の槌を表はし、原素的勢力を人格化したものである。即ち戰爭の象徴、集合的勢力を抑壓する個人の象徴である。

此等の象徴の牽引力及效果は理性の注意を逸脫し、潜在意識の奥底に沈んだ生命の內的法則から浮び出る象形の光彩として、又以上に述べた右と左の原則の如き頭初の原則の結果としてのみ理解せられてゐる。（了）

或る偏食兒童の心理

大束視一

紫に近い程蒼い顔をし、痩せ細つた十歳の女の子を私は前に呼んだ。彼女は、クラス中で最も身體が小さく病氣勝ちで、成績も行儀も甚だしく劣等であつた。その骨張つた顏には、自棄的な反抗的な陰慘な表情が滿ちて居り、額には子供らしくない深い溝が縦に二本まで通ってゐた。私が今呼んだのは、彼女が毎日の樣に遲刻し、宿題を無視し、忘れ物をする事について訓戒する爲であつた。しかし、今まで度々の訓戒も效果がないのでほとほと手を焼いてゐた。彼女の憎惡と、怨みの顏を見下して、遂に私は訓戒を止めようと決心した。

「お前のお父さんは靴屋の職人だね、毎日仕事があるのかい?」

子供は首を振つた。彼女は二階借りの身分である。

「お母さんは何をしてゐる?」

「赤ん坊を負(おぶ)つて内職してます。」

「五年の兄さんは何をしてゐる?」

「戸外(そと)で遊んでゐます。」

「お前は?」

「學校にゐない時は何時も赤ん坊(女)を抱いて遊びます」

「外では友達とは遊ばないのか」

「えゝ。」

「宿題をしなかつたり遲刻したりするのは、其の爲かい? 朝學校へ來るまで赤ん坊を抱いてゐるのか?」

「えゝ。」

以前から私はこの子に偏食の疑ひを持つてゐたので、次にかう訊いた。

「お前、御飯はどんな物を食べてゐる?」

「御飯少しと漬物だけです。」
「外の物は嫌ひかい、甘い物も食べないか？」
「漬物の外は皆嫌ひです。」
「家の人は何を食べる？」
「豆やお魚やトンカツや、御菓子も食べます。」
「御菓子は誰が食べるのだ？」
「大てい赤ん坊が食べます。」
「ぢや、お前は赤ん坊にお菓子を食べさせて、自分で欲しくないか？」
「ほしくありません。」
「一體、いつ頃からお前は漬物の外は嫌ひになつたのだ、赤ん坊の時からかい？」
「七つの時からです。」
「その赤ん坊は幾つだね？」
「三つです。」
「赤ん坊は可愛いか？」
「可愛いです。」
私は思ひ當つた。突然の理由のない偏食癖と競爭者としての赤ん坊の出現の時期とは殆ど一致してゐる。私は翌日、更に母親を呼んで訊いた。
母親は藁草履を穿き、問題の赤ん坊を背負つて敎室に入つて來た。彼女は「全くの話、夫の恥を申上げなければならねえので」と云ふ所から口を切つて、先づ自家の貧窮を訴へ、次に一般的好景氣に伴はない職業の存在する事を講釋し、更に自分達が如何に二六時中、子供の事ばかり心配してゐるかを力說した。彼女の抱いてゐる敎育上の理想主義が、經濟的必然の爲に、結局は自由主義に陥らねばならぬ事を涙と共に語つた。
「でも良くした物で、上の男の子二人は大變活潑で、しよつちう外で遊ぶばかりですけんど、あの子は本當に私の云ふ事をよく聞いて手傳つてくれます。親爺の仕事のあるなしや、賃錢の入り高を毎日心配してくれるのもあの子だけで御ざアます。」
彼女には、其の子が學校に於て學業操行が劣等であるとか、敎師に對して反抗的であるとか云ふ事實は、殆ど理解し難い所であり、又取るに足らぬ事であつた。子供は家で從順でありさへすればよいのだから――。
しかし、その子の不健康と偏食については、彼女も些かの關心を催した。彼女はかう言つた。
「體の弱いのは生れつきで御ざアます。本人が好きなら何を喰べたつて良いぢや御ざアませんか、この二三年で急に好き嫌ひの變つたのも矢張り年のせいで御ざアませう。」
私はすつかり閉口して、ともかく健康の爲を表面の名

とし、「偏食、子供らしくない心配や手傳ひ、赤ん坊の執着」を禁じ、「戸外運動と宿題の勵行、遲刻の全廢」を命じた。特に食物の變化（バラエテイ）と榮養について多少の關心を持つ事を希望した。彼女は肩をそびやかし、口をふくらませてから答へた。

「それはもう良く存んじて居ります。私も時にはあの子が可哀さうになつて、金さへあれば三四年前の樣にデパートへ連れて行つて、ライスカレーや蜜豆くらゐ腹一杯食はしてやるので御ざアますけんど。」

果して數日後の作文に、その子は母親とデパートで身分不相應な豪遊をした事を書いた。私は、みじめな子供と、醜い母親とが、デパートの食堂や遊び場（スポーツランド）で其の突發的な理想を滿足させてゐる時の悲慘にも滑稽な姿を想像した。田舍者や貧困者の持つ、日常生活から全く遊離した安易と快樂への笑ふべき理想が、如何に子供の心理に影響するかといふ事にも思ひ及んだ。

月に一度くらゐ、デパートの豪遊（主として食ふ事）に連れて行かれた子供が、妹の出現と經濟的事情の爲に、その享樂を斷たれた事と偏食との間の關係を考へて見た。私の推量は次の樣であつた。

――幼兒時代に甘やかされた彼女は、妹の出現によつて急に變へられた自分の待遇に對して次の樣な態度を執つた。卽ち、一つには偏食によつて兩親の愛への拒否と抗議を表はし、一つには學業も遊戲も投棄てゝ一日中赤ん坊を世話する事によつて、新來者への妥協とその赤ん坊を母の手から奪ふ事を策し、又一つには母へ絕對順從であると同時に父（及び先生）には非常に反抗的態度を見せるのである――と。

私は彼女に、兩親へ幼兒的な過大な愛を要求する事を止めさせ、兩親への定着及び妹への憎惡を解放しようと努めた。兩親は兩親、妹は妹、自分は自分といふ考へを確立させようとした。彼女は兩親への怨み、赤ん坊への憎惡を想起する時、非常な衝動を受ける樣子であつたが、漸次に私の計畫は成功した。一ケ月程で彼女は偏食を止め、妹の傍を離れ、學業の方も多少上つて來た。顏色もよくなり、幾分肥つて來た樣であつた。（完）

偏食の子供は年齡よりも幼兒的である。心理が發達して來るにつれて食物の嗜好も變遷してくる。早熟の子供は食物の嗜好も概して大人びて偏食的でない。分析處置が胃腸に影響することは著しい。（R）

結婚恐怖症の分析例

北山隆

彙報欄に揭げてゐるやうに、米國在住、ドイツ出身分析者ファイゲンバウム氏は長逝せられた。氏は當研究所と親しい關係にあつたので、氏を弔する意味にてこゝに氏の論文 Dr. D. Feigenbaum: Structure of a Case of Gamophobie, 1930の大要を紹介する。

×

彼女は現在三十才で十一年前に結婚し、既に十才の女兒を持つてゐた。平素は陽氣な女で非常に音樂とダンスに熱中し、更に散步・旅行・乘馬と云つた樣な肉體的運動を好んだ。元來自分では妻とし母としての生活に滿足してゐるつもりであつたが、結婚後一年して、突如ある恐怖症狀が起つた。しかも、その發作の度に實家へ歸つて兩親の慰撫を受けると直ぐ恢復すると云ふので、遂には實家から還へらうとしなくなる始末であつた。事實この十年の間、彼女は殆ど實家で暮した。

その發作は、輕い憂鬱、妄語、不眠等に始まり、重い時には――特に彼女に婚家へ歸る事を勸める人があつたり、又は彼女自身で其の方がよいと考へたりした時には必ず數日乃至數時間に亙つて起るのだつたが――全身が震るえ、落ち込む樣な感じが胸元に起こり、胃の鈍痛があり、水が呑みたくて仕方がなくなり、それが頂點に達すると、口に何やら唱へ出すのであつた。その唱へる事によつて幾らか氣がすむらしかつた。(その言葉の中には明白に死の不安を表はす物があつた。)

注目すべきは、かうした發作の起るのは、彼女がその直前に、母(生家)の世話を熱心にやつた時である事である。彼女は常に「母に何か變事が起りはしないか」と云ふ事及び「憎惡の感なしに、男を見たり男の事を考へたりする事は出來ない」といふ觀念を强迫的に恐れて居り、外出先で母の安全に對する怖懼が非常な苦痛發作と

なつて現れる場合すらあつた。

母への忠實と親愛に引換へて、彼女は常に父親を惡く云ひ、不從順で亂暴な役に立たぬ人間だと責めつけ、分析中に實家の事を云ふにも常に「母の家」と呼んで、決して「父の家」とは云はなかつた。

彼女の結婚生活はどうであつたかと云ふと、勿論不感症であつて性行爲を忌み嫌ひ、たゞ長い間自己の××に觸れてゐる事――「永遠の刺戟」と彼女は云つたが――のみは多少の滿足になるらしかつた。

右の如き神經症の由つて來たつた原因について、分析の敎へる所は次の樣であつた。卽ち、父への強い近親愛（インセスト）的衝動と共れに對する抑壓及反動的傾向の現れとしての同性愛竝びに母への定着。之が原因として最大最强のものであつた――と。

各症狀について詳言すれば、第一に彼女の不感症と變態性慾に關しては、彼女が九歲の時、ある男（それは實に父であつた）から性的誘惑を受けた事に契機あることが注意される。之は他の本能的經驗と共に彼女の異性嫌惡を將來し、その爲に正常の性的發展は防げられ、異性愛的傾向は阻まれて母への定着にリビドーが悉く吸上げられてしまつた譯である。結婚後、彼女は夫と母とを同一化し、母への死の願望と不安をも夫へ轉位したのであつて、彼女が夫と家を持つ事の出來ないのも此の隱れた同性愛の爲であつた。

この「母が死ねばよいと云ふ願望」は當然ひどい抑壓を受け、贖罪的動機から母への過度な愛情と不安が起つて來たのである。理論的に云へば、彼女の超自我は自己の原始的なエスが持つ憎惡に攻めつけられて、過度な不安といふ變裝によつて巧妙にも其の苦痛の重荷を超自我自身で引受け、それによつて「母が死ねばよいと云ふ願望」を滿足させてゐたのである。

母親への強い執着と同居願望とは彼女の無意識にある「母が死ねばよいとの願望」と一見全く相容れない物の樣であるが、實は此處に恐怖症の典型的な機制及び神經症獨特の傾向が見られるのである。彼女が無意識に於て自己と父親とを同一化する――男性的態度をとる――事を、父への相反竝存的態度こそが此の神經症の核心であつたのである。

ダンス等の活潑な動作を好んだ事については、男性的傾向より來る物の外に、アブラハムの所謂「神經症者が持つ、動く事へのタブー的恐怖」が反對の形に於て變形された物として存在する事が想像される。

八ケ月の分析によつて彼女の肉體的症狀は消失し、口に何やら唱へる事及び種々の不安も止み、性生活も常態

へと恢復した。そして遂に十年間執着し續けた母の許を去つて、新く自分の家庭を立派に作り上げ、一個の既婚夫人として又親として獨立した。

以下に、最初より數回に般る分析治療の經過を報告しておく。

第 一 回

M夫人、背の低い、筋肉質で、伸た力強い腕等、一般に男性的外觀。聲は太く抑揚に怒つた樣な強い表現がある。まるで咳が胸に支へてゐるかの樣な、又は固く縛り上げられた者の樣な恰好を度々する。自分でそれに氣がつくと急に姿勢を變へる。聯想は困難で連續せず、數秒をおいて爆發的に反應する。輕い憂鬱、病氣に對する不安。

要點——表面に見える父への同一化。母親への退行傾向、寝床で胎内的な姿勢をとつてゐるのはそれと關係がある。積極轉嫁の徴候として恐怖、罪の意識などあり。

第 二 回

患者の夢——(赤ん坊を持つてゐる)義妹が來て、子供が荷車に轢かれたと告げた。彼女の小さい娘は外で馬に乗つてゐた。でも彼女は驚かなかつた。何故なら妹も一向興奮してゐないので、彼女をからかつてゐるのだ思つたから。

又——彼女は浴衣とセーターしか着ないで寄席へ行つてゐるので困つてしまひ、恥かしく思つた。

又——彼女は暗い道に立つて恐怖を感じてゐた。そこへ一人の女が來て「一緒に散歩しませんか?」と云つた。

聯想——彼女が散歩や乗馬を好む事。前夜寄席へ行つた事。「一人の女」は老人ではなかつた。彼女は一人で外出する事は殆どない。

夢の分析——不安と焦燥の夢であり、重大な心的葛藤が明白に見えてゐる。最初の夢に於ては義妹と去勢コムプレクスとの同一化による男性器嫉妬及び之に對する願望が見られる。(荷車が子供を轢いた事に)他の夢には去勢コムプレクスと深い關係のある露出慾が表はされ、又母への退行的傾向も見える(暗闇への恐怖)更に分析者と母との同一化が、彼女と散歩をしようと云ふ女によつて示されてゐる。

要點——性への恐怖、死、それへの抵抗。母への退行的傾向、(死?)露出慾。以上三者はみな去勢コムプレクスに關係があるらし。

第 四 回

夢——暗い部屋に走り戸がある。母がその戸を押し戻した途端に母が話し出した。まるで氣が狂つた樣に。彼

女は驚いて外へ飛出し、人を呼ばうとした。しかし母はやがて普通に話す様になつた。その時に急に彼女は赤ん坊を抱いてゐるのに氣がついた。

聯想——彼女は娘を生んで、六ケ月してから山へ行つた。彼女はそこで氣を失つた事があつた。「氣が狂ふ」といふのは、氣を失つたと同じ事なのだ。夢の中の母親は實際より老けて見えた樣だ。部屋は丁度この分析者の部屋と同じであつた。それから又「氣が狂つた」といふ事に關しては、彼女自身が度々氣が狂ひはしないかといふ恐怖に捉はれるのであつた。それに彼女は、分析療法に於る自由聯想法と「氣が狂つた樣に話す事」とを、一種特別に關係づけて考へてゐた。子供については、彼女はこの十年間子供を抱いた事がなかつた。

夢の分析——典型的な轉嫁性の夢、分析者と母との同一化、去勢コムプレクス（男性器羨望、男性器としての子供を持つ事、無生物時代への退行的傾向（死の衝動）、分析者と母との同一化。抵抗。

第五回

夢——小さい火事、それが大きくならない中に誰かゞ消してしまつた。大きな焔ではなかつた。彼女は義妹の男友達を一人見た。

聯想——十五歳の時、彼女が勤めてゐた商店に火事が起つた。その時の煙と興奮と、そしてヒステリー性呪文發作の中で一番ひどかつた時の恐慌とを想起した。忽ち彼女はもう一つの火事を思出した。それは彼女の臺所で起つた物で、彼女が叫ぶと父親が飛んで來たが、父は光景に怖れをなして何の役にも立たなかつた。「友達」といふのは、彼女は遂に一度も會へなかつたが、聞く所によると大變背の高い良い男で、義妹はその男の事を何とも思つてはゐないと云つてはゐたが。

夢の分析——男性器空想（勃起、小さい焔が大きくなる、美しい背の高い男）。父（分析者）に對する失望と不信用（大きくならない中に消してしまつた。深い所には去勢コムプレクスが明示され、彼女が男性器のない女性であるといふ性決定に承服する事への嫌惡と、男性器を與へなかつた、兩親への非難が示される。

第六回

夢——（分析者）に他の場所で會ふ爲に彼女は歩いて行つた。そこは廣間で醫學實驗室であつた。分析者と今一人の醫者が居て、分析者は半分藥の入つた瓶を手に持つてゐた。そしてから云つた。「これをお飲みになるといゝのだが。之は貴女の爲に作つたのです。」

又、彼女が前に勤めてゐた所の樣に高い場所にある部屋の一隅に分析者がゐて、靴屋の樣に靴をこしらへてゐ

た。「お醫者が靴を作るなんて可笑しい」と思つた。分析者は別人のやうに見えた。

又、彼女は自分の家の方へ上つて行つた。實際の家とは違うのだが。彼女は手に包を持つて自分の家の方へ上つて行つた。彼女の直後に一人の若い男がゐた。その男もやはり包を提げてゐた。彼女は少し怖くなり、男が彼女を追跡てゐるのだと思つた。で、少し速く歩き出した。一人の小さな男の子が「あの男は貴女をつけてゐる」と云つた。家に入ると彼女の既婚の兄、その妻、その小さな赤ん坊がゐた。

聯想——後にゐる男は分析者の事である。二人とも同じ包みを持つてゐるのは、彼女が分析者と同じ樣に考へる事を分析者は强ひてゐるからである。「男の子」といふのは實際彼女の家にゐる。

夢の分析——分析者への積極轉嫁(瓶は母を表はす)と共に嫌惡が(も一人ゐると云ふ所に)見える。藥瓶を得る事は男性器獲得の意味がある。從來しば〳〵出てゐる「小さい物」といふのもさうである。分析者を輕蔑せんとす(去勢する)傾向、卽ち靴屋だといふ事、分析者に對する競爭意識(二人とも包を持つてゐる)

後に跟いて來る若い男は分析者であると同時に、更に父・男性器・子供の同一化、ひいては糞便へと連續する同一化を示す物である。又患者がよくこほしてゐる慢性便泌は男性器抑留を意味する。つまり女××から取去られた男××を肛門に於て保持せんとするのである。

要點——分析者に對する相反並存的態度をこゝにも示してゐる。肛門性感、便祕の心理起源、男性器保持願望。

第八回

夢——何所だか判らない家に居た。どこもかしこも目茶々々で、狼狽した時の樣にいら〳〵してゐた。寢室の樣な部屋に彼女の義妹がゐて、一人でベッドに寢てゐた。寒い日で風が烈しく、カーテンは窓に當つてバタバタしてゐた。彼女は「何故窓を開けて置くの?、新しい空氣が吸ひたいから?」と訊いた。窓の外にはヴェランダがあつて、も一人の義妹が其處で赤ん坊を抱いてゐた。「どうしたの、その子は黑ん坊みたいに眞黑ぢやないの?」と彼女は云つた。赤ん坊が泣いてゐるので義妹はゆすり乍らあやしてゐた。そこで目がさめた。

聯想——カーテンのバタ〳〵する事については、昨夜寒かつたので彼女は窓の開いてゐるのを苦にしてゐた。赤ん坊については、彼女の夫の妹がこの頃姙娠した事を彼女に告げて、「藥品を使つて姙娠防止を試みてゐたつに失敗した」と云つた。彼女は黑人の赤ん坊が好きで

先日こゝへ來る電車の中でも一人見た。「あわてゝゐる」といふのは、昨日彼女は此處へ狼狽てゝ來たのであり、尙、彼女は「寢室の樣な」とはこの診療室の事である。ヴェランダ付きの家が好きであつた。

夢の分析——寢室に於る彼女の實際上の冷淡さが妊娠恐怖を强めてゐる。この去勢恐怖が分析療法に轉嫁されてゐる。

備考——母たる事、又は女性たる事への反抗。

×

右の症候に對する分析的診斷

一、(a) 肛門期及び男根期の定着。

(b) 著しい去勢恐怖。

(c) 胎內への退行的傾向。

(d) 夫に對する相反併存的態度、及びそれに由來する諸種の態度。

(e) 轉嫁の困難及び抵抗。

二、父の愛に對する失望と不信用とが彼女の異性愛的傾向を全く破壞してしまつたらしい。その結果として母親へ定着する事になつたが、これつきとした同性愛には陷らなかつた。

三、不安症狀はどうやら去勢恐怖に根ざしてゐるらしく、不安の直接原因は母の死に對する願望への恐怖である。

尙ほ其後引き續いて行はれた分析も、右の診斷を確證する所があつた事を附言して置く。（完）

時言二題

大槻憲二

一、豐太閤の誤てる政策と今日

杉森孝次郎氏は、戰爭はすればする程その國民は强くなると云つてゐるさうである。私は氏の論著を精しく讀んでゐるわけではないから、この紹介に就いて文献的責任を持つことは出來ないが、氏の論說に相當傾倒したことのある人から聽いたことであるからこれは恐らく誤りのないところであらうと思ふ。或は氏の言說としなくてもよい。一體にファシズムの哲學者たちはさう云ふ意見を持つてゐるらしいことは疑ひの餘地はないやうだ。無論この言葉が全部的に間違つてゐると、私は云はうとしてゐるのではない。相撲や拳鬪はあまり無理をしない限り、場數を踏めば踏むほど强くなると云ふことは極めて一般的な命題としては眞實であらう。併し戰爭は生命に關することで、その點スポーツとは違ふのだから、スポーツに就いての眞理がそのまゝ戰爭に宛てはまるとは考へられない。私はフロイドと共に、戰爭は恐らく人類が人類である限り、いつまでもなくならないものだらうと思つてゐる。私は戰爭罪惡論者の神經症的臆病を憐笑するものではあるが、さりとて戰爭讃美論者の病的サディズムとナルチスムス的誇大妄想を苦笑するものである。

ABHUB　アブフウブ

他の學問がアブフウブ(屑)として棄てたものゝ中から、分析は眞理の黄金を探し出す。

女中と泥棒

不老泉院主

五月二十五日の各新聞は、豐島區の某博士邸の女中が夜半泥棒に襲はれたと警察に訴へ出たが、後にそれが夢であつたと分つたと云ふニウスを報導してゐた。本人を分析診斷して見たのではないがこれはヒステリー性の妄想であるらしく思はれる。朝日新聞の記事に依ると「夢の中で最初は自分が賊を細紐で縛し上げた筈だつたが何時の間にか逆に縛られた夢になり主人に訴へたもの」とある。この

一言にて被へば、私は心理科學者として戰爭を一先づ價値觀を離れて見たいと思つてゐる。勿論、價値觀に卽して見るとき（卽して見ることの必然は固より當然であるから）、或る戰爭は罪惡となり、或る戰爭は讚美すべきものとなるだらう。

私は嘗て本誌上で、イタリーとエチオピアとの間の戰爭を論じて、これは自然現象としては當然であるが、道德的には惡である。少くともムソリーニの政治的態度と手腕とが拙劣であつたと云ふことを論じておいた。私はそれに就いて、或る讀者から質問を受けた、私はファシズムに加擔するものであるかと。私は明かに答へる。私はファシズムを道德的見地から全部的に是認することは出來ないが、旣に拙著『新しき立身道』の中で云つておいた通り、極めて一般的な意味に於いて、ファシズムに積極的な面がありとすれば（それは確にあるのだが）その限りに於いては、私はファシズムを是認するものであると。では、ファシズムに於いて是認せらるゝ生活態度の積極性、能働性とは如何なる意味に於いてゞあらうか。それは、（一）自國の力（民衆の生活）がそれに堪え得る限りに於いて、（二）國民全般が超自我の苛責を被らざる如き方法にて爲される限りに於いて、（三）その結果が隣接國民の幸福となる限りに於いて、である。さて、これ等三つの條件の解釋如何がなか〳〵問題であつて、その解釋の相違に現下流行語の一つたる「時局認識」の水掛論的問題が存するわけであらう。

A國がB國から侵略又は支配せられることがいやであるならば、A國はB國の干渉を許さない程度の武力を備へるより外に道はない。それだけの武力

妄想を分析すると、明かにヒステリー症候に於ける一人二役と同じものである。ヒステリー發作中の症候に於いて患者は一人で男女二人役を同時に演じるものだと云ふことは、フロイドの『分析戀愛論』（大槻譯）の中に詳しく書いてある。この女中さんも夢の中で始めは泥棒（男）として自分を縛し、後には自分（女）として縛せられてゐる自分自身を發見したのだ。このやうに憐れむべき自分を作り上げて主人の救助願望に訴へんとしたところを見ると、どうやら泥棒は願望的に變裝せられたる主人の分身ではなかつたかどうか。我等分析者はこの女中の主人夫妻に對するエディポス・コムプレクスを想定せざるを得ない。殊に彼女は主婦の遠緣に當るものだと云ふから……。なほ記事中には續けて「窓や抽出の狼籍は夢の中に夢遊病者の如く自分でやつたもの」とある。自分自身が抑々「窓」であり「抽出」であるのだから、これは自分で自分を縛したのと同じ意味になる。都新聞の記事によると「昨年三月以來同家に雇はれてゐたが、度々泥棒に襲

を備へずして（或は備へるの努力を拂はずして）徒らに正義や道德のお題目を唱へることに依つてのみこれを防遏せんとするが如きは、これ幼兒的全能念慮の魔術の類に外ならない。弱肉强食は、善惡を論ずる前に、自然の現實である。我等は現に、弱者たる魚獸肉野菜の類を食つてその生存を保つてゐるのである。もし嚴格に正義道德のお題目を唱へるならば、吾等まづ神の造り給ひし魚鳥菜果の類ゝ喰ふことをやめなければならぬ。さう云ふものは平氣で喰つてゐて、自分のみが他の生物（叉は他の國人）から喰はれることを不正不道德とするが如きは、これ明かに分析者の所謂心盲（スコトミザチオン）である。

　Ｂ國がＡ國を倂合すると云ふことは、或る意味ではＢ國の自己防衛でもあるのだ。何となれば、隣國に幼兒的全能念慮の魔術に信賴して何ら現實的な生の營みを努めざるぼや〳〵した國がある時は、やがてそのＡ國が更にその隣國なるＣ國に依つて倂呑せられるかも知れないと云ふ可能性があるから、さうしてその可能性が實現せられたならば、Ａ國を倂呑したるＣ國は倍の力となつてＢ國を脅威することになるから、さうなればやがてまたＢ國はＣ國の前にＡ國同樣の運命に陷らなければならないと云ふ可能性がさしかゝつてゐると見なければならないことになるからである。

たゞこゝに誡めなければならないことは、Ｂ國が自國防衛上Ａ國を首尾よく倂呑したとすると、そこに味をしめて、極めてナルチスティッシュに、幼兒的全能念慮の心盲點が急に擴大せられて、必ずしも倂呑しなくとも自國の防衛及び發展の上に支障のないＣ國やＤ國、否更にＥ國、Ｆ國までも倂呑し得るものゝ如くに考へ勝ちになると云ふことである。そこにファシズム哲學の

はれた夢」を見たと云ふ。

　とかく御婦人方は泥棒がお好きと見える。成程、一切の男は女にとつて泥棒に外ならないやうだ。何となれば、彼等は彼女等ゝ襲ふて戶口をこぢあけ、内の寶を奪ひ去るものだから……。ところで、その泥棒は大抵の場合、外にゐるのではなくて、内にゐるのだ。この場合は主人であるらしいが嘗て病父の看護に疲れて眠つてゐた間に泥棒に襲はれて姙娠したと云ふ話で識者の間に大問題を惹起した娘の場合は父親であるらしく私に思はれる。女が泥棒に對して割合に落着いてゐるのは、なるほど故あるかなであらう。

女の悲劇性

「要するに愛とは——手段としては戰、動機としては兩性間の命がけの憎惡だ。ではどうすれば女は治療され——救はれるかと云ふ問題に對する私の答へを諸君は聽きたいことであらう。女に子供を作ればよいのだ。子供が女には必要なのだ。男はたゞ道具に過ぎない。」と、ニイチェは『この人を見よ』の中で云つてゐる。

妄想性と病理性があり、我等分析學徒の戰爭觀との分離點がある。宛も、××が目指す家に忍び込み、最初の一二點を首尾よく手に入れると、調子に乘つて別に×まなくともい丶他の荷厄介な品物までも大風呂敷に包みこみ、さてこれを舁ぎ上げようとしてもいつかな腰が立たず、まご／＼してゐる内に家人に眼をさまされ、到頭警察に突出されると云つたやうな滑稽な場面を演出せんとしつ丶あるのではなからうかとの不安を我々は某々ファショ國の某々ファショ政治家等の言動に就いて憂慮するのである。何となれば、さう云ふ不安は爲替相場の暴落、正貨の流出、物價の狂騰、インフレ必至の趨勢などの形をとつて某々國民生活の全般をおびやかしつ丶あるらしいからである。それ等の政治家は連りに別の政見者流の「認識不足」を云々してゐるけれども、心盲點の擴大が何れの側にあるかは、分析者の判斷に俟つより外に道はなからう。

こ丶に於いて我々は、數百年前に太閤秀吉がとつた大陸政策とその破綻とを聯想する。彼は國内の統一未だ必ずしも十分に成らざるに、その勢力の大部分を擧げて朝鮮征伐と明國威嚇とに向つたのであつた。その結果は、朝鮮國内を僅かに騷がしたゞけで實質的には殆ど得るところなく、明國をも大いに脅かして太閤及び日本の威力を示し得たつもりでゐたらしいが、事實はその正反對で、日本の面目を却つて失墜したのであつた。明國に赴いた秀吉の使者は相當大きな事を云つて明國王を脅かすやうにとの太閤の命を帶びて明國へ渡つたらしいが、先方の威力を見ては急に小さくなつて太閤が明國王から日本の國王に封ぜられることを懇願してゐると口から出まかせに云つたものらしい。（それは明國の記録に殘つてゐる。）一人か二人で出掛けたのだか

彼はなかなか分析的に鋭い男である。併し女は子供を持つてもまだ救はれない場合がある。それは愛する男の子供でなければならないからだ。ところで分析せられざる女にとつて手段としての男以外に眞に愛すべき男と云ふのは殆どないのだからそこでたとへ子供が出來てもそれに全部的に滿足することが出來ないらしい。そこに女の宿命的悲劇性があるやうだ。これを救ふものはたゞ分析のみであらう。

龍と鳶

老生は四月末に上州方面を一週間ばかり旅行して來たが、その間、丁度端午の節句を目前に控へてゐるものだから、民家の前に鯉幟が至るところひるがへつてゐるのを見て、民の寢床は賑つてゐるわい、と低殿に立つて微笑したことであつた。

ところでそれと同時に、子供たちが至るところで、紙鳶を揚げてゐる風景を見て、これは東京あたりではお正月につきものであることを知つてゐるだけに、私

ら生命が惜しければ誰だつてさう云ふだらう。そこで明國王はいゝ氣持になつて、「太閤を日本國王に封ず」との封書を使者に持參せしめた。太閤は使者を引見して見ると、自分に朝貢する旨の返書かと思ひの外「日本國王に封ず」と云ふ文面であつたので、大いにアテが外れて怒つたので、必ずしも忠君の心から怒つた（さう云ふ風に一般には誤解してゐるやうだが）のではなかつたらしいのだ。

太閤は晩年になるほど頭の調子が狂つてゐるので、その事は、拙著『新しき立身道』の中にも相當詳しく論じておいたが、この朝鮮征伐頃からそろそろ疑はしくなつて來てをつたらしく私には思はれる。とにかく、自分の力にも當時の日本國民の力にも合はない、柄にない大袈裟なことをやつてゐる內に、豐臣家の勢力は衰へて行つたのであらうと私は思つてゐる。さうしてその衰への中に割り込んで行つたのが德川家康の狡智であつたらうと思はれる。して見ると、家康は漁夫の利を占めたわけになる。家康は秀吉の大風呂敷的積極主義の失敗を眼前に見たから、鎖國して國力を內に充實する政策をとり、結局それは消極主義となつて、國民生活を萎微せしめた。

一體、わが國の歷史を見ると、週期的にこの大陸政策が繰返へし行はれてゐるらしく思はれる。神功皇后の古へから、幾多の事件を通じ、秀吉以後では明治初年の西鄉隆盛の征韓論、併し何れも徹底的にはこれを支配し得なかつたのが、日淸、日露の兩役後に始めて、日本建國以來の願望が實現せられたので、わが國民の全能念慮（ナポレオン・コムプレクス）は相當の程度にまで高まつて來たらしい。併し現在に於ける自分の力と自分の必要と云ふことを眼中に置かずに、あまりに慾張つて荷物を掻集め、大風呂敷に詰込みす

は不思議な感じがした。併し分析的に考へ直して見ると、必ずしも不思議ではなかつた。正月も五月も季節の變り目と云ふ意味では同じであるらしいから。さうして季節の變り目は出產期の象徵となるらしいことは、大槻著『精神分析讀本』の中に論じてある通りだ。出產期の象徵たる春に紙鳶を揚げると云ふことは、出世願望の象徵的充足であるらしい。鯉が出世魚と云はれてゐるから鯉幟はやはり同じく出世の象徵である事は申すまでもない。鯉幟も高く揚がる（出世する）が、それよりももつと高く揚がるのは紙鳶であらう。ところで、鯉と鳶とは何の關係があるかと人々は訊くであらう。一つは魚であり、他は鳥である。關係なさゝうであるがこの魚化して鳥となつたらしく私には思はれるのである。『莊子』の逍遙遊篇に出て來る北冥の大魚化して大鳳となる話のやうだが、これは人間の無意識空想の發展過程上から證明出來るやうだ。何となれば、この鯉なるものは本來「龍」に外ならぬらしいからだ。支那の龍門を超えたる鯉から出世の緣起が出て

ぎると、遂に腰の立たないやうな結果になるだらう。その時漁夫に利を占められるやうになつたらば一體誰が責任を負ふのか。責任を負ふべきものは死んでゐても、負ふべく餘儀なくされるものは元々責任のない民衆なんだ、次代の民衆なんだ。然るに「民衆の聲は信ずるに足らぬ」のださうである。

二、實驗心理學の藝術性

私は本誌前々號に早稻田大學心理學敎室內田勇三郞敎授の運轉手作業障害の實驗報告を批評したところ、敎授はその批評に感謝せられ、且つ我等の研究會に出席してその運轉手試驗の結果に就いて多少辯明的解說を試みたいと云ふ依賴があつたので、我等その申出でを喜んで受納れ、五月十七日夜の例會に敎授、及び、戶川行男氏を招待した。然るに、運轉手試驗の結果に就いて別に詳しい辯明はなく、我等の一團を試驗材として、クレーペリン連續加算法の實施をして見たいと云ふ申出であつたので、我等いさゝかペテンにかかつた形であつたが、同學のよしみを以て甘んじてその試驗材となることを承諾した。

多くの讀者諸氏も恐らくは御存知であらう如く、連續加算法と云ふのは、加算用紙を用ゐる。その用紙には一位の數字（アラビヤ數字）が數十行に亘つて羅列してあり、各行凡そ四十字から成立つてゐる。被驗者は先づ6と8とを加算して14の數を得れば、10位を略してたゞ4の字だけを、加算せられたる8と6との中間に書きつける。次に只今の6とその次の9とを加算してその結果を（同じく10位を略して）兩數字の中間傍に書きつける。このやうにして加算し進み行くことと一分にして試驗者は「一分！」と號令を下す。す

ゐるらしいが、その龍門を超えれば鯉は龍となるのだ。それがあらぬか、紙鳶には屢々「龍」と云ふ文字が記されてをるのみならず人間の顏を描くにしても龍の如き古英雄のを擇ぶにきまつてゐるやうである。

然るにこゝに面白いのは、この紙鳶のことを英語ではやはり「鳶」(Kite)と云ひ、ドイツ語では「龍」(Drachen)と呼ぶことである。人類學者等にとつても一つの興味ある主題ではなからうか?

初淵と處女

同じく上州旅行中の一採集であるが、老生は法師溫泉に行つたところ、その入口のところに「初淵」と立札した溪流があつたので、フト立寄つて見た。それはさしわたし二尺ばかり長さ三間程しかない小さな岩間で、云はゞ可愛らしい寢覺の床の如きものであつた。そこだけ剛質の四角つぽい岩石で出來てをり、而も流れの幅が狹まつてゐるので、そこに至るまでゆつたりと流れて來た水がこゝで急にせゝこましくなり、押し合ひへし合つ

ると、被驗者は今書き入れた數字の下に「二」を引く。このやうにして進むこと十五分。各分毎に「一」線を引く。「やめ！」の號令に一同鉛筆を置いて頭を擡げる。このやうにして休んだ後、數分にしてまた始めの命令は下り、今度は五分間にして再び休息となる。

このやうにして作業能率を檢査して見ると「常人、健康者、定型」と「異常人、不健康者、非定型」の二種が發見せられると云ふ。前者の成績を曲線型に圖化して見ると、「初頭高く漸次低下して五、六分目を最低とし、再び上昇し、休憩後は甚だ高き點から始まり緩かに下降する」のださうである。後者のは一定の形式はないらしく種々な樣相を示すらしい。

私は本誌前々號本欄に於いて「私は加算試驗をして見ないが、して見れば必ず上昇型（非定型の一種）であるに相違ないと云ふことは想像がつく。さうして『如何に緊張してゐる時でも茫然とする瞬間』を持つと云ふことも多少は首肯される。」と書いておいたが、試驗の結果は果して「曲線的上昇型」で、「始めの取付きが惡い」のみならず「休息して却つて能率が下る。取付きあし」と云ふ診斷を受けた。さうして一ヶ所だけ「注意のエアポケット（茫然とする瞬間）あり」との警告を受けた。これは自分自身の豫想を裏書きせられたゞけで、それ以外に何の感想もないが、客觀的方法を誇稱してゐる實驗心理學と云ふものにも隨分假定の多いものだと云ふことを今更のやうに痛感した。その假定の二三を私の氣付いたまゝに次に擧げて見る。

一、肆意的に定められた時刻の十五分間に於ける作業成績を以てその人その日の一日間の作業成績を象徵的に示すものと定めたること。（かゝる假定の理由は試驗が比較的單純容易であることを必要とするからである。）

て流れ過ぎると云ふ形になつてゐる。

これを「初淵」とは誰がつけそめけん名なりや我知らねども、實にうまい命名である。法師溫泉を出でゝ第一に出會す淵と云ふ意識的意味からの命名かと思はれるが、併し無意識的動機ではどうしても「處女の淵」と云ふ意味であると思ふ。全く初夜處女の如く tight な感じの淵である。それで思ひ當つたのだが、處女と今書き馴らはしてゐる語はもと「初女」と書いたのではなからうか。「初女」ではあんまりはつきりし過ぎてゐると云ふので抑壓せられ「初」は「處」に轉位せられたのではなからうか。識者の示敎を待つ。

風呂桶病

大槻著『精神分析雜稿』中には室生犀星氏の風呂桶哲學の話が出てゐるが、最近同氏はまた都新聞に『四方山話』の題下に風呂桶の事を書いてゐた。その一節を左に引用して見よう。

「お湯にはいりながら一本のチョコレートを嚙ることは、ひと月に二度くらゐ

二、一位数字の加算と云ふ單純、機械的、無創造的な作業の成績を以てあらゆる種類の作業成績を象徴的に示すものと定めたること。（この假定發生の理由も前條同樣である。）

三、定型の決定が尙早であるやうに思はれること。（たとへ尙早でないまでも、かゝる制定の意義と價値とに相當の疑問あるべきこと。）

四、被試驗者の被試驗中の行動の誠實を當然のものと定めてゐること。（私も實を云ふと多少面倒くさくなつていゝ加減にしてやらうかと云ふやうな衝動を瞬間的に覺えたが、それを克服して終始誠實に遣り遂げたが、學問に對して同情と尊敬のないものが果してどれだけ正直にやるかどうかは甚だ疑問のやうに思へること。）

これを要するに、實驗心理學も甚だ多くの假定の上に立ち、その眞理は假りに眞理だとしても象徵性を帶び、如何にも藝術的要素に富んでゐることを知つた。併しこれは敢えてあやしむに足りないことで、人間のする一切の事は廣義に於ける藝術であつて、優秀なる科學者も畢竟天才であると云ふ點に於いて藝術家と變りはないと信じてゐる我々としては、決して珍らしい發見ではない。たゞ精神分析を藝術的であるから不確實だと云ふやうな一知半解の批難を加へる自稱科學者たちに向つてこの事實を明示しておきたいと思ふのみである。少くとも精神分析學は、實驗心理學ほど太膽な假定の上には立つてをらず、これほど冒險的な象徵主義を豫想するものでないと云ふことだけは、私の斷言し得るところである。（完）

あつた。これは私のからだが要求する滋養分らしかつた。（不老泉院曰、からだぢやない、寧ろ心だらう。）晩秋には柿を喰べることもあり、冬は蜜柑を舐る日もあつたが、青葉若葉のこの頃は甘い菓子を一つつまんで湯殿にはいりお湯から首だけ出してそれを喰べることは却々うまいものであつた。」

氏にとつて風呂桶が母胎でもあり棺桶でもあることは右言及の文中にも論じてあるが、こゝではどうやら胎內象徵の方が判然と出てゐるやうだ。口唇の滿足は胎內生活再現の方法だとフェレンチは云つてゐるが、成程と思はせる。自家の子供が時々菓子を頰張つて風呂へ這入ることを好んだが、もう十歲を過ぎたらそんなことはやらなくなつた。室生氏の幼兒症も段々昂じて來るやうに思はれるが、人の事でも心配だ。氏は續いてかう書いてゐる。

「けふもお湯にはいつてゐる最中に、海を隔てた國の友人から電報が着いて『サケハイヨイヨウマク、ココロハツネニイタミガチ』と書かれてあつた。」云々

と。

こんなつまらないことを云つて來るのにわざ〳〵電報とは、文士なんてものは何と云ふ非常識なものかと呆れた。尤もこれは或は辟世かも知れぬが、何れにしても不健全な心理ぢや。我等この年になつて、こんな病的な愚痴話しに深刻がつた同情を寄せてゐるやうな悪趣味を恥づるやうになつた。

風呂と小便

風呂と云ふと、自家の男兒等も十歳未滿の頃には、時々風呂桶へ小便を仕込んだものらしい。それは兄の方がやつたらしいのだが、二つ違ひの弟の方も見てゐて兩親には默つてゐたところを見ると、その願望に於いて共犯であつたらしく思へる。風呂桶が母胎の象徴だとすると、この小便の象徴的意義は相當判然したものとなつて來る。

風呂に小便と云ふと、私はベルギー、ブルッセルの「マネケンピス」（小便小僧）を聯想する。有名なものだから皆さんも御存知だらうが、五、六歳の眞裸體の男兒の銅像が高い臺の上から下の水溜りに永遠の小便を垂れ流してゐる。その小便が噴水になつてゐるのである。これを見ては誰しも微苦笑を禁じ得ないらしい。これくらゐ人間の幼兒的露出慾と尿道性感とを滿足させてゐるものはないであらう。四月十七日の朝日新聞にはこの小便小僧が桃太郎の陣羽織を着て小便してゐる寫眞が掲げられてあつた。例の「神風」號がベルギー首都訪問に際しブルッセル市長が嘗て同新聞社から贈つた桃太郎陣羽織を小僧に着せて「親交の表徴とすることゝなつた」のださうである。成程小便小僧はベルギーの桃太郎に相違なからう。

小便小僧から私の自由聯想は、故速水御舟畫伯の立小便の話とこゝに掲げた漫畫とに走つて行つた。速水畫伯は田端驛裏の崖の上に住んでゐたが、庭に出て崖の上から放尿しその尿が下の地面に達するやうにいきんで遠くへ放つのが久しい以前からの努力であり念願であつたさうだが、遂にその目的を達せずして死んでしまつた。『アルピニストの優越感』と題しこゝに掲げた漫畫は昭和十一年七月十三日都新聞に載せられたもの（石田としを氏作）であつたが、これも同じくよくマネケンピス・コムプレクスを表現し得てゐる。畫中の主人公は「我雅が信濃川の水源ぢや」と豪語してゐる。尿道性格者は名譽慾が强いと云ふことになつてゐる



が、その名譽慾の本質は自分が祖先（水源）になることを以て尤なるものとするのであらう。「流れを汲む」と云ふ言葉があるが、これは結局小便（×液）を汲むことに外ならないのだらう。フロイドの如きも相當尿道性格者だらう。何となれば、彼は世界中に自分の小便（精神分析學）を氾濫させたから……。次の土屋君の文も幸にしてこれに關係がある。甚だ面白い話である。

風呂と尿道性感

土屋秋實

今書かうとすることは東京市内の某錢湯屋で見たことである。その錢湯屋の風呂桶は男湯と女湯とを隔てる壁に接して設けられてある。そして、その風呂桶の水面から上方二尺ぐらゐの場所に壁に接して、丁度街路や公園にある水飲み場の樣な恰好をした小噴水が作られてある。それは餘りに水飲み場の樣な恰好をしてゐるので單なる裝飾用の噴水とは見えない。だが、それは水飲み場としては餘りに不適當な場所に設けられてある。不思議に思つて番臺に坐つてゐる錢湯屋の主婦に尋ねてみると、彼女は「あれは裝飾ですよ。」と答へた。しかし、それは單なる裝飾以外に無意識的な實用性があると私は思つた。

意識心理的に見れば風呂は身體を清淨にする場所であるが、無意識心理的に考へればそれには深長な意味がある。

人間の一生と入浴とは深い關係がある。特に日本人においてはその關係は深い樣に思はれる。赤ん坊は生れるとすぐに産湯に入れられる。そこに人間の一生と入浴との最初の關係が始められる。意識心理的に見れば産湯は既に過ぎ去つた胎内生活の附着物を洗ひ去つて、現世への新らしい生活を準備するために用ひられるのであるが、無意識心理的に考へれば産湯は羊水とコムプレクスされることによつて赤ん坊にとつて新らしき母胎を意味する。從つて産湯に入ることは現世人として新らたに入胎することを意味する。それ故に風呂は産湯及び母胎とコムプレクスされてゐると思ふ。この樣に考へて來ると入浴も人間の性生活と深い無意識心理的な關係があるのに氣付く。何となれば兩者ともに母胎への復歸を意味するからである。だが人々は覺醒中には主として意識心理的な超自我及び自我の機能が活動してゐるから、エスにおけるこの樣な無意識心理は入浴の際に意識的に經驗されることは殆んどない。もしあるとすれば、それは頓悟と名づけられてもよいであらう。そして、頓悟が開けるのは無意識心理と意識心理とが急激に交錯すると同時に離れる電光石火の刹那ではないかと思ふ。一般にエスにおける無意識心理が現れるのは眞夜中の睡眠中に意識心理的な超自我及び自我の機能がその活動をゆるめた際である。

この樣に風呂と産湯と母胎とは一般にコムプレクスされてゐるから、入浴の際に意識的な超自我及び自我の機能がその活動をゆるめると卽ち簡單に言へば氣がゆるむと、好い氣持になつて小便をする者がある。中には大便をする樣なたちの惡い者もある。此等は主に子供に多い樣

である。そして、これは尿道性感或は肛門性感への定着と關係があると思はれる。前記の錢湯屋に設けられてある噴水は尿道性感的無意識心理を昇華する役割を果してゐるのではないかと思ふ。卽ち噴水が無意識心理的に放尿の代償になつてゐるのではないかと思ふ。

更に入浴に關しては、それと宗教的儀式例へば灌頂とか灌佛或は禊祓などゝの無意識心理的關係、正月元日の朝湯の快感、溫泉の無意識心理（特に溫泉へ新婚旅行するのは相當意味深長である）等々興味深い研究材料が少くない。

（十二、三、廿二）

新職業リスニング

延島英一

五月十三日の週刊ロンドンタイムスに「リスニング。新しい職業、同情的な耳」といふ記事が載つてゐるが、其内容は次の如く精神分析から見て中々面白いものである。

×

今米國ロサンジエルスに新しい職業が生れてゐるが、それは一時間三弗、半時間二弗の料金で、他人の苦情や述懷を聞いてやる仕事なのである。だが此職業の皮切りされたはニユーヨークであるといふ。

ニユーヨークに一人の若い婦人が職業を探しにやつて來た。兄が醫者なので種々相談した擧句、自分の思ひやりの深い耳と魂を金に換へることを考へついたのである。大體彼女は子供の時から思ひやり深く人の泣言を聞いてやれる天分があつたのである。そこで壁爐附のアパートの一室を借り、其前へ腰掛工合のいゝ椅子を二脚並べ、新聞へ「貴方の苦勞と惱みを思ひやり深く聞いて上げます」といふ廣告を出したのである。

すると間もなく客がやつて來た。其客は米屋で、出勤の途中立寄つたのである。彼は二弗分聞いて貰へば澤山だと言つてゐたが、結局マル一時間話し込んでしまつた。彼女のお客は一部分中年の人だが、中でも伜に嫁を貰つたり、娘に婿を取つたりして一つの家に住んでゐる姑が斷然多いそうである。

夫婦喧嘩した妻君もやつて來る。彼女達は大抵二弗分御亭主をさん〲にコキ下ろした上、氣持がサツパリしたといつて仲直りに家へ歸つて行く。男の客は、歸る時大抵話の腰を折られなくて大變有難かつたといふといふ。

此新職業の話は忽ちロサンゼルスに傳り、今ではハリイウツドとロサンゼルスが、世界に於ける職業的リスナアの最大の中心地となつた。そして此リスナアは、質問六つまで料金一弗で「有益な精神的助言」を與へる無數の所謂「心理學者」の商賣のとても邪魔になるといふ。

ロサンジエルスのリスナアは、皆正直な中年の者である。リスナアの職業には一つの規約があるが、それは助言を與へぬことである。だが此職業が非常に氣づかれのする仕事であることは疑ひない。又成功する爲には誠意と同情を常に胸にたゝへてゐなければならない。

×

以上の記事の樣に、此リスニングとい

ふ職業の本質は、一種のカタルシス（精神的洗ひ流し）を生ぜしめるにあるが、かゝるものが獨立して存在することは、社會生活に少からず便利であることはいふまでもない。職業的リスナアがあるとすれば、見境なく誰にでも泣言や、蔭口や、讒謗や、中傷を撒き散す必要が大いに減ずるから、自他共にエネルギーの大きな節約となるばかりか、思ひも寄らぬ迷惑と紛糾の生ずる機會が激減することは疑ひを容れない。

今日の社會生活に今少しく科學を適用する精神が盛んならば、此リスナアなどは公費を以て適當な敎育と訓練を與へ、各地に散在せしめるのが當然の處置である。さうすれば種々な無益な人間的關係の摩擦は、大いに緩和されるのである。本誌に嘗てウヰーンの分析者ステーケル博士が、同市に嫉妬治療所を設けたことが報ぜられたが、それは科學的に組織されたリスニングである樣に思はれる。

要するに此職業としてのリスナーの發生といふことは、科學應用の發達及社會生活の將來に關して、大きな示唆を我々に與へることは否めないのである。

短刀を懷にする女

不動坂住人

伊原青々園氏が先頃、都新聞の夕刊に連載してゐた『團菊以後』の内に、中村小時と云ふ女優の話が出てゐた。面白い女である。彼女は京都の西陣の呉服屋の娘であつたが、家が沒落したゝめに十八歳の時に大阪の北の新地で藝者になり、陸奥宗光などにヒイキにされてゐた。後、明治四十五年に上京して伊原氏の世話で宮戸座へ出ることになつた。

「噺は昔に戻るが、小時がまだ若かつた時に、上方から東京へ遣つて來て、女のくせに新橋や芳町でしきりに豪遊して、當時花柳界では問題の人物であつた、凄いやうな美人で、それが男のやうなキリリとした拵へをして、何時も懷ろには短劍をもつて居るとか、そうしてこの婦人に呼ばれた藝者は誰れでもきつと熱烈な同性愛を捧げるやうになるとか、その藝者の朋輩が何ういふ譯でそうなるかを尋れても、當人は必ず口をつぐんで秘密を語らない、もし秘密を語ると例の短劍で殺してしまふと言はれて居るからであるとか、現に芳町で米八といひ、後に女優となつた千歳米坡や、新橋の名妓で羽左衛門の妻となり、後に桂侯爵の第二夫人となつたお鯉が、小時に夢中になつたとか、そんな噂がしきりにあつて、新聞でも書き立てた。」

と伊原氏は書いてゐられる。いつぞや本誌の『同性愛と異性愛』號で見た宮田齊氏の紹介せられた英國の女流小說家で同性愛者のラドクリフ・ホールの事を聯想せしめる。新聞に出た寫眞を見ても如何にも男性的な女だが右の行動は男性コムプレクスを露出させてゐて、殊に懷に短刀を忍ばせてゐるとは、氣に入つた。ペニス象徵としての意味があまりに判然し過ぎてゐる位だ。女だてらに藝者買ひなどするのは青踏社一派の連中を以て日本では嚆矢とするのかと思つたら、やはり先例があるのだ。

青光に乘る三尊

大槻氏著『精神分析讀本』に出てゐる「靑い花と靑い鳥と靑の光」は色彩象徴の研究として面白かつたが、本年三月三日の朝日新聞『郷土ニュース』欄に出てゐた。新潟からの通信「燃える三尊」はその參考資料になる。

「北蒲原郡乙村乙寶寺境内大日堂の炎上に駈つけたある寫眞師が後日の記念にと前後三回に亘つて『燃える三尊』をフイルムに收めるためマグネシユームを焚いたところ、これを露知らぬ部落民は三尊の靈が『靑光に乘つて南天竺に向はれた』と大騷ぎ……一寸笑へない信仰です。」

やはり靑光は日本でも神聖だと無意識觀念せられてゐるものと見える。

母を忘れる

倉橋久雄

形式　やや喜劇風に
人物　ある兄妹とある男
時　現　代
所　人間の居る所なら何處でも、と云ひたいのだが、假りにあるアパートの一室としておいてもよい。そこはあまりに華美でなく、と云つて殺風景でもなく、適度の甘さと新しさの漂ふ青年らしい居間であると御想像を願つておく。日曜の午前十時頃、初夏の日射しは明るくて青葉にたはむれる微風にも季節のすがすがしさが匂つてゐる。

アパートの住民たちは、この好日和にすつかり出はらつたらしい。兄は本に疲れた眼を戸外に遊ばせ、編物を手にした妹は傍にゐて時折不安さうに、その兄を見守つてゐる。すこし前、彼等を訪れて來た男がある。假りにある男としておく。その男はいまおもむろに兄に向つて口を切った。

ある男　えらい事をやつたものぢやアないか。そん時、君はほんとに死ぬ氣だつたのかい？

妹　驚いたわ。會社へ電話が來て、今あなたの兄さんがデパートの屋上から飛び下りました、つて云ふんですもの……

ある男　そいつ、よほどあがつてたんだなア。あんな所から飛びおりてたら、今頃は多分この部屋中線香臭くなつてる時分だよ。

妹　親切な人が居るものね。あたしあん時、もう大丈夫ですからつて、皆さんの御厚意を堅く御斷りして兄と二人で歸りかけましたの。そしたら、どうしても貴女一人やるのは心配だからつてきかないんですもの。とうとうその方に家まで御世話を御願しましたの。その方つたら圓タクの代まで出して下さるの。あとでお拂ひしようとしたら、仲々とらないんです

もの。困つたわ。

ある男　ホウ、人間美しく生れとくもんですなア。

妹　いやだわ。それ女の人よ。いま生きてゐれば、恰度あたし達の母さん位のとしかつこうの人だつたわ。あたし、別にその事云ひはしなかつたけど、心のうちでは、母さんに世話して貰つてるつもりでゐたの。

ある男　その人、息子さんでもなくした事があるんだね。

妹　あたしもさう思つたの。それなのに、兄さんたら、とつても不愛想なのよ、ろくすつぽものも言はなかつたわ。

兄　あたり前ぢやないか。いきなり僕に抱きついて、倒れたところをどや〳〵と大勢で手どり足どり事務所へ連れ込むんだもの。

妹　そりや、兄さんが手すりの上なんかに登るんですもの。誰だつて飛び下りだと思ふわ。

兄　だからつて何も手どり足どりしなくつたつていゝぢやないか。

妹　あばれたんださうよ。

兄　あばれると思つたんだろ。僕は暴れた記憶なんてないよ。

妹　なかば夢中だつたのね。どうしてあんな所へ登つたの？

兄　僕は高い所が怖いんだ。墜ちさうになるんだ。そのくせ登りたくなるし、登つても見るんだ。登るとそこから下を見ずにはゐられないんだ。一たん覗いたが最後、アスファルトの魅力は若い後家さんのやうに僕をひきつけるんだ。同時に、その上に蛙のやうにへたばつてる僕自身を幻想して慄然とするんだ。そして想ふんだ。僕がこの弱さを征服しない限り、僕は人生の敗残者たるの運命をまぬかれ得ないだらうと。で、僕は昨日、僕が勝つか、アスファルトが勝つか、二つに一つ、命をかけての勝負を争つて見ようと思ひついたわけなんだ。それなのに、あそこへ立つやいなやたちまち救はれちやつたんだ。馬鹿々々しいつたらありやしない。

妹　馬鹿々々しいのはこつちのことよ。私なんか、つまんない兄さんの冗談のために、一遍に十も老けちやつたわ。

ある男　すると、見つけたのはその人なんだね。

兄　きつとまへから僕に眼をつけてゐたんだと思ふ。僕は同じとこを何度も行きつ戻りつしてゐたらしかつたから……。だけど、よけいな御節介をするもんぢやアないか、あの婆さんも。何にも自分の息子でも

妹　ありやしないくせに……。

兄　そんなことを云つて、兄さんはあたしをおいて死ぬつもりだつたの。ひどいわ。

妹　僕ア、自分で自分の神經質をもてあましてゐるんだ。

兄　だからつて、妹をおいてきぼりにしていゝつて理由にはならないわ。あたし達母さんに死なれて二人つきりの兄妹ですもの。

ある男　そりや、もてあますもいゝが……どうせ舞臺がくるつと廻りや、神經なんて、そこいらの柱にでもかけといて、ぢやア、神經さん、留守をしつかり賴みますよつて、勇んで家を飛び出さなければならないんだから……。

妹　まるで鬼ケ島征伐ね。だけど、神經つてそんな簡單なもんかしら……。

ある男　（兄に）君も度胸だめしはそんな時にして、つまらぬ考へはよしたがいゝよ。

妹　兄さんは小さい時から可愛げのない子供だつたんですつてね。よくお父さんが云つてたわ。

ある男　よくないなア。親としてさういふ無責任な放言をするとは……。

妹　きつとお父さん自身が子供だつたのよ。心理的に……。

ある男　成程、それなら一層わかる筈なんだがね。子供は子供同志つて云ふ事もあるから……。

妹　いやだわ。それぢやまるつきりの子供ぢやないの。

ある男　ある點は子供だつたのよ。まア子供と大人の混血兒だと思へばいゝわ。

兄　混血兒はよかつたなア。

兄　僕あるところで聞いたんだが、親が子供を可愛がるのは、それが自分のナルチスムスの延長だからなんだつてね。

妹　何アに、ナルチスムスつて？

兄　それはギリシヤの神話から出てるんだよ。美少年ナルチスムスが彼を慕ふ美少女エヒヨーの聲に耳を借さず、たゞひたすら、水鏡に映る自分の姿に見いつてゐたんだが、水中の美少年はそれに近寄らうとしても近付き難く、それを捕へようとしても捕へ得ないので、遂にこがれて溺れ死んでしまふ。そのあとから咲き出たのが水仙の花、つまりナルチスムスだつたつて云ふわけさ。

妹　いゝわね。ギリシヤ神話つて……。

兄　この神話から自己戀慕症または獨尊觀念をナルチスムスと云ふ意にとつて用ひたのが、君も知つてるフロイドなんだよ。

妹　だけどナルチスムスつて、一寸云ひにくいわね。

兄　ほれ、俗に云ふ「自惚れとカサ氣のないものはない」あれさ。

ある男　すると子供を可愛がるのは、水鏡に映る子供の姿をした自分を愛でるわけなんだね。

兄　だから言ふぢやないか。親に似ない子を鬼つ子だつて……。

妹　その鬼つ子が兄さんだつたのね。

兄　さうさ、だけど子供の立場からすれば、これは親の得手勝手と云ふものだ。

ある男　僕がある工事場での見聞だが、……五つか六つ位の坊やが、ちやんの仕事を見てゐたんだよ。その傍に母親が、つまりその職人の細君が並んで立つてゐたんた。すると仕事の合間に職人がチンと手ばなをかんだ。見てゐた坊やもチンとそれを眞似た。勿論そんな小さいのがやつたんだから、うまくゆくはづがない。ほつぺたかなにかをよごしたらしい。それがまた可愛かつたんだらう。それをふいてやりながら、坊やの母さんが云ふことにや「この子つたら、お前さんに似て、ほんとに面白い子だよ」この子にしてこの親ありで、手前(てめえ)の鼻のひと言耳にして、この親父ニーと笑つたものだ。

妹　あたしもあるわ。サラリーマンの家庭よ。やつと一日の重荷をおろして、今夜も細君と坊やと三人、樂しい我家の晩餐の卓を圍んだ、とあるしがない月給取の風情を思ひたまへ。席上坊やの云はく「父ちやん。今日は課長におこられなかつたの」父ちやん答へて「うん、父ちやんはネ、今日とても要領よくさぼつたんだよ」そこで坊やが、「ふーん、だけど、母ちやん、僕だつて父ちやん位になれば、父ちやんよりももつと〳〵、うまく課長に叱られないやうに、さぼつて見せるけどなア」これを聞いて親父どのは最愛のワイフをかへり見てニヤッと笑つて、誇らかに將來課長をごまかすであらう伜の勇姿を幻に描いて見るのだ、と。

兄　よし、僕も一つ。今日は第三號へ行く日なんぢやが、止むを得ん災難で、坊と奥を連れて、奥多摩へハイキングせにやならん。さる重役さま。心の中でこぼし〳〵玄關へと立つたものだ。いざ出陣といふ際に、坊やの云ひ草が聞き物だ。「母ちやん、たまに行くんだから、今日は父ちやん虐めないでね。御飯のあとで僕が寢ころぶと坊や牛になりますよつて、母ちやん云ふけど、僕は母ちやんみたいに起きてゝ角をはやすことなんてないんだから……」そ

こで相手の牛なり山羊なりは、相見合つて微苦笑したが、お互ひに、さても嬉しき我子かなといふ面持ちであつたさうだ。

ある男　(兄に) 君にはかう云ふ挿話はなかつたのかい?

兄　僕には母親といふ安全瓣がなかつたから……。

妹　つまり、かうしたものを芽ぐむ温床地帶が不足してたのね。

兄　僕は出來るだけ、親父を好意的に見ようとした。けれど、親父にはいくら引いても引いても引きゝれないものがあつたんだ。

妹　つまりかうなんでしよ。合理的な理由を父さんのあれなり、これなり、それなりの行爲に見出して、見付かつたものをそれ／″＼、どん／＼引いてつたのね。

ある男　すつかり引いて了つたのに、なほ父子の情では説明しきれないものが殘つてたと云ふわけだね。それが君をデパートの屋上へたゝしめた一つの理由なのかね?

妹　その外に、兄さんがあんな事をしたのは、關谷さんの影響もあるとあたし思ふわ。

兄　關谷か? あいつもまた鬪ひ疲れて倒れたんだ。

ある男　何だね。その關谷つて云ふのは?

妹　親友ですの。名人は危險な所に遊ぶんだなんて、よく云つてましたわ。僕は省線がまるで僕の足下へ滑り込んでゞも來るやうに、ホームに突入してくるとき、この機會に飛び込まうつて誘惑を切に感じる。それをぢつと自制してゐるとき一番人生の魅惑的な面に觸れるんだ、なんて申しました。……そのくせ、とう／＼それに負けて飛び込み自殺をして了つたんですわ。

ある男　すると、いはゞその男が負けたので、君もます／＼不安を感じて來たといふんだね。

兄　關谷はよくがんばりました。僕もあと二三回したらきつと強くなれると思ふんです。

妹　あら、兄さん。二三回だなんて、まだするつもり?

ある男　君はいつだつたか母さんを忘れたと云つてひどく氣にした事があつたね。僕はそれとこれと何か關係があるやうな氣がするんだ。

妹　あら、違ふわ。母さんを忘れたんぢやないわ。だけど關係つてどう關係があるの?

ある男　それについて僕は二三、君に聞きたい事があるんだ。答へて呉れるかい?

妹　答へるでしよ。ねえ、兄さん、答へるわね。あたしだつて、こんな事もう二三度もやられちや堪んない

わ。そして裸になるのよ。心の隅々までぶちまけて裸になるのね。それが健康への最善の道だわ。

兄　しかし僕は自信があるんだ。僕は闞谷が死んでから、いつでも省線のホームの最前列に立つてためしてゐるんだが、もう大丈夫、びくともしない自信があるんだ。

妹　そんなこと云つたつて、闞谷さん見たいにフラ〳〵と飛び込んぢやつたらどうするの。あたしいやだわ。いやアよ。自信なんて結局地震なんだわ。いつぐら〳〵と來るか一寸先は闇よ。そんな時になつて、はつと思つたつてもう遲いわ。ねえ、忘れちやいやアよ。自信は地震だつてこと……。

ある男　その母さんを忘れたつて話をききたいなア。

妹　それよか、兄さん。鶴ちやんの話をなさいよ。鶴ちやんつて兄さんの心の太陽なの。でせう、兄さん？

兄　馬鹿！　兄貴を冷かすやつがあるかい。だけど、あの人、僕にとつては高嶺の花だつた。何遍近よろうと思つたか知れなかつたが、とうとう近づけなかつた。

妹　をかしいつたらなかつたわ。あの時、あたしが氣をきかして二人だけにしてやつたの。さうね、それから四五時間たつたかしら。どうなつたらうと行つて見たら、二人とも元の位置のままでゐるの。あとで聞いたら御天氣の話だけしたんですつて……。

ある男　で、その後は？

兄　しばらくたつて、闞谷もやはりあの人を想つてることに僕は氣付いた。外の男にやりたくなかつた。かねてから鶴ちやんも彼のことを憎からず想つてゐることと察してゐたものだから、彼等の間をとりもつてやつた。

妹　馬鹿ね。何故あん時、負けるまで爭はなかつたの？　何故始めつから投げちやつたの？　どうせ投げるなら、何故あの人の足下を選ばなかつたの？

兄　僕は闞谷が好きだつた。ふたりは兄弟のやうだつた。だから闞谷のために、僕はあの人に指一本さへ觸れなかつた。

ある男　それはどういふ事になるのかね。

妹　指一本も觸れなかつたなんて噓よ。きつと手位握つてゐた筈よ。結局自信がなかつたのね。もしあの人が兄さんの首に手を卷きつけて、あの香はしい薔薇の唇で兄さんにキッスを求めたとしたら、それでも兄さんは闞谷さんに讓る勇氣がおありなさる？

兄　馬鹿な奴さ。何アにその男の事だよ。とうとうあれ程の美女を逃して了つた。僕は口惜しかつた。僕が

妹　せめてあいつ位の面なり姿なりを持つてゐたら、みすみす人手には渡さなかつたものを……
　また立候補すれば、よかつたのに……。もつともつまんない顏を立てたがつた罰なんだから、緣がなかつたと思つてあきらめるのね。

兄　關谷と僕との仲もそれからはあの人の分だけ隔りが出來ちやつた。

妹　鶴ちやんその後、あたしとデパートに行つたとき、下を兄さんが通るのをぢつと窓から見てゐたわ。

兄　そんな事があつたんなら、何故その時云はないんだ。

妹　すべてが過ぎ去つたあとなんですもの。云ふだけ未練がますといふもんだわ。その時あたしが、誰れか知つてる人でも通るのつて聞いたら、あの人つたら隨分人が出てるのねつて云つたつきりだつたわ。

ある男　何んだか、しんみりしちやつたね。どうだい母さんの話は？

妹　さうね、もういゝよ。なさいよ。いゝ潮時だわ。雨がしのつくやうに降つてゐる。その中で彼はもう何度振りむいた事だらう。ひたひたとあとをつけてくるあの不氣味な足音におびやかされて……それからだわね？

兄　違ふよ。ジリジリと太陽が照りつけてゐる。犬が長い舌を出して往來にのびてゐた。

妹　あら、つまんないの。

兄　僕は留置場から刑事部屋へ引き出された。型通りの訊問だ。父の名は濟んだ。さて母の名は？

妹　僕は云ひ淀んだ。答へられなかつた。思ひ浮ばなかつた。……でしよ。

兄　相手はせせら笑つた。何んだ！　生みの親の名を忘れる樣な奴が階級戰の闘士でござるとは　。

妹　思へばその嘲笑も當然たつた。だが僕は云つてやつた。

兄　他人にとつてはある場合、僕の母の名は必要だらう。たが、僕にとつて、その親の子である僕にとつて、それは不要だ。なぜなら、母はいつも僕と共にあるんだから……。

妹　母さんと呼べば直ぐにも答へてくれるほどの近みにあるのだから……。

兄　だから強ひて覺えてゐずともいゝんだ。

妹　勿論それでも相手は笑ひをやめなかつた。……でしよ。當然ね、それ。だけど、一寸センチな理屈付けたつたわ。

ある男　すると、それは一時的な忘却なんだね。

妹　自分で分析なさいよ。きつとその時の心理が合點いくわ。だけど兄さんも、いゝかげんに母さんを忘れることだわ。それなぞも忘れるほど兄さんが母さんを想つてゐたことになるんだわ。結局！

ある男　それに君も、ちよいと忘れた位のことをさう氣にするのはいかんなア。

妹　母さんはあたしの生れたとし、兄さんが三つの時死んだから、それから兄さんの頭には、母さんといふはれものが出來て事毎にうづくんだわ。

ある男　どうだい。兩の瞼をとぢれば、母の面影が彷彿と出て來やしないか。

兄　しないね。あれほど僕は手ばなしぢやないよ。

妹　とにかく早く母さんをお忘れなさいよ。兄さんの母さんはほんとの母さんでなくて、たゞ感傷の對象に過ぎないのよ。まごまごすると私の方がいゝ人こさへて、兄さんを忘れちやつてやるわ。御小遣も出さない兄さんなんて覺えといてもつまんないもの。

兄　こいつ、近代娘みたいなこと云ふな！

ある男　（外を指して）誰れか、遠くで合圖してますよ。

妹　（見て）あら！ほんとに來たんだわ。兄さん、兄さんの太陽の御入來だわ。

（折から、ひるのサイレン、激しく一せいに鳴り響く……）

ある男　あゝいつの間にか、外へ出てる。あの早いこと！　まるで彈丸のやうだ！　あの人もむかふで手を展げて待つてゐる！

妹　（大聲で）兄さん！　力一杯かけるのよ。轉んでも轉んでも、起きてかけるのよ。

ある男　あ、これで新しいマリア氏の御誕生だ！　わしは年のはせいか、腹が減つたやうだ。

妹　（ラヂオのスヰッチを入れる。とやがて、かすかに結婚行進曲が流れ出してくる。）あたしも立派な軍師だわ。昨日の飛び下りをネタに早速ひと狂言書いて、鶴ちやんと兄さんとを結んでやつた。皆さんどう。成功らしいわね。

ある男　好むと好まざるとにかゝはらず、兄さんも長命するでせう。なにしろ相手が鶴さんだから……。

（結婚マーチ、ますます高く、永遠に――）

――終――

故大佐の令嬢たち（マンスフィールド作）

岩倉具榮譯

一

その後の一週間ほど忙しい思ひをしたことは彼等の生涯中でも珍らしいことであつた。彼等が寢床に入つた時でさへも横になり休んだのは彼等の身體だけだつた。彼等の心は何時までも、あれやこれやと考へ拔き、繰返し語り、それが何處……であつたかを不思議に思つたり、決定したり、思ひ出さうと試みたりした。

コンスタンチアは彫像の樣に横たはり、手を兩脇におき、兩脚は互ひにキツチリ組合せ、毛布をあごまでかけてゐた。彼女は天井を見つめた。

「お父樣のシルクハットを門番にやつたら、お父樣に叱られるかしら、どう思つて？」

「門番にですつて？」とジョセフィンがガミ〳〵と云つた。「何だつてまた門番なんかに？何だつてそんなをかしなことを考へつきなさつたの！」

「何故つて」コンスタンチアはゆつくり云つた。「あの人は度々お葬式に行かなければならないからよ。そして私は——墓地であの人が山高帽しかもつてゐないのに氣がついたのよ。」彼女は言葉を切つた。「その時私考へたの、あの人にシルクハットをあげたらどんなに喜ぶだらうとね。私達は、あの人にも贈物をしなければならないわ。あの人はいつもお父樣に大變よくしたのよ。」

「だつて」ジョセフィンは、枕の上で身をもがき暗闇の中でコスタンチアを見つめて叫んだ、「お父樣あの頭よ！」そして急に、ほんの一瞬間、彼女はクスクス笑ひさうになつた。勿論、彼女は一寸でも忍び笑ひをしさうに感じたのではない。それがくせだつたに違ひない。數年前、彼女が夜中に目覺めて話してゐた時、彼等の寢床が一寸持ち上つたことがあつた。そして今、門番の頭

が、目には見えないんだが、お父さんの帽子の下で、蠟燭の樣に、ヒョイと消えた。……忍び笑ひは段々高くなつて行つて。彼女は兩手を握りしめた。彼女は一生懸命笑ひを止めようとした。彼女は暗闇に向つてきつと眉をそば立て「覺えていらつしやい」と恐しく嚴格に云ひ放つた。

「明日になつてから決めてもいゝわね。」彼女は云つた。

コンスタンチアは何にも氣がつかなかつた、彼女は溜息をついた。

「私達の化粧着もやはり染めなくちやならないわね、どう？」

「黑にする？」ジョセフィンは殆ど金切聲のやうな調子で云つた。

「さうね、でなかつたらどんな色？」とコンスタンチアは云つた。「私は考へてゐたのよ——外で黑を着てゐるのは、何だか、本當に眞面目らしくないし、それから私達が盛裝してる時や家にゐる時には——」

「でも、誰も見やしないわ。」とジョセフィンは云つた。彼女は夜着を蹴つたので兩脚が露はに出た。で、彼女は枕に添つて上の方へずり上がり、もう一度その枕を殆ど下敷にするやうになつた。

「ケイトが見てよ。」とコンスタンチアは云つた。「そして郵便屋さんだつても見るかも知れないことよ。」

ジョセフィンは自分の化粧着に均合ふ赤黑いスリッパーのこと、コンスタンチアがいつもはいてゐたお氣に入りの、どつちつかずの綠色のスリッパーのことゝを考へた。黑だつて！ 二つの黑い化粧着と二組の黑い毛のスリッパーが、黑猫の樣に浴室に這つて行く。

「それが絕對に必要だとは思はないわ。」と彼女は云つた。

しばらく沈默が續いて、やがてコンスタンチアは云つた。「私達はセイロン便に間に合ふやうに明日注意書をつけて書類を郵送しなければならないのよ。——今迄私達はどの位手紙を受取つたかしら？」

「廿三通よ。」

ジョセフィンはそれ等の手紙の凡てに返事を書いた。そして「私達はなつかしいお父さんを亡くして大變悲しう御座います」といふ言葉を書く每に、廿三遍も彼女は慟哭してハンケチを使はねばならなかつた。そしてその中の何遍かの上では、淡靑色の涙を吸取紙の端で吸取らねばならない程であつた。不思議な事だ！ 彼女は吸取紙を載せる事は出來なかつたらうに——併し廿三回も載せたのだ。とは云へ今でも、彼女は自分に向つて悲しさう

に「私達はなつかしいお父様を亡くして大變悲しう御座います」と幾度も云ひながら、泣かうと思へば泣けたのであつた。

「切手は澤山買つてあるの？」とコンスタンチアの方から云つた。

「あら、私知らないわ。」ジョセフィンはすねて云つた。「今そんなことを私に訊くなんて、一體どうしたの」

「今一寸氣にかゝつたものだから」とコンスタンチアはおだやかに云つた。

再び沈默が續いた。と、ガサガサ、チョロチョロと何か歩く音、ポンととびはねる音が聞えて來た。

「鼠よ」コンスタンチアは云つた。

「パン屑もないのに鼠が來る筈ないわ」ジョセフィンが云つた。

「でも鼠はパン屑のないこと知りはしないわ」コンスタンチアは云つた。

不憫の思ひが痙攣のやうに彼女の心を締めつけた。可哀さうに！鏡臺の上にほんの少しのビスケットでも殘しておいてやればよかつた。鼠が何にもありつけないのを思ふとぞつとした。鼠はどうするだらうか。

「彼等は一體どうして生きる工夫をするのか考へられないわ」と彼女はゆつくり云つた。

「誰が」ジョセフィンはたづねた。

するとコンスタンチアは我にもあらず聲高に云つた、

「鼠達よ。」

ジョセフィンは怒つた。「おゝ、何てくだらないことなの、コンスタンちやん！」と彼女は云つた。「鼠達に何の關係があるの？ あなた眠つてゐるの？」

「眠つてるとは思はないわ。」コンスタンチアは云つた。彼女は眠つてゐるかどうか確かめようとして眼を閉ぢた。彼女は眠つてゐた。

ジョセフィンは脊骨を弓の樣に、膝を引き寄せ、こぶしが耳の下に來る樣に腕を組み、そして枕にきつちりと頬を押しつけた。

二

事件をこんがらしたもう一つのことは、その週に彼等と一緒に、乳母のアンドルウズが泊つてゐたことであつた。それは彼等自身の間違ひであつたから。彼女等が看病人にさう頼んだのであつた。それはジョセフィンの考へついたことであつた。その朝——さう、昨日の朝、醫者が行つて了つた時、ジョセフィンはコンスタンチアに云つたのだつた。「看病人のアンドルウズに一週間お客になつて來て貰つたらどう？ 面白くないこと？」

「素敵！」とコンスタンチヤは云つた。

「私は思つたの」とジョセフィンは直ぐに續けた。「私はアンドルウズに今日午後給料を渡したあとで、かう云へばよかつたんだわ。『アンドルウズ乳母や、お前が私達のためにすつかり用事をすませてから後で、一週間吾々のお客になつてくれたら、私も妹も大變嬉しく思ふのよ。』つて私はもし何なら私たちのお客様になるんだつてことを附け加へるべきだつたわ――」

「だつて、あの婆アやは給料の支拂ひなんか期待する筈ないわ！」とコンスタンチアは大きな聲で云つた。

「そんなこと分らなくつてよ」とジョセフィンは分別くさく云つた。

看病人のアンドルウズは、勿論、その言葉にとびついて來た。けれどもそれは面倒なことであつた。お客様扱ひにするとなればきまつた時間にチャンと食事の席に着かねばならないわけである。けれども若しも彼等姉妹だけだつたらどこに自分等がゐようとも、ケイトにお皿を持つて來る樣に賴むことも出來たのだ。緊張が過ぎ去つた今となつては、食事の時間は試練の樣なものであつた。

看病人のアンドルウズは、只もうバタの事を心配してゐた。實はバタについては少くとも、アンドルウズは二人の親切を利用したんだと、彼女等は感じないわけに行かなかつた。そして皿の上にあるものを食べて了はうとしてほんのもう少しのパンをねだるといふ氣狂ひじみた癖を彼女は持つてゐた、それから、最後の一口と云ふところで放心して――勿論それは放心ではなかつたのだが――もう一度下さいと云ふのであつた。そしてまるで卓子布の網目を抜けて這ひ出す小さな妙な蟲を見たかの樣に、その小さい、數珠の樣な眼を深く伏せるのであつた。併しコンスタンチアの長い、蒼白い顏はのんびりとして澄まし、それから彼女は遠くを――遙かを――見つめた。はるか彼方の砂漠を、もつれな羊毛の糸のやうに駱駝の列が進んで行くのを眺めるかのやうに……。

「私がテュークスの奥様のところに居りました時」と乳母のアンドルウズは云つた。「あの奥様はふんときれいな小さいバタ容器を持つてゐらつしやいましただ。それはガラスのお皿のはしつこに銀のキューピッドがひよいとまつてゐて、ちつちやなフォークを持つてましたよ。そしてバタがほしい時にはその足を押しさへすればキューピッドがかゞんで一切れつき出すんでございます。それは本當に面白うございました。」

ジョセフィンはとてもそれが我慢出來なかつた。併し彼

女はやつとの思ひで「それは隨分素敵ねえ」と云ふのであつた。

「でもなぜに」と看病人アンドルウズは訊いた、眼鏡を通して眼をギヨロ〳〵させながら。「誰も、本當に、欲しいと思ふ以上にバタを取りはしませんのに、ねえ？」

「ベルを鳴らしておくれ。コンスタンちやん」とジヨセフィンは大きな聲で云つた。彼女は相手になつてゐられる自信がなかつた。

すると上機嫌なお姫樣のやうに取澄ました若いケイトが這つて來て、年寄りのおしやべり姿が今度何を望んでゐるかを見るのであつた。ケートは彼等の何やかやと嘲つてゐる皿をひつたくつて白い、恐ろしいジエリーのクリームをパタツとおいた。

「ジヤムを持つて來てね、ケイト」とジヨセフィンは親しみを以て云つた。

ケイトはひざまついて食器棚をガラリと開け、ジヤム入れの蓋をとり、空なのを見て、それをテーブルの上において忍び足に歩き去つた。

「あら、どうしたんでせう」と看病人のアンドルウズが一瞬後に云つた、「ちつともありませんよ。」

「おゝ、何てうるさいの！」とジヨセフィンは云つた。彼女は唇を嚙んだ。「どうしたらいゝの？」

「コンスタンチアはどうしようか決しかねてゐる樣な風であつた。「またケイトを呼び立てるわけに行かないわ」と彼女は靜かに云つた。

看病人アンドルウズは姉妹の二人を微笑で眺め乍ら、待つてゐた。彼女の眼は眼鏡の彼方にある凡ゆるものを迂散くささうにきよろきよろと見廻した。コンスタンチアは絶望して例の駱駝の方を眺め遣つた。ジヨセフィンは重苦しく顏をしかめ——氣持がぐつと固まつた。若しこの愚かな女のためでなかつたらジヨセフィンとコンスタンチアとは、勿論、白いブラマンヂユ（シエリー風の菓子）を戸外で食べたであらう。急に或る考へが浮んだ。

「さうだわ」とジヨセフィンは云つた。マルマレード（マルメロの果實にて作りたるジヤム風の菓子）があるわ。食器棚にマルマレードがあるわ、取つてよ、コンスタンちやん。」

「結構ですわ」と看病人のアンドルウズはげら〳〵笑ひながら云つた。彼女の笑ひ聲は、藥壜にカチ〳〵と當るさじの樣な音であつた。——「でもあまりひどいマルマレードでなければよう御座んすがね。」

三、

併し何れにせよ、今ではもう長くはないことだ。やが

ではアンドルウズも永久に行つてしまふのだ。それにアンドルウズがお父さんに甚だ親切であつたと云ふ事實は掩ふべくもなかつた。臨終に於いて彼女は晝夜を分たず父さんの介抱をした。實はコンスタンチアもジョセフィンも二人ながら、最後にはアンドルウズがあまり父の側を離れなさすぎることを秘かに感じたほどであつた。何故ならば、二人が父に最後のお別れを訣げるために室へ這入つて行つた時、アンドルウズは終始枕頭に侍り、父の手首を握つて自分の腕時計を見てゐるやうな風を裝つてゐた。そんな必要はある筈がない。それにやり方があんまり露骨すぎる。父は二人に秘かに何事かを、何事かを云ひ遺しておきたかつたと思れるのに……。云つておきたいことなどはなかつたのだ。なに、それどころではない。父は眞赤になり、赤黑い顏をして、二人が這入て行つた時には振向いても見なかつた。やがて二人がどうしたらよいのだらうかと手持無沙汰に突立つてゐると、父は急にその一眼を開いた。父がもし兩眼を開いてくれさへしたら、そこにどんなに變化があつたことであらう。父に就いての記憶にどんなに變化があつたことであらう。それに就いて人に語るに如何に容易であつたことであらう。併しさうはしなくて、たゞ一眼だけを開いたのだ。その眼は二人を一瞬ギロリと睨み、やがて……ふさいでしまつた。（未完）

岩倉譯『理想の家族』正誤表

頁	行	誤	正
目次一	六	ルフト鑛泉場	空氣浴場
本文三	一	同	同
一七	三	あつだ。	あつた。
五一	八	二入	二人
八三	一一	早く早く急いで	停めて
一六六	二	ないことを	ないことは
一九九	一四	開かんと	聞かんと
二一〇	九	そんなとは	そんな事は
二一八	六	若しい	苦しい
同	六	兄	弟
同	一一	同	同
二一九	三	同	同
同	四	同	同
二二二	五	同	同
二三八	一	ルフト鑛泉場	空氣浴場

講座

心理の相反並存性に就いて

不老泉院主

今後時々、時事問題を素材として臨床的講義を試みることになり、その第一回目の責任が私に課せられた。

昭和十二年五月三十一日の都新聞第一面『讀者と記者』欄に『悲しき狭量——小國民に寄す』と題して、次のやうな趣旨の文が寄書せられてあつた。最近フランス飛行機が南支那方面で不時着陸した事がわが國の學校で放送せられた時、それを聽いて小學生たちは一齊に立上つて「萬歳」を叫んだと云ふ。それは甚だしい狭量さで大國民の態度ではない。かくの如きケチな根性を子供等が持つのは親達や時代の爲政者が惡いから、その惡影響を受けてゐるためである。三省せねばならぬと云ふ論旨である。これは實に尤な意見であるけれども、筆者自身の心理を分析して見ると、感情ではこの論旨と逆なことを考へてゐるらしく察せられて甚だ興味がある。少くとも、このやうにムキになつて物を云ふところは怪しいのである。一體、人間があまりムキになつて物を云ふ時は、自分自身の良心に咎めてゐるのだと考へて差支へないやうだ。即ち、他人を批難してゐるやうに見えても、實は自分自身を批難してゐるに過ぎぬ場合が多い。次に寄稿文を少しづゝ引用して小きざみに分析批判して見よう。

「日本人の心の持方が最近極度にケチ臭くなつたやうだ。日本のものなら何でも正しい。外國のものは皆惡いといふ俗惡な觀念がそれだ。」

これは確にその通りだ。さう云ふ傾向は幾分見える。國民意識が高まつて來、所謂ナルチスティッシュに、自己中心的に物事を考へるやうになつてゐるので、本人はケチな考へのつもりではなく、大いに自信のある心的態度をとり、甚だゆつたりした心持になつてゐるつもりなのだが、これを客觀すると、自惚が強くて、他人の長所が目に入らぬ、鼻持のならぬ氣障な態度と認められることは、これまた已むを得ないところであらう。たゞ併し、これが後に云ふ小學生徒たちのドレ機に對する心的態度とどの程度にまで關係があるかと云ふ段になると、私は懷疑的であつて、この筆者のやうにドグマ的にはなれない。

「先日勇躍パリを出發したドレ機が不屈の鬪志をかつて目的地に迫りながら遂に魔の南支那方面で不時着した

時、丁度わが國では學校放送が行はれてゐたが、臨時ニュースとして「ドレ機不時着」を報じたさうだ。その時、これを聽いた小學生達は一齊に立ち上つて「萬歳」を叫んだといふのだ。何といふ嘆かはしき狀景だらう。もとより我々もドレ機がグン／＼神風號の記録を破り初めた時、異常なスリルと興奮とを覺えた。しかしこれは斷じて排他的な興奮でなく世界文化のために新記録樹立を念願するものに他ならなかつた。」

何と云ふ立派な人格であらう。我々はこのやうな人格者を誇りとしなければならない。併し「世界文化のために新記録樹立を念願する」だけの機なら、それほど本能的なスリルと興奮とを覺えると云ふやうなことが果してあり得ることであらうか。我等心理學徒としてそのやうな心理事實を承認することが出來ない、もし「神風」の記録と云ふものが片方になかつたとしたら、飛行事業に直接個人的交渉のない筆者が果してそれほどのスリルと興奮とを覺え得たらうか。もし筆者が自分を正直に省みて（分析して）、成程、もし「神風」の記録を比較する考へが（記録を破られると云ふ不安が）なかつたならば、自分はあれだけのスリルと興奮とを覺え得なかつたであらうと云ふことを自認せられるならば、卽ち筆者は小學生徒等を一概に批難することは出來なくなるであらう。

實は私の如きも、ドレ機が不時着陸したと云ふニウスを聽いた時、まさか萬歳も唱へはしなかつたが、やゝ會心の微笑を禁じ得なかつたことを告白するものである。無論、他人の不幸を喜ぶと云ふことは、卑しいことであつて、それは我ながら不愉快なことである。不愉快であると云ふことは自分の超自我の苛責を被ると云ふことである。それ故に、超自我の苛責を被らないやうにするためには、始めから自分はさう云ふ卑しい考へはなかつたと云ふ風に考へるに越したことはない。そこで自分のさう云ふ卑しい考へは自分の無意識の中に抑壓せられることになる、抑壓せられてもその觀念は抑壓せられたまゝで無意識の裡にうごめいてゐるので、それは投出の心理機制によつて他人に塗りつけられる。さうして自分はさう云ふ考へは始めからなかつた。他人（この場合、小學生徒等から轉じて日本人の大人たち）がさう云ふことを考へてゐるのだと云ふことに定められる。

無論、他人がさう云ふことを考へてゐることは事實である。彼等は正直と云へば正直、超自我が低いと云へば低いのだ。併し彼等とても一概に他人の不幸（この場合、ドレ機の不時着陸）を喜ぶものではないのだ。たゞ自分の喜び（この場合、「神風」の新記録）を破られたくないだけの事なのだ。たゞこの二つの事實は矛盾なく存

立し得ないので、小學生等はドレ機の不時着陸に萬歳を叫んだりしたのだが、それはたゞ「幸にして我等の記録は未だ破られなかつた!」と云ふだけの意味であつて、「ドレ機の不幸を喜ぶ」と云ふ反面の意味はなかつたと見る方が正しいのであらう。彼等小學生たちはまだ子供で心理は單純であるから、これ等の矛盾は未だ矛盾とし表現は反面に於いてドレ機の不幸を喜ぶ如き形を必然的て彼等の態度の上に統一的に表れて來ない。我等は成人であるから、「神風」の記錄の破られざりし事の喜びのにとると云ふことを氣付いてゐるが故に、その端的な表現をさし控へるのみである。

一體、ドレ機それ自身にしたところで、彼等が果して純粹に「世界文化のために新記錄樹立を念願」するのみでこの企てを敢行したと「一教師」氏は考へてゐるであらうか。無論、新記錄樹立は舊記錄打破を必然的に意味してゐるので、その點に於いて彼等は我が航空文化を敵視して來たと見ることだつて出來ないことはない。併し私は何も、さう云ふ考へ方を强調しようとしてゐるわけではないが、さう云ふ考へ方の可能性を十分に意識してゐることの方が、これを抑壓して無意識でゐるよりは却つて健全であると云ふことを主張したいのである。土佐の海岸で顚覆したドレ機に對するわが國民の同情と親切とはいたく佛國大使を感激せしめたと云ふが、一教師氏は恐らくそれでまた得意になつて日本人の品性の高雅を誇ることであらうが、我等は却つて不幸を願つた罪亡ぼしをやつてゐるのではなからうかとの疑ひを一應はさしむけて見る。

數年前、同じく朝日新聞社の安部飛行士が佛國製の機に乘つて二ケ月もかゝつてフランスへ飛行したことがあつた。その時フランス國民は朝野を擧げてこれを歡迎した。在留の日本國民はそれを非常に光榮として感謝した。その時日本の一新聞記者は日本人のお人のよすぎるのに業腹になつたのか、フランス製の飛行機で二ケ月もかゝつても破損しなかつたとすれば、フランス機の優秀を證明したことになるから、フランス國民の歡迎するのは當然の事だと云つたので、在留邦人たちは憤慨したと云ふことが、芹澤光治良氏の報告に見えてゐた。憤慨した人々はこの記者のあまりにひねくれた物の考へ方に不快を感じ、折角の兩國民の交驩に水をさすやうな言動をいましめたのであらう。それは尤であるが、相手の心理に如何なる裏があるかと云ふことを觀破する力がないやうなことでは仕方がない。裏には裏がある。その裏を何もかも承知の上で、表のつき合ひの出來るやうでなければ國際間の交際などは出來るものではない。人間はあん

まり本當の事を云はれると腹を立てるものである。本當すぎる事は必ず不愉快だから、それは無意識の內に抑壓せられてゐる。抑壓せられたものに觸れられると憤慨をする、分析の抵抗を受けるのもそのためである。

「再度の挫折に屈せず三度び立つて敢然と自然に挑戰した彼に對する聲援の興奮だつた。にも拘らず、今後の日本を擔ふべき小國民が、この悲報を聞いて萬歲を叫ぶに至つては實に末怖ろしい氣がする、嚴正な批判のない子供心だといへばそれ迄だが、實はそれだけに問題は大きいのだとも云へる、親達や敎師やその他から、たゞかりそめに云はれた「排他的」な言葉が、無批判的に受け入れられた結果によるのであらう。」

子供の心理をこのやうに白紙的に、受働的にのみ考へることは出來ない。さう云ふ風に考へるのは、敎師の自惚にあらざれば認識不足である。子供は固より外界の感化に敏感なものではあるが、この場合の如きを全部的に親や敎師や日本主義者のせいにすることは考へ過ぎである。そこにこの筆者のコムプレクスが露出してゐるやうに思はれる。筆者の憎惡は實は子供を對象にしてゐるのではなくて、「敎師」、「親達」又は「輕薄な日本主義者」にあるのであらう。子供にかこつけて實はこれ等の人々を難ずるのが目的であつたのだ。また實際さうしてゐる。さうしてそれ等の人々と云ふのは恐らく筆者身邊の人就中その勤務しゐる學校の長又は同僚の事ではなからうかと察せられる。

「かういふ蝕まれた童心がやがてどういふ將來を來たすか、輕薄な日本主義者等の三思せねばならぬ問題だらう、そして軍敎審議會と悪口云はれる文敎審議會などのまづ眞つ先に考慮せねばならぬことだらう、然しあの審議會では却てさうした氣持を煽り立てこそすれ、それを是正するなど思ひも及ばぬことかもしれぬが」(一敎師)

と書いて筆者は稿を終つてゐるけれども、かう云ふ公憤らしい外見を具へた感情が、これを分析して見ると、實は單なる一二の私憤の尤らしい形をとつて表現せられたものに外ならぬ場合を、我等はあまりに多く分析觀察して來た。と云つても、只今の場合、この公憤が公憤として通用しないと云はうとしてゐるのでは決してないのだ。併しもしそこに假りに何かの私憤的根柢があつたとすれば、この筆者はその私憤の相手に面した場合、その憤りが公憤の形態をとつてをればをるほど、愈々處と時とを顧慮することなしに勃發せしめる可能性と危險性とがあると云ふことを特に注意しておきたいと思ふ。松の廊下に於ける淺野內匠守のやうに……。併し淺野內匠守に如何なる內的正義があらうとも、法律は外的形式を以

て判斷するものであるから、その形式に觸れたものはとにかく所罰せられなければならないのだ。

この一教師氏のやうにムキになり一圖に考へる性向の人は犯罪者になる傾向があると云ふことを、私は特に注意しておきたいと思ふ。これを分析すれば、ムキにはならず一圖には考へないで、他人に對して寛容であつて、罪に陷る危險も少くなると云ふことは、以上の分析批判を讀まれたゞけでも誰人でもこれを容認せられるであらうと信ずる。

精神分析學語彙（廿八）

一、分裂 Abspaltung —— この語は主としてフロイドの『ヒステリー研究』に出てゐる。その書に於ける用ひ方に依ると、心理群（即ち聯想的に結びつけられてゐる一群の觀念）は、當該心理群の不快なる內容に考へ及ばないやうにとの能働的な努力をなす場合に、その不快な內容を押し除けよう、忘却しようとの過程が起る、その過程を分裂と云ふのだと記述せられてゐる。分裂に依つて遊離した本能感情的部分は轉換ヒステリー症狀又は强迫現象となつて變態的な發散をするやうになる。精神分析學の理論構成が進步するにつれて、「分裂」の概念は抑壓の概念に變ることになつた。

一、節制 Abstinenz —— 精神分析文献中に於いて節制と云ふ語が用ゐられてゐるならば、それは性的節制、即ち時々の性目的を果すことの差控へとして理解せられる、成人の節制と云ふ場合には大抵は、性器的滿足の差控へ、即ち性交並びに自慰の差控へを意味することになつてゐる。この差控が本人の意志の自發であるか、他からの强制であるかは、何れでもよい。例へば、舟の上に囚はれの身であるなどは、他發的の節制である。併し自由意志で節制してゐるやうに見えても無意識的罪惡感や性の危險に對する不安などからして節制してゐる如きは外觀上自發的に見えるだけであつて、眞の自由意志的節制ではない。或る人が節制を安んじてなし得るやうになつてゐないと、不安だの、一般的な神經質などゝ云ふ實際神經症狀が起きる。それ等症狀は蓄積せられたる性的素材の直接的な中毒作用として見られる。（「實際神經症」の條參照。）それが更に昂ずると、退行的並びに精神神經症的現象を示すやうになる。

一、抽象觀念支出 Abstraktionaufwand —— 抽象的思考過程に於いては、具象的な事物に就いての思考過程の場合よりも、心理裝置はより多量のエネルギー支出をなす。換言すれば、より高度の神經思考作用（Innervation）をなす。このやうにして用ゐられるエネルギーの多量なることをフロイドは抽象觀念支出と名付けたのである。抽象的なものが具象的、即物的なものと比較せられ、さうして具象的なものがその端的な、率直な姿を以て、抽象的、高級的なものとそれ自身との間の差違を過大に見せる時には、即ちそこに一つの滑稽な效

果が生ずる。抽象觀念支出はその時忽ち過剩となり、その過剩エネルギーは滑稽的快感として笑ひとなつて發散せしめられる。

一、意志薄弱症 Abuelie —— 本能感情力微弱のため意志衝動の缺如せること。(憂鬱症に於いて起ること屢々なれど、重き强迫神經症に於いて起ることもあり、後者の場合は、種々な本能力の相剋のためである。)

一、防禦 Abwehr —— 不快なる內容を意識から遠去け、好ましからぬ本能的慾求を自我に近付けぬやうにするために、心理裝置が驅使するあらゆる機制又は機能に對する一般的名稱である。そのやうな防禦の種類は(一)抑壓、(二)退行、(三)反動構成、(四)遊離、(五)起きないやうにすること、等であるが、更にまた(六)否定・(七)投出、(八)同一化、同一視、(九)昇華なども、不快な內容のものを意識から遠去けるに役立ち、從つてこの點においては防禦過程の中に算入することが出來る防禦の原因はその拒まれたるものゝ內容が本人の意識にとつて不快であるがためであつて、その拒まれたものが本人の人格の規範的な部分(超自我)に撞着するためである場合もあるし、そのものゝ要求に從ふことが現實に容認せられざるためである場合もあるし、或はその要求を滿すことが本人の經驗に徵して自我に危險である(去勢的懲罰が待ち構へてゐるので)がためである場合もある。

一、防禦精神神經症 Abwehrneuropsychosen —— フロイドはその早期の著作に於いて、恐怖症、强迫觀念の如きヒステリー狀態、並びにヒステリーを伴つてゐるヒステリー精神症を(もしその症狀が明かに不快なる觀念への防禦として現れてゐる場合に)この名で呼んだのである。この語は後年の精神分析文獻中には殆ど用ゐられてはゐない。

一、美的感情ästhetische Gefühle —— 內部心理的にやむにやまれぬ滿足を得るために心理裝置が用ゐられるならば、心理裝置はそれ自身の活動だけで不快感を得ることが出來る。美は快感とはさう云ふ性質のものである。禁斷せられてゐるが故に普通ならば近付き難いやうな部分の快感もそのやうな活動に依つて解放せられる。我々は禁斷せられたものをも美的鑑賞の故にとて大目に見るからして、さう云ふ部分の快感が氣付かれぬ內に解放せられることがあるのである。パウル・シルダーの意見に依ると、美的鑑賞はそれに關係した責任感なくして本能の自由な發動が享受せられるからである。(シルダー著『醫學心理學』)

一、病源 Aetiologie —— 神經症病源としては、精神分析學では二つの病源群を分ける。

(一)體質的、生得的、遺傳的なもので、それは治療し難いものである。この種のものとしては、個々の色情帶域の亢奮力が高いこと、抑壓傾向が强いこと。自發的に性的早熟であること等。これ等內的の原因のみが發病を促すに足らぬことが屢である。そこに更に

(二)偶發的原因の必要な場合がある。偶發的原因とは個人が發達の過程中に影響を及ぼすものである。それ等の內で特

に重要なものは、乳兒時代から六歳頃までの間に他の子供又は成人から受けた性的行動への誘惑と云ふ形で現れる。或は成人を觀察することに依り、又は成人の側からの脅威により、强き驚駭又は不安の體驗を持つことが原因となる。偶然的經驗の影響ならば、精神分析に依つて撥無することが出來る。それのみならず精神分析に依つてはまた、體質的契機の作用にも影響を及ぼすことが出來る。心身の相關と病源との事情に就いては「補足的連帶關係」の條に於いて解說しておいた。

相談

母の不倫に惱む娘

問——私は十六歳で某專門學校に通學してゐます。父は地方官吏で家は中流以上の暮しをしてゐます。私が長女で十三と十の妹と七ッと二ッの弟があります。父母は結婚當時から性格相反し一緒にゐても言葉一ッ交はしません。父は遊ぶとか娛樂とかいふことを嫌ひ、仕事に興味を持ち毎日を機械的に暮すことを好み、それに反して母は、他人から私達の姉とも見誤られる程若々しく着飾り、そして單純に暮すのを好みません。

そして二年前土地の高商を出た人（官吏）と仲よくなり、彼は毎日父の留守に來てゐて、父が歸つて來ると裏口からそッと出て行くのです。今夏私が歸省して二人の關係がいよ〳〵濃くなつてゐるのを見て忠告しましたところ母は『彼とはこんなに愛し合つてゐるのだから仕方がない。父さんにいつても離緣してくれないのだから、かうして二人は隱れて逢つてゐるのです。父さんが死んだら結婚するもか知れない。あなたはまだ年が行かないから分らないのだ。あなたは母さんのやうに間違つた結婚をしてはいけない、自立の道を立てゝ置きなさい。今は何にも考へないで勉强しなさい』と申しました。私には世の中のことが分らないので何ともいへませんでしたけれど、この世で親兄弟もなくたつた一人の父の默然とした淋しい生活が見兼ねます。

母とはどんなことがあつても離れたくありません。併しこれ迄育てゝ吳れた父をも見捨てる氣にはなりません。さりとて、全く性格の異つた愛を少しも感じない父母二人をどうしやうもありません。又、私一人でなく後には弟妹もゐるのだと思ふと、胸がしめつけられさうです。私はどういふ氣持ちで父母に對し、どんな風に進んで行けばよいでせうか？（惠子）

答——貴女の立場が如何にお苦しいかを察して何とも答辯の辭に窮するほどであります。ところで、私は普通

の答辯者のやうに、誰かを（この場合、勿論、母君を）ムキになつて憎むことが出來たらまだしも樂でせうが、私は分析者としてそれをする氣にもならないので、なほさら困るわけであります。勿論、道德的に云へば母（繁雜になりますから今後御兩親とも呼すてにしますことを許して下さい）が悪く父に一點の非がないことは申すまでもありません。併し道德的に裁斷して見たつて、實際の事情は少しもよくならないことには變りはないのですから、そんなことをして見たつて、それは結局、裁判者の氣安めに過ぎないのであります。現に、母だとて自分の悪いこと位は百も承知の上で、已むに已まれずやつてゐることなんですからね。

併しかう云ふ事件は、有體に云へば、少しも珍らしいことではありませんね。寧ろ典型的な場合です。父は仕事一方の眞面目な方だけに、性生活に於いてはどちらかと云ふと禁壓的で享樂的でないのでせう。さうして父親型で固くるしくて、遊び相手としては面白くない人でせう。母は妖婦型で有閑婦人的で享樂的で性には解放的自由主義的で、父の糞眞目面なのが馬鹿〳〵しいと云ふ氣持でせう。それが母のまだ若い內（少女的な氣持が殘つてゐる內、父コムプレクスの解消しない內）はまだよかつたのでせうが（何となれば貴女の父が父コムプレクスの轉嫁對象となつたから）、それが年齡と共に解消せられて來ると、今度は自分が母親型となり、性對象として若き燕型の人を求めるやうになります。そこへ折よくか折あしくか現れたのが高商出身のその官吏なのです。母は自分が間違つた結婚をしたことを悔いてゐるやうに云つてゐますが、確に間違つた結婚ではあつたかも知れません。併し何人がその結婚當時に於いて、これこそ間違ひのない結婚だと云ふ絕對的確信がありませう。恐らく母自身だとて、自分の結婚が間違つてゐるかも知れないと云ふ不安はあまり強く抱くことなしに結婚生活に入つたものと思はれます。

夫婦生活など丶云ふものは双方の眞劍な共同的な努力によつて、やうやく終生の契を完うし得るものであります。果して母にどれだけの努力があつたかは疑はしいと思ひます。一つには、貴女の御家庭が相當にヒマで、その上、金にも困らぬからと云ふ點もその因をなしてゐます。小人閑居して不善をなすと云ふ言葉がありますが、小人でなくても閑すぎたら誰だつてよからぬことに刺戟を求めるやうになることは自然でせう。サラリーマンの家庭生活と云ふものは實に種々な社會問題を孕んでゐると思ひます。

母の若き燕も併し段々生長してその母コムプレクスを

卒業すると、母コムプレクスの轉嫁對象としての貴女の母は捨てられることになりますから、どうせこの戀愛は長續きするわけはないです。その時、母は行くべきところがないでせう。父は勿論家に入れることを肯じないでせうし、貴女方子供衆も白眼視するでせう。そこを考へたら、さう云ふ關係は早く清算すべきですが、母のエスが超自我と妥協して、それが美しい詩にまで高められてゐる現在では、何を云つたとて耳には這入りますまい。

一番お氣の毒なのは貴女ですが、早く苦勞することは早く大人になれることだとでもあきらめて、自分の兩親の生活を生物學的に觀察する冷靜な眼を早くお養ひなさる事を希望します。昔の人は「汝等の内罪なきものまづ石にて打つべし」と云ふ宗教的な考へ方でさう云ふ心境にならうとしたのですが、今の我々は科學的な方法でそれに達し得ると思ひます。それより以外に貴女としては心の平靜を保つべき方法はないでせう。一度父か母を私のところに來るやうにすゝめて御覽なさい。貴方一人の力では何ともなりませんよ。分析でもするより外に打開の道はありますまい。(記者)

内外彙報

フロイド先生の近翰

大槻氏は三月三日付にてフロイド博士宛に手紙を出し、同時にフロイド賞牌の複製と、『戀愛性慾の心理とその分析處置法』『阿部定の精神分析的診斷』、本誌第五巻第二號並びに『フロイド精神分析學全集』内容見本等を別送せられたところ、同博士から三月二十七日付にて返書があり、四月十五日に到着した。（口繪寫眞參照。）大槻氏の手紙の要點はフロイド賞牌の由來の説明、受賞者の名前と論文の題目、フロイド全集第二期刊行に關する了解などの事であつた。それに對するフロイド博士の返書を左に譯して見よう。

「親愛なる大槻様

貴方の最近の御贈物は私に種々な快き驚きを齎しました。貴方が拙著全集の完成を企てられることを承り甚だ喜ばしいことであります。飜譯權の事に關しては、當市第九區ベルヒガツセ街七番地のわが出版部と協定せられたく存じます。賞牌は美術品として誠に見事な出來だと思ひます。顔は私にあまりよく似てゐませんが、少くとも本物よりは美男であります。これに似てゐるとかゐないとか云ふ事ではたいしたことはありません。賞牌提供の公爵とはどう云ふ方ですか、さうしてまたどうしてその公爵がそのやうに賞牌を出すことになつたのか、それを知ることに興味があります。

そちらからお送り下さる出版物に就いては、我々は勿論いつも、そこに何が書いてあるか分らなくて殘念です。只今のところ、ギインの我々の身邊にはその飜譯を頼めるやうな日本人が居りません。貴方が御自分でその飜譯をなさつて送つて下さいませんか。さうすれば我々は貴方の論文を味ひ、且つそれを我々の雑誌に載せることが出來るでありませう。感謝と心からなる敬意とを以て、

貴方のフロイド」

博士はこのやうに我々の贈り物を喜ばれ、且つ我々に對して親切な申出をせられた。フロイド全集第二期刊行の飜譯に關しても博士はこの通り喜んでゐられるのであるが、飜譯權の問題に關しては別にギイン學會出版部長から大槻氏宛に手紙が來、その勞を心から謝せられ、たゞ出來るだけの事をしてくれゝばよいので無理解な要求をするものでないから出版社春陽堂にその意を傳へてくれと云ふ文意であつた。

ファイゲンバウム博士の死

本研究所と豫々親しく文通のあつた米國ニウヨーク在住、オースタリー出身の分析者ドリアン・ファイゲンバウム博士は本年一月二日突如として逝去せられた。博士の論文は延島英一氏、北山隆、等が本誌上で既に二篇その要領を紹介せられ、本號上にも北山氏「結婚恐怖症」を、追悼の意をも加へて、紹介してゐられるので、我が讀者諸氏の間にも、博士の名は親しいもの

となつてゐるであらう。

博士は一八八七年當時オーストリー領内レムベルグの産であつた。夙にヰイン大學に醫學を學び、後ミユンヘンにてクレーペリンの下に精神病學を研め、後、興味を精神分析學に專らにし、米國に渡つて以後晩年の十二年は專ら精神分析による治療と雜誌『精神分析季刊』の編輯とに捧げられたのであつた。博士は、後繼編輯者の記述するところに依ると、非常に寛厚な性格者であつたらしく、且つ如何にもオーストリー人らしく音樂に深甚の興味を寄せてゐたと云ふことである。こゝに謹んで弔意を表す。

アードラー博士の死

ロンドン發同盟通信に基き東京日々新聞の報導するところに依ると、フロイド博士の門下にして同博士と意見を異にして訣れ、別に個人心理學の一派を樹てたアルフレッド・アードラー博士は去る五月廿八日北部英國のアバディーンに於いて急逝した。享年六十七。一八七〇年オーストリー、ヰインの産にて同地大學の出身。同博士の論文は本誌上でも長谷川誠也氏始め諸家により屢々紹介せられたので、讀者諸氏の間には親しい名前となつてゐるであらう。晩年に專ら英國に存住し、相當の勢力を以て治療界に活躍してゐた。『神經症的體質』、『個人心理學の實踐及び理論』、『神經症の諸問題』などの諸著がある。フロイドも自我研究としてのアードラー學の意義と價値とを認めてゐる。

ベルネリ博士暗殺さる

去る五月上旬、スペイン、バルセロナの市街戰の際、イタリイの分析家カミロ・ベルネリ博士 Dr. Camillo Berneri が非業の最期を遂げた。博士は一八九七年、イタリイのロンバルザア地方ロヂに生れ、長じてフイレンツエ大學哲學科に學び、一九二一年博士號を授けられると略同時に、同大學哲學教授に異數の拔擢を受けた。其後ムツソリニのファシヨ政治强行によつて、博士は教壇を去り故國を亡命して、フランス、ベルギー等に漂浪の生活を送らねばならなくなつた。此間伊西佛語を以て數種の著作が彼の手で公にされたが、大部分精神分析の發見を社會問題の解決に應用したものである。『近親婚の問題』Les Problèmes de l'inceste などは其代表的なものである。

スペイン内亂勃發後は、博士はイタリー人義勇兵の政治委員として同國に赴き、バルセロナに於てイタリイ語新聞『階級鬪爭』Guerra di Classe を發刊し、其主筆を勤めてゐた。先頃のバルセロナ市街戰は、共産黨が同地方の實權を握るアナーキスト派の領袖をクーデタにより暗殺せんとしたことに端を發したものであるが、アナーキスト派の重鎭と目さるゝベルネリ博士は、五日深　、秘書バルビエリ氏と共に自宅に在つたところを共産黨警官に襲はれ、翌朝二人共政府建物附近で死體となつて發見されたのである。

『イマゴー』本年第一號

一、「エヂプト人モーゼ」ジグムント・フロイド——八十一歳の高齢を以てなほ未だこのやうに研究を發表してゐる斯學父祖の元氣さには誠に心强いものがある。モーセはエヂプト人かユダヤ人かと云ふ問題を、傳說分析的見地から研究してゐる。

一、「大人の中の子供」テオドル・ライク——成人の中にある幼兒性を種々な見地から研究してゐる。

一、「同一化の二重機制」グスタフ・ハンス・グラーバー（スツットガルト）——人が他人と同一化する心理は能働と受動との二重機制によりてなされることを論じてゐる。

一、「同一化の二重機制に關するグラーバー說を敷衍して」クリストッフェル（バーゼル）——論者は普通に用ゐられる「感情移入」の代りに「感情移出」と云ふ言葉を用ゐてこの問題を扱つてゐる。

一、「自殺の心理」アンゲル・ガルマ（マドリッド）——簡單に內容の紹介が出來ないが、非常に組織的な論文。

一、「大戰後に於ける心理療法の發達」シルギア・ペイン（ロンドン）——世界大戰に際して精神的外傷に對して從來の精神病學的療法の無力であつたことが頓に精神療法、殊に精神分析に興味をかけしめることゝなつた。

一、「マリアの子の童話」フェルステーク・ゾレフェルト（ハーグ）——グリム童話中の有名な童話に就き女性心理を研究す。この童話は鬼子母傳說と關係あるらし。

一、新刊批評——

『精神分析教育雜誌』昨年第六冊

一、「精神分析敎育の缺點に就いて」ハンス・ツリガー（ベルン）——精神分析敎育は極幼兒期から始めなければならないのに、筆者の如く小學校以後の敎育も受持つものには困ることがあると云ふ。

一、「吃音の影響」ブルンナー（ルウマニア）——三歲三ケ月の幼兒の吃音に就いての分析觀察。

一、「三歲男兒の不安の經驗」アリース・リンドアウ（ヰイン）——食物をとらない幼兒の分析。

一、新刊數種批評——

最近國內事實

▼早稻田大學 精神分析學研究會では、五月一日春期大會を同大學文學部敎室に於いて催し、長谷川誠也氏（ガリヴアー旅行記の精神分析）及び木村廉吉氏（演題不詳）講演して盛會であつた。

▼『ショウペンハウエルの女性觀』岩倉具榮稿——『政界往來』五月號

▼東北帝大精神科敎室に久しく勤務してゐた醫學博士早坂長一郞氏は、この度、兵庫縣兵庫郡山田村谷上、兵庫縣立精神病院光風寮に轉任せられた。

▼海外超現實主義作品展覽會——雜誌『みづゑ』發行所春島會主催にて、瀧口修造、山中散生兩氏委員となり、主としてフ

ランス及びスペインのシウル・レアリズムの作品が六月十日から十四日まで銀座西六丁目日本サロンに於いて展覽せられた。海外に於けるこの派の作品がこのやうに多數一堂に集められたことは未曾有のことで、種々な意味でわが國畫壇を益するところ大であつたであらう。有名なサルヴドール・ダリやジョーン・ミロのものを多數に見せて貰つたゞけでも有難いことであつた。

▼『フロイド精神分析學全集』（春陽堂版）第七卷『トーテムとタブー及び自我とエス』は改訂再版を五月十五日に發行し、こゝに同全集の改訂重版は全部完成した。

▼『無意識と言語』に就き大槻憲二氏は四月二十一日若溪會館に於けるコトバの會例會にて講演した。

▼『變態性慾の心理とその分析』の演題にて大槻憲二氏は東京講演會の五月例會（廿八日、銀座オリオンにて）講演した。來聽者は同會近來の記錄を破つて多數に上つたと。

▼文藝春秋社發行『話』編輯部にては性教育問題に關する座談會を五月十五日夜芝公園料亭に催し、その記事を同誌七月號に揭げた。出席者は金子準二、式場隆三郎、金子近次、草間八十雄、大槻憲二の諸氏であつた。

▼『精神分析とは何か』大槻氏、人生創造講演會（六月五日夜、於仁壽講堂）にて講演。

▼『一人二役の精神分析』大槻氏稿『舞臺』五月號。

▼『秀吉と家康の精神分析』大槻氏放送草稿、春陽堂發行『傳統』五月號に揭載。

▼『女は何故に誘惑されるか』大槻氏談、報知新聞家庭欄、五月十九日朝刊。

▼『悲慘の享樂と心の浪費——大阪夏の陣を見て』大槻氏稿『人生創造』六月號。

▼『戀愛觀破祕訣』高橋鐵稿——『奧の奧』三・四月號。

▼『買物心理の祕密』高橋鐵稿——『廣告界』五月號。

▼本誌前號內容に關しては本號卷頭廣告を參照ありたし。

本研究所研究會例會

四月例會は十九日夜、例により萬世橋驛前アメリカン・ベーカリ階上に催ふされた。

食前の講義は本日はなく、相互の雜話に過ごし、食後、司會者から新來者の紹介及びフロイドからの書翰の披露があつた。續いて大槻氏は婦人の冷感症に就いての外國文獻の調査結果を紹介せられた。

高橋鐵氏續いて立つて「服飾の精神分析」の題下に種々嬖技の觀察を述べられ、喝采を博した。次に土屋秋實氏は「男性と女性」及び「民族的傳統と復古主義」に就いて意見を述べられた。前者は推薦せられて本號研究欄に揭げられてゐる。

最後に大槻岐美氏は或るパラノイア患者の近親姦空想に就いて報告せられた。

出席者は右言及諸氏の他に、奥無限、加藤巳酉三郎、梅木米吉、北垣照雄、田中虎雄、小林一、竹田浩一郎、伊藤龍朗、霜田靜志、長崎文治、倉橋久雄、塚崎茂明、小杉長平、木村廉吉

の諸氏であつた。田内長太郎、富田義介、宮田齊、その他の諸氏から缺席の挨拶があつた。

×

五月例會は十七日夜、同所に催ふされた。

食前雜誌所載語彙に就いて司會者から解説があつた。食後、高橋鐵氏は「ひげの研究」の題下にその心理分析を試みられた次に大槻氏は「男性と女性」の關係について述べられたが、それは次に續稿を得て本號卷頭に揭げられてゐる。

右の二談終つて、内田勇三郎氏は本誌前號に揭げられた、大槻氏の對内田氏批評に言及して本日の出席が本日列席者に對するクレーペリン加算法試驗實施にあることを告げられ、その實施を受諾せられむことを乞はれたので、一同これを承知した。そこで内田氏は戸川行男氏と早大學生濱野象一郎君とを督してその試驗を試みられた。その樣子及び結果は大槻氏の本號時評内にもあること故、こゝには略す。

出席者は右言及諸氏の他に、塚崎茂明、大久保眞太郎、北垣照雄、倉橋久雄、吳無限、富田義介、土屋喜一、大槻岐美の諸氏であつた。また小杉長平、小林一、竹田浩一郎、岩倉具榮、平野弘、小山良修の諸氏からは缺席の挨拶があつた。

本研究所講習會例會

五月例會は三日夜、研究所に於いて催ふされた。『分析戀愛論』の卷頭の第三論文「處女性のタブー」を精讀したが、譯者大槻氏は飜譯した當時よりも今の方が面白いやうに感ずると云はれた、

會後、高橋鐵氏は「婦人買物心理」に就いて所感を述べられ大槻氏はフェレンチーの有名な論文「現實感の發展段階」の飜譯の一部分を朗讀せられた。十二時近くまでしんみりと語り合つた。出席者は、右言及二氏の他に塚崎茂明、加藤巳酉三郎、北山隆、小林一、延島英一、北垣照雄、倉橋久雄、大槻岐美の諸氏であつた。

×

六月例會は七日夜同所に於いて催ふされた。

『分析戀愛論』中の「文明的性道德と近代の神經質」を一同分擔精讀した。この論文は文明批評家としてのフロイドを知るに重要な論文である。會後、茶菓をとりつゝ、延島氏は織田信長を論ぜられた。また大槻氏が幽靈の寫眞と稱するものを持つてゐられたので、幽靈の話に花が咲いた。かう云ふ神祕的なことは分析學には關係はないが、研究出來るならばして見たいものと思ふ。併し好奇的な問題に過ぎないやうな氣がする。出席者は北山隆、小林一、吳無限、大槻憲二、同岐美、塚崎茂明 高橋鐵、延島英一、倉橋久雄、土屋秋實の諸氏であつた。

七月度の講習會は五日夜、研究會は十九日である。
新たに出席希望の方は豫め御一報を乞ふ。

質疑應答

腸管出産空想に就いて

拜啓初夏の候益々清適の事と存じます。

さて御誌五・六月號九十一頁のアプフウプ「死神時計」に腸管出産空想といふ言葉が出てきますが、この空想がどうして無意識となつたか、そして例へばどういふ風に日常生活の行動となつて現れるか、分りませんので、誌上何かの機會に御教へ下されば幸と存じます。

第二期フロイド全集刊行計畫、一日も早く實行されん事を待つてをります。

終りに、小生事慢性病も引續きよい方に向つてをります、乍他事御安心下さい。病人に著しい幼時退行心理も追々少なく大人的になりつゝあります。一重に精神分析のお蔭と感謝してゐます。先は御尋ねまで。草々（久下貞夫）

答――御ハガキ拜受いたしました。近頃御健康も追々よろしき由、誠に喜ばしい次第です。精神分析學が貴君の御健康増進の一助となつたことは誠に嬉しい限りであります。「幼時退行心理も追々少くなり、大人的になりつゝあります」とありましたが、貴君の文字の枯れて來たことがよくそれを證明してゐるやうであります。人間が出來て來ると上手下手はともかく文字に直ぐにそれが出るから恐ろしいものだと思ひます。廣井重一君が昨日大阪から見えて、貴君の御ハガキの文字の見事なのにとても感心してゐました。さう云はれて見ると、なるほどさうだと私も思ひました。

×

お尋ねのフロイド全集第二期刊行は、なるべく早く完成するやうに努力します故、その節は何卒よろしく御支援の程願上げます。

×

も一つお尋ねの「腸管出産空想」に就いては本誌第二卷第六號語彙欄に説明が出てゐますから御覽下さい。フロイドの『性慾論』の一〇一頁にも出てゐます。子供は通路のやうな腸管から出産するやうに考へてゐるのが、幼兒の出産觀であります。かゝる見方は動物界（殊に鳥類の如き）の出産事情を思はせる。何故に子供がこのやうな出産觀を自發的に持つやうになるかは生物學的に觀念遺傳として考へるより外はないかも知れませんが、とにかく人間は通路のやうなところを通つて産れて來たと云ふ幼兒的無意識觀念を持つてゐるらしいことが屢々夢に依つて推定せられる。さうして無意識的には死は生の逆と考へられてゐるから生れて來た事情を逆コースに辿ることが死であると想定せられてあるらしい。丸山薫氏の「時間のトンネル」と云ふのはさう云ふ腸管の逆コースを暗示すると考へると非常に興味があります。子供やルムペンが鐵管のやうなものに這入りたがつたりするのはその表はれと見てよいでせう。（記者）

新刊紹介

▼『研究社時事英語辭典』（英語研究編輯部編）――「夙に出づべくして出でなかつたこの Kenkyusha's Current English Dictionary が『英語研究』編輯同人の手により公にせられたことは慶賀の至りだ。慾を云へは際限がない。小姑的批評眼を以て見れば、脱落した語も多々あらう。然しとにかく最初の時事英語辭典としてその努力を大とせねばならない。政治、經濟、科學、文學、スポーツ、映畫の新語は元より、アメリカのスラングや、支那、滿洲國の地名人名をまで網羅せるなど時事英語の讀者には此上なき重寶な辭典である。殊に僅々九ケ月の日子を以て本辭典の編輯を完了したと傳聞するが、編輯者一同の偉大なる精力は羨望の至りである。而も左樣に急いで編輯されたに拘らず、内容は全く拙速の迹を見ず、かなり良心的に編輯せられてゐる。我が國英語辭典のトップを切つたものとして、之を廣く江湖に推奬するに躊躇しない」と、商賣敵手の『カレント・オヴ・ザ・ワールド』誌記者が口を極めて賞揚してゐる。本誌記者は寧ろ専門の語學雜誌記者の批評を尊重して敢へて自分の見解を出すことを遠慮した。遠慮した理由の他の一つは、本書に含まれてゐる精神分析學術語數十例はみな本研究所が責任を以て解説を加へて、同書編輯部に報告したものであると云ふ點にもある。『英語研究』七月號誌上で寮佐吉氏は本書を詳評して内に次の如く云つてゐる。「精神分析に關する言葉が非常に多くとり入れられて、しかも正しい譯語が與へてあるのが一際目につく。劣等感は云はずもがな、昇華と云ふやうな語にも門外漢によく分るやうに詳しい説明が施してある。」と。この部分は本研究所がその責に任じてもよいかと思ふ。（麴町區富士見町、研究社發行、定價二圓五十錢。）

▼『吃音兒童の取扱と其の實際』小林宗男著――評者は精神分析法により吃音者を治療した經驗があるので、この方面の研究は特別の關心を持つてゐる。著者小林氏は自ら吃音に惱んだ過去を持ち、その自ら日本吃音學院長松澤忠太氏の治療に救はれたに感激し、同病者救濟に大童になつてゐられるので、誠にゆかしき次第である。併しその治療の方法と云ふ點になると、評者は失禮ながらあまり滿足出來なかつた。その原因として擧げてあるのも單なる契機に過ぎず、眞の原因への探究は等閑に附せられてゐる。氏の治療法は原因除去ではなく練習法である。

世の多くの教育家や實驗心理學者の方法がそれであるが、眞の原因を突きとめようとしない限り、その治療法は常識的方法であると云つて差支へない。私は松澤氏及び小林氏の方法に於いて比較的效果の上るのは、多くの同病者を一堂に集めて行ふからではないかと思ふ。多くの患者が、かくの如く同病者多きかと思つてそれだけでも救はれた如くに感じてゐるところを告白してゐるが、その心理的效果に注意する必要があるやうに思ふ。

吃音の原因（と氏は云ふが私から見ると契機）として模倣を擧げてあるが、模倣するものは澤山にあるが、吃音になるものは少い。それは何故かと訊かれたら返答が出來ないのでなからうか。故に私は模倣は契機に過ぎず、原因はもつと深部にあると云ふのだ。併しこの書は吃音に關して種々な資料を集めてあるだけでも十分に意義と價値とがある。學者の學術書としてゞなく教育實際家の書としては上々の出來であると云つてよい。（東陽閣發行、二圓十錢。）

▼『夢の科學』（吉田泰明子著、神田清教社刊、定價一圓十錢）――評者は本書の著者の經歷について何事も知らない。著者は本書序文に於いて精神分析學の意義を重視してゐるやうではあるが、内容より察して本書の態度・方法は斯學への顧慮なくしてせられた物と考へられる。勿論これに對しては「夢占の科學的研究に一歩を踏込んだ物に過ぎない」といふ言葉と共に、「斯學が夢研究に對して大なる貢獻を有する」といふ意味の言葉が序言中に明示されてはあるが。内容は石橋臥波氏著『夢』なる古い文獻と略同樣の體裁のものであり、廣く東西古今の夢に對する思想及び夢占の實例實話を蒐集し、分類し、之に從來の夢に對する生理的心理的說明の多少を附加した物である。本書の價値は一に此の蒐集に存するのであつて、意識心理よりする夢解釋の種々相並びに限界を知り、更に解釋それ自身を分析檢討すべき物として考へる時、本誌の讀者にとつても相當の興味と意義とを與へるものであらう。唯、標題中の神秘といふ文字はあらずもがなのやうに思はれる事を斷つて置く。

▼『正しき禪の道』中根環堂著――著者の經歷に就いては評者全く知識を缺いてゐるが、この書の一部分は嘗て中央放送局から修養時間に放送せられたものであるらしい。副題して「道元禪の生き方」とある通り、道元禪師の思想を研究するのがこの書の目的の一つである。我等禪學に通ぜざるものであるから批評がましいことを云ふのを避けるが、第一章は「緒言」として道元の著書、風格、生ひ立ち、特色などを述べ、第二章は「禪的自覺の成立」を論じ、第三章は「禪的生活の基調」を述べ、第四章は「禪の生活規範」を確立し、第五章は「道元禪の中心問題」を論じ、第六章は「道元禪の生命」を明かにし、最後に「附錄」として「坐禪儀」を紹介してゐる。（春陽堂發行、定價一圓三〇錢）

▼『條件反射學』パヴロフ原著・林髞譯――精神分析學と條件反射學との密接な關係に就いては、讀者諸氏は既に本誌前號の特輯諸論文に就いて知られたところであらう。本書は條件反射學の原典とも云ふべきパヴロフ博士の著『大腦兩半球の働きに就いての講義』を全譯したものである。通卷堂々六百六十頁、前後數年に亙る苦心の結果であると云ふことである。多數の興味ある挿畫を加へ、譯文平易流暢にして外觀の重厖的なのに似ず讀み易いのである。

内容は廿三篇の講話から成り、第一講は「大腦兩半球の働きを研究する原理的方法の發生とその基礎づけ」に就いて述べ、第二講は「大腦兩半球の働きの客觀的研究の技術的方

法」に就きて述べ第三講では「外制止」を講じ、第四講以下第六講までは「内制止」を講じ、第七講には「分化制止」を講じ第九講から「擴延、集中」などに就いての講話がある。これ等の術語は本誌前號を讀まれた方々には見當のつくところであらうから特に擧げて見た。二十三講の他に文献、人名索引、譯者の跋などがあつて、終つてゐる。何れにもせよ、この大著の全譯を完成せられた譯者の努力に對して滿腔の敬意を表するものである。本誌前號は實はこの書の完成への祝福の意をも含めて特輯せられたものであつた。學術書の飜譯の如きはあまりにも勞多くして報いられるところ少いものだから、同學のよしみを以てなされたのである。（三省堂發行、定價八圓。）

▼**『東北帝大醫學部精神病學教室業報』**（第五卷第一、第二號）――本號は木村廉吉氏の『精神乖離症の精神分析學的考察』の大論文を卷頭とし、赤面恐怖專攻の山村道雄氏がやはりそれに近い題目の『人嫌ひの傾向に就いて』を第二論文とし、大連聖愛病院精神科の土井正德氏が『憑依及神託を主徴候とする心因精神病に就いて――其臨床的觀察――』を第三論文として同じく土井氏の同論文の第二報「其心的機制の考察」を第四論文とし、堂々たる内容を具へて出現した。

木村氏の論文は氏の學位論文であると聽いてゐるが、力作たることは固よりである。第一章緒言に於いては　神乖離症に對する分析的取扱可能の限界を明かにし、第二章に於いては精神乖離症に關する諸家の精神分析學說を紹介し、第三章に於いては「上述せる諸家の說に對する批判」を述べ、第四章に於いては「研究例第一」として廿六歲の一學生に就いての調査を報告し、第五章に於いては第二例として廿九歲の教師に就いての調査を述べ、第六章に於いては「第三例及び追加例」の調査を報告し、第七章「精神乖離症に關する小統計」に於いては種々な男女比率（本誌本號に揭げられてゐる如き）を揭げ、第八章に於いては「總括及び結論」として十ケ條の考察を揭げ、更にこれを要約して「フロイドの云ふ如く精神乖離症は自己愛と最も深い關係を有し、精神發達の經過中自己愛階梯に強いリビドー固定を殘してゐるものが精神的の難關に處し得ず現實界への適應性を失つて自ら別の幻想世界を作り上げ、その範圍内又は水準の上で生物學的適應作用を營んでゐる狀態が精神乖離症の症候として現れるのである」と結論してゐる

以上は木村氏の論文の構造の大要を紹介したものに過ぎない。本誌本號〆切間際に業報が着いたので、批評に亘るやうなことは何れ後日に讓ることにして、他の諸論文に就いても同樣にしておきたい。

併し昨年十二月二十日發行と奥付にある印刷物が本年六月末に出來とは、お役所の仕事とは云へ、あまりのんびりし過ぎてはゐませんか。斯學に對する情熱の缺如を意味せざれば幸である。（丸善株式會社仙臺支店發行、定價五十錢）

編輯後記

こゝに「男性と女性」號を世に送る。本號は本誌近來の傑作のやうに編輯部では自信してゐますが、如何でせうか。何れの欄もそれぞれに充實緊張してゐると信じてゐます。本誌第二卷第二號「女性心理研究號」と併讀せられたし。同號も品切近くなりましたが、「宗敎心理研究號」(第三卷第二號)は久しく品切となつてゐましたところ、書庫の奧から數部發見せられました。今まで御註文下さつて御斷りした方々には改めて御註文下さるやう待上げます。

×

新執筆者は加藤巳酉三郎氏と中尾破邪氏とであります。加藤氏は某會社に勤務の傍、このやうに勉強してゐられます。中尾破邪氏は早稻田大學佛文科出身、目下フランスに滯在中の筈であります。別に精神分析學を特別に研究してゐられると云ふわけではないらしいです。原稿は戸川行男氏から紹介せられたものでありますす。矢部八重吉氏も久しぶりの執筆であります。氏の情熱には打たれるものがあります。

×

最近の特別誌友加入者名簿は次の如くであります。何卒、加盟者諸君は御知人御親友をお勸誘下さい。さうして精神分析學に依る日本社會の精神的衞生運動を貫徹しませう。

▼東京市……石渡　尊氏
▼大阪府下……森田　泰一氏
▼朝鮮……鄭　斗鉉氏
▼福岡縣……足立　麟一氏
▼東京市……田澤　一三氏
▼福井縣……小泉　次郎氏

×

大槻氏著『戀愛性慾の心理とその分析處置法』は極めて好評であつて、近く再版を見ることでありませう。初版を特に好まれる方がありますが、初版はもう殘部僅少であります。

大槻氏はまた近く春陽堂から『現代日本社會分析』と題する新著を公にせられるさうであります。この社會紛亂の折柄この書によつて社會人としての正確な目安を立て得る人々も少くないことゝ存じます。『新しき立身道』は當研究所出版部で取次いでゐます。

フロイド全集の第二期刊行に就いて讀

これはカルピスの廣告ですが、紙鳶に「龍」の字のあるのは不老泉院主氏の「アプフウプ」を讀んだ揭句ではまた特別の興味が持たれます。



編輯後記

者諸氏からの激勵を深謝します。フロイドの書翰にもあります通り、原著者もおのやうに喜んでをられます事故、なるべく早く實現したいと思ひますが、何しろ譯者あまりに多忙にて、健康を害しない程度にせいぜい督促いたします。

×

さき頃、大阪在住の研究會員廣井重一氏が久しぶりに上京せられ、研究所に立寄つて數時間に亘り歡談せられ、誠に愉快でありました。同學の人々の御上京の節に立寄られることは誠に樂しみの一つであります。

×

世界的に社會生活が騷々しいです。我等はこれに對して動ぜざる肚を分析によつて作ることが出來ると信じてゐます。

×

次の次の頁に「特別誌友規約」と「申込書」とを添へておきました。御一覽下さい。

★

次號は『男女性格分析』と題して特輯します。本號と聯絡が多く、興味も多いですが特に本號の抽象的一般的なるに比して、具體的特殊的なるをその特徵とするでありませう。只今豫定の原稿は——

一、ナポレオン一世の性格…延島英一
一、女性の性生活………高水力太郎
一、千姬の精神分析………大槻憲二
一、芭蕉の性格………齋藤發智良
一、夏目漱石の性格………北山隆
一、故大佐の令孃(續)………岩倉具榮譯
一、性慾と資本主義(アランディ) 延島英一譯
一、アレキサンダー研究……木村廉吉譯
一、心理研究ノート(續)……長谷川誠也

などがありますが、なほまた考案中のものもあります。引續き御愛讀あらむことを願ひ上げます。

★

昭和十二年六月二十五日印刷
昭和十二年七月一日發行
(隔月刊) 定價五十錢

編輯及發行 東京市本郷區駒込動坂町三二七 大槻憲二
印刷所 東京市淺草區北三筋町五五 三進堂印刷所

定價一部 五拾錢
半年分 一圓卆錢 (送料共)
一年分 三圓 (送料共)

御注文規定

・本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。
・御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。
・郵券代用の場合は一割增に願ひます。
・本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

發行所 東京市本郷區駒込動坂町三二七 東京精神分析學研究所 振替口座東京七八八一七番

大賣捌所 東京堂・東海堂・大東館 北隆館・(大阪)福音社

研究所事業案内

一、分析部

・神經症治療（ヒステリー、强迫症、恐怖症、妄症想、その他）

・性格改造（惡癖、奇習など現實生活に不適當なる性向にして無意識病根に基くもの）

・容員の診察（分析的又は醫術的）希望の方には、紹介の勞をとるべし

二、通信分析部

・分析法は毎日、患者が分析者の許に通ひて、處置を受けるが正當なれど、遠隔の地に居られたり、その他、經濟上、健康上、それの出來にくい人々のために、この部を設く。

・希望者は、その姓名、年齡、病歷、手記、感想、夢の記述などに、料金（十圓）を添へて當研究所にお送り下され度。分析診斷明細書を相當期日の後に送る。手記その他は絶對に他に洩らすことはなし。文字は明瞭に書かれたし。

・擔當者は研究所に御一任ありたし。それ〳〵適當の人々にふり向ける。

三、敎育部

・當研究所主催の講演會、公開講習會、演劇、その他。

・所員並に容員に對して他より依賴の講演又は講習會。

四、出版部

精神分析に關する雜誌及び圖書の出版。

五、研究會

・研究の發表とその討議を目的とす。毎月一回、第三月曜夕、　　にて開催その都度通知、出席希望者に對しては別に資格制限を設けず。會費は食費、會場費、通信費とも出席の都度、六十錢。（但し誌代を申受く。雜誌購讀は會員の義務とす。）

・雜誌のみに依りて研究の發表又は諸般の事業に參與せんと欲する向は特別誌友（直接購讀者）となるべし。

六、講習會

毎月一回、第一月曜夜、於研究所開催。當分主としてフロイド著書の精讀。會費二十錢。

特別誌友規約

一、本研究所在外研究會員を特別誌友と稱す。

一、特別誌友は本誌の豫約購讀者として半年分（一圓五十錢）又は一年分（三圓）前納の義務を有す。

一、特別誌友はその研究、感想、報告を、編輯部の了解を得て本誌上に發表することを得。

一、特別誌友は司會者の承諾を得て研究會、講習會に出席することを得。

一、希望者は購讀料金と共に、なるべく左記體裁の申込書を送られたし。

（御迷惑の箇所には記入を要せず。）

特別誌友申込書

住所

姓名

年齢

職業

經歷

感想

合本 單册『精神分析』（特輯題目及び定價）一覽表

東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七・振替東京七八八一七番

第一卷・上

- 創刊號（昭和八年 五月）「エディポス研究號」＊
- 第二號（同 六月）「フロイド喜壽祝祭劇記念號」
- 第三號（同 七月）「教育研究號」
- 第四號（同 八月）「夢の研究號」（第一）＊

（合本としては品切）

第一卷・下

- 第五號（同 九月）「兒童心理研究號（第一）」＊
- 第六號（同 十月）「社會思想・犯罪心理研究號」
- 第七號（同 十一月）「戰爭心理研究號」
- 第八號（同 十二月）「夢の研究號」（第二）

（合本としては品切）

第二卷・上

- 第一號（同九年 一月）「心理療法研究號」
- 第二號（同 二月）「女性心理研究號」
- 第三號（同 三月）「傳說研究號」
- 第四號（同 四月）「文學研究號」

金二圓五十錢（送料共）

第二卷・下

- 第五號（同 五月）「ドストイフェスキー研究」

（六月休刊・以下隔月刊行）

- 第六號（同 七・八月）「戀愛心理研究號」
- 第七號（同 九・十月）「性慾心理研究號」
- 第八號（同 十一・十二月）「夫婦生活研究號」

金二圓五十錢（送料共）

第三卷

- 第一號（同 十年一・二月）「兒童心理研究號」（第二）
- 第二號（同 三・四月）「宗教心理研究號」
- 第三號（同 五・六月）「自殺・情死心理研究號」
- 第四號（同 七・八月）「同性愛と異性愛」
- 第五號（同 九・十月）「家庭問題と親子關係」
- 第六號（同 十一・十二月）「常態及び變態の性心理」

金三圓（送料十五錢）

第四卷

- 第一號（同十一年一・二月）「性格改造研究號」
- 第二號（同 三・四月）「母性と妖婦研究號」
- 第三號（同 五・六月）「夢と幻覺研究號」
- 第四號（同 七・八月）「兒童分析と敎育研究號」
- 第五號（同 九・十月）「愛慾葛藤の諸問題」
- 第六號（同 十一・十二月）「道德の分析」

金三圓（送料十五錢）

第五卷

- 第一號（同十二年一・二月）「思春期の研究」
- 第二號（同 三・四月）「不良少年少女の心理」
- 第三號（同 五・六月）「生理と心理」
- 第四號（同 七・八月）「男性と女性」

＊印は單册としては品切、その他は在庫す。單册代價送料共各五十錢

大槻憲二著

戀愛性慾の心理とその分析處置法

菊版三百三十頁。灰色主調白文字高雅。
挿圖數葉。布裝函入美本。

（定價金二圓二十錢。送料十二錢）

杉田直樹博士 東京朝日新聞紙上に 本書を評して曰く――

性慾問題を眞面目に科學的に取扱はうといふ氣運が起らない限り、社會の陰慘な人事は何時の世迄もその暗い影で浮世の生活をじめじめさせることを止めないであらう。

私共は宗教よりも倫理學よりも此の性慾心理學一篇の知識の方が遙に端的に且人道的に世人の苦惱を除去し、社會風俗の秩序を醇化する基本的の力となることと信ずる。大槻氏は夙に雜誌『精神分析』を主宰し又フロイドの全著作を譯纂し、精神分析學の上に多くの貢獻をなしつゝある篤學者で、その熱心な態度は、多くの道學者が態と避けて見まいとする性慾心理のあらゆる課題を捉へ來つて、少しのいや味もなく又少しの卑しさもなく、極めて平易にのび／＼と、しかも學問的の尊嚴並に正確を失ふこともなく、述べ去り說き來つて凡ての男女を首肯せしめるに足る。其文筆の力は敬服に値する程で、種々趣味ある圖版を多數收める所にも著者の關心の該博と、親切な人間味とが視はれる。私にとつては少くも多年の待望が本書によつて充たされたやうな氣がして誠に快い。

本書の五大特色

一、戀愛性慾の心理が種別的にも年齡的にも、全般的に、且組織的に說いてあること。
二、一般人に面白く、專門家にも啓發的なること。
三、實例は大部分日本的材料にして、著者自身の實驗觀察に基くこと。
四、斯學先哲の意見を尊重しつゝ、然も獨創的見解と發見とに富めること。
五、圖版を多く挿入して趣味豐かなること。

本鄕區動坂町三二七（振替）東京七八八一七番
東京精神分析學研究所出版部

岩倉具榮譯

理想の家族

K・マンスフィールド短篇集

定價送料共金一圓九十錢　（四六判二百五十頁 布裝箱入美本）

精神分析學と露文豪チエホフとの影響を受けて、獨自の金屬的鋭さと可憐優美の光彩とを放つ英國現代文藝界の名花マンスフィールドの珠玉短篇は、從來、岩倉氏の名譯に依つて『精神分析』誌上に追次紹介せられて來たが、こゝにそれ等を纒めて待望の一書は遂ひに讀書界に送り出された。既發表のものは頁數その半に足らず、新發表のものにおいて殊に原作者の傑作を覗ふことが出來る。傳記と鑑賞案内とを添へ、かゝる親切の譯書はわが飜譯史上にも稀ではなからうか。

（口繪二葉）マンスフィールド及びその夫君ミドルトン・マリ

作品——ルフト鑛泉場。炎。逃避。風は吹く。この花。心理學。芹の漬物。ブリル孃。理想の家族。密月。新月灣のほとり。

附錄——

一、マンスフィールドの生涯（ミドルトン・マリ）

二、作品分析鑑賞案内（譯者）

大槻憲二著（增訂第三版）

精神分析概論

（定價送料共・金八十六錢）

本郷區動坂町三二七・（振替）東京七八八一七番

東京精神分析學研究所出版部

學問の世界性とエスペラント

學問は人類全體の共同の財産であつて、決して、一民族や、一國民の私すべきものではない。

☆……したがつて、學問上の重要な新發見や新創意は、必ず世界へ發表して、文化促進の助けとするのが、學者の義務である。

☆……ところが、その實行上、日本の學者は、一つの大きな困難に行當るのである。それは……

言語の問題である。ヨーロッパの學者達は、自國の言葉であるドイツ語、イギリス語、フランス語等で、その業績を發表してをり、それによつて文化に貢獻してゐる。

☆……が、日本人は、日本語が孤立してゐるため、これで發表したのでは、世界に認められるわけにゆかない。そこで、從來は**國辱**を忍んで外國語で發表したものである。科學日本の體面上甚だ情けないことであるが、それだけならば、文化の向上を願ふ者の態度として、堪へ得るとしても、外國語の習得に、多大の貴重な時間を空費することは、學問を愛する者にとつて、實に惜しんでも餘りあることである。

☆……外國語を讀み得るまでになる努力だけでも容易ではないが、讀むためだけに外國語を學ぶことは、まだやむを得ないであらう。そこで、せめて、最も困難な『外國語で書く』努力だけでも逃れる手段はあるまいか。この問題の解決策として、學界の一部に『學習に容易な……

國際共通語エスペラントを學說發表用語とせよ』といふことが叫ばれ、現に活用されてゐる。高象氣象臺は、毎年浩瀚な報告書を、この言葉で出し、多くの醫學者や、理研の一部の科學者達は、その業績の發表に盛んに、これを利用し、全世界の科學界から注目されてゐる。

エスペラントで發表すればエスペランチストでなくとも、ヨーロッパの學者は、自分の專門のことなら、容易に理解し得るから、決して看過される心配はない。

☆……語學の素養が相當にあれば、エスペラントで論文を書き得る程度に達することは、さほど困難でないから、日本の……

學者は、すべてエスペラントを學んで、これによつて、人類のために、大いに貢獻すべきである。

☆……エスペラントの學習法や學習書の選擇については、日本におけるエスペラント普及、研究の中心機關財團法人日本エスペラント學會（東京市本鄕元町）あてに照會すれば、答へてくれるはずである。

V. Jahrgang, Heft 4. Juli — Aug., 1937. Erscheint zweimonatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse“

(Hefttitel: Männlichkeit und Weiblichkeit)

Studien

Kritik und Methodik

Varia

Literarische Werke

Einführung in die Psychoanalyse

Neuigkeiten des In- und Auslandes

Preis des Einzelheftes, 50 sen

Tokio Psychoanalytischer Verlag
329, Dozakacho, Hongoku, Tokio, Nippon